

魔法少女リリカルなのは～踏み台、（強制的に）任されました～

妖刀終焉

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

神の娯楽のために踏み台転生者として転生させられてしまった主人公。

この物語は呪解のために主人公が原作に介入しつつも原作キャラに嫌われていく、そ
んな物語。

更新は不定期になりますのでご容赦下さい。

目

次

プロローグ

第1話

第2話

第3話

第4話

無印編

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

116 100 85 71 56 44

29 19 7 1

A,
s
編

第11話

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

最終話

237 224 212 197 185 173 158 144 130

プロローグ

第1話

——踏み台転生者。

かませ転生者、厨二オリ主、オリ主（笑）等々呼び名は様々だが、要は神様転生系の二次創作に登場する真のオリ主を引き立てるために踏み台となる者達。

自己中心的な言動が多く、原作キャラ以外をモブと軽視していたり、恵まれた容姿を手に入れたことでヒロイン達に好かれていると勘違いして馴れ馴れしくして嫌われていることに気がつかない。

能力は強力なモノ（例、バカ高い魔力や無限の剣アンリミテッド・ブレイドワーカス
ゲート・オブ・バビロン製や王の財宝）だつたりするが、修行を怠けているせいで能力に振り回されることも頻繁にある。

容姿としてはイケメンで銀髪や金髪のオッドアイ。まれにそいつが好きなキャラクターそつくり（例、エミヤ、ギルガメッシュ）だつたりすることもある。

ゲームでもやっているかのような感覚で生きているから命を軽視しており最終的には自暴自棄になつて犯罪を犯したりして物語の中盤辺りでフェードアウトするか改心してオリ主や原作キャラ達と和解するかのどちらかくらいしかないという本人にして

みればとつても嫌な、しかし妥当な扱いを受ける。

「というわけでお前に踏み台転生者をやつてもらおうと思うんじやが？」

理解不能理解不能理解不能。

気がついたら真っ白い空間で目の前の初老の男に話しかけられていた。
何これ？

「いやー、最近神の間で好きなアニメに自分が創った転生者を送り込んで物語を改変するものが流行つておつてな。ワシもそのブームに乗つかつておこうと思つたんじやよ。それに神様転生モノといえ巴正統オリ主と踏み台転生者じやろう？ 正統オリ主はさつき決まつたからお前にはかませ役をやつてもらおうと思つてな」
じやろう？ とドヤ顔で言われても困るとしか言えない。

転生先が分からぬ以上は危険か否かの判断もつかないがこれだけは分かる。この爺さんは俺にどこの誰かも知らない奴の引き立て役になれと言つている。

とりあえずそれは御免だと反論しようとしたが……あれ？ 口がパクパクするだけで声が出ない！

「喋ろうとしても無駄じやよ。お前に拒否権はないからな。また輪廻の中から魂探して引つ張り出してくるのも面倒じやし。……ふむ、特典は何にしようかの。まあ適当にその世界にあつたチートを適当につけておくか」

今適当つて言葉を2回使つたぞ!?　どんだけ投げやりなんだこの爺さん!

仕方ない。出来る限り面倒は避ける方向で行くか。

「あ、仮に知つてる作品だからといって原作介入しないのは無しじやぞ。介入しないといけない呪いをかけたからな」

その言葉を最後に俺の意識は暗転した。

とりあえず次にあの爺さんに会うことがあつたら一発ぶん殴ろうと心に誓う俺だった。



次に目が覚めたときには見知らぬ白い天井。内装を見る限りだと何処かの病院か。巨大な銀髪の美女に優しく抱かれて、同じく巨大なイケメンの男性に優しく見つめられていました。いや、二人が巨大なんじやなくて俺が小さいだけなのか。本能で理解した。この二人が俺の新しい両親なのだと。この二人から俺が生まれた

のだと。

「あうう……あー」

さつきと違つて声は出るもの、まともに喋ることが出来ない。赤ん坊になつたことによる弊害か。

とりあえずこの状態じや何も出来やしない。

(おーい、ちゃんと生まれて来たかー)

頭にさつきの爺さんの声がした。反応しても碌な事が無さそだし無視だ無視。

父親らしき人が俺の手をつんづんついてくるので握つてあげたらものすぐ喜んでいる。赤ちゃんに手を握られるのつてなんか嬉しくなるよね。

(聞こえておるかー? どつちでもいいがワシがお前につけた転生特典の情報を頭の中に送るぞー?)

転生先、魔法少女リリカルなのは

転生特典

・魔力S（成長すればEXも夢じやない）

・高い魔力にも耐えられる強靭な肉体。鍛えれば鍛えただけ強くなれる

・王の財宝（中身ありだがエアはかなり危険なので無し。非殺傷にも設定出来る

ゾ

- ・原作介入及び踏み台つぽいことしないとTS（性転換のこと）する呪い
- ・高性能デバイス

おい！ 4つ目！ おい！

何さらつと恐ろしい呪いかけてんだよ！ 性転換とか冗談じやない。

（呪いについては5歳の時にデバイス送るからそいつに聞くんじやぞー）

また一方的に言いたいことだけ言つてあの爺さんは連絡を断つてしまつた。

お父様、お母様。あなた達の息子は下手すれば娘になつてしまふそうです。

とりあえず分かつた情報だけでもまとめよう。俺が転生したのは魔法少女リリカルなのは。屈指の人気を誇る魔法少女系アニメ。高町なのはという普通の少女が魔法がある世界の住人の少年ユーノ・スクライアと出会うことから物語は始まる。無印編、A's編、STS編とシリーズ化している。

かわいい女の子、美しい女性が多く登場して二次創作も多い。

俺の能力は王^{ゲート・オブ・バビロン}の財宝^{カーボン}か。踏み台転生者がよく選ぶであろう典型的なチートスキルの一つだな。あくまで自分の蔵につなげるだけの能力、故に古今東西ありとあらゆる宝を集めたギルガメッシュが使うから意味がある訳で、一般人が持つても空っぽの蔵になつてたりする。これを誤解してよくミスをする踏み台も多い。

しかし中身ありなら宝具を数本ばら撒くだけでも反則級のパワーを誇る。上手く使

うことが出来れば色々応用は利きそうだ。エアなんてなくともデュランダル、ヴァジユラ、ハルペー、グングニル、グラム等々ありとあらゆる宝具の原点が収められているのだから強力な武器は幾らでもある。

問題は4つ目だ。なんて恐ろしい呪いつけてくれてやがるんですか！

俺は女体化願望も女装癖も無いし普通にノンケだし全世も今世も願わくば男のまま人生を終えたい。つまり強制的に原作介入及び踏み台役を強いられているんだ。とりあえず今俺が出来ることは一つ眠いから寝る。おやすみ。

第2話

恥辱に塗れた赤ちゃんプレイから5年後、あの爺さんの言葉通りに誕生日の朝、俺の枕の下に紫色の宝石がついたペンドントがおいてあつた。多分これが俺のデバイスだ。どうでもいいけど赤ちゃんプレイ好きつて10大危険性癖に入るやばいものらしいよ。

「詳しいことはこれに聞けつつってたよな……」

デバイスの起動つてどうやつてやるんだつけ。

宝石をつついてみたり裏返してみたり首にかけてみたりぶんぶんゴマのように回してみたりしていたら。

「あのおおく、おもちやじやねえんだがらもうちつと大事に扱つてくんねえか？」

宝石が点滅して喋りだした。声がなんか渋い。洋画の吹き替えとかやつてそうな渋さだ。踏み台つて女性A-Iのインテリジエントデバイスを使つてて、しかもデバイスにさえも嫌われてる印象があるけど、別にいいか。渋いおっさん声つていうのもなかなか味があつていいもんだ。

「あの、お前が俺のデバイスなの？」

〈そういうこつた。まずは名前つけてくんねえか?〉

やつぱ名前はないんだ。

ううん、口調からして『エミヤ』とか『ギルガメッシュ』とかは無いだろうし。

「……そうだ。エンペラー皇帝つてのはどうだらう?」

〈おつ、いいねえ。自分が一番つて野心表明か? そういうの嫌いじやねえぜ……つと

いけねえ、まだアンタの名前を聞いてなかつたな〉

別にそういうつもりでつけたわけではないのだけれど。

かみしろ
〔神代
劉牙〕

この『ぼくのかんがえたかつこいいしゅじんこう』みたいのが俺の名前、若い時はこれでもいいけど老人になつたら恥ずかしい思いしそうだ。あからさまなD.Q.ネームでなかつただけマシだと思おう。

〈……登録完了つと。これからよろしくな劉牙の旦那〉

「さて本題に入ろうか。俺がかけられたT.Sの呪いについて詳しく聞きたいんだけど」

〈気が早いな。早い男は嫌われるぜ? 何がとは言わねえけどな〉

何でもいいから早くして欲しい。こちとら男の象徴を失うか否かの瀬戸際に立たされてるようなもんなんだ。行動を起こすなら出来るだけ早めにしておきたいんだよ。

〈旦那が聞きたいのは呪いを解く方法だろ?〉

「そうそれ！　あるなんなら早く教えてくれ頼む！」

〈そのことについてはあるの爺から伝言を預かってるぜ。『呪いを解きたければ踏み台ポイントを集めるんじやよオオオーッ！』だとさ〉

「何故ジヨセフ？　そして新しい単語が出て来たぞ。踏み台ポイントって何だ？」

〈要は踏み台転生者としての役割を果たすと発生するポイントなんだとさ〉

「何ポイント集めれば俺は解放される？　期限はいつまでだ？　それについてのルール

はなんだ？　どれくらいの頻度でポイントを集めればいいんだ？」

〈ン――質問は一つずつしてくれねえか？　とりあえず順を追つて説明するぜ〉

皇帝は俺の疑問に一つずつ答えてくれた。

俺の呪いについてまとめると。

1、踏み台ポイントを1万ポイント集めれば俺は解放される。その後の原作介入云々
は俺の自由。

2、期限はA、s編終了時まで。

3、俺が踏み台転生者であることは誰にも知られてはいけない。他の転生者にも例外ではない。しかし転生者であることだけなら他の転生者にはばれてもいい。

4、どのくらいの頻度で貯めるかは俺の自由。最終的に1万ポイント貯まればいい。

5、現在のポイント総数を知りたい時は皇帝に聞けばいい。

6、TSしたら原作介入からは解放されるが男には戻れなくなる。

「……つと、そんな具合か」

ちやらんぱらんつぽく喋る皇帝エンペラーだが仕事はキツチリこなすようだ。

「1万ポイントか……」

一度にどれくらい貯まるかが分からぬからなんとも言えないな。

おつ、そういうや5歳の時つてなのはが公園で一人ぼっちで遊んでるんだつけ。デバイスが来るまで下手に行動を起こせないから遠くから見たり、ランニングや散歩の時にまれにそれ違つたりするくらいで話しかけたりは出来なかつた。同じ理由ではやってにも話かけなかつたな。

これからどうしようかと思考を巡らせていたらいきなり俺の寝室のドアが開けられた。

「お兄ちゃんおはよう！　そしてお誕生日おめでとう！」

「ファ！」

妹の突然の侵入で、驚きのあまり変な声が出てしまつた。

そして慌てて皇帝エンペラーを枕の下に隠す。

「今何隠したの？　エロ本？」

「なななな何も隠してないぞ？　それと5歳児がエロ本読むわけねーだろ」

妹の神代 智葉。
さとは。

俺と同じ銀色の艶やかな髪を腰の辺りまで伸ばしている美少女……もとい美幼女だ。軽くぶつちやけるとこいつとは血が繋がってない。

智葉が生まれてまもなく父親は交通事故に遭い、母親も出産後に衰弱死してしまい天涯孤独の身になつたところを智葉の両親の友人だつた俺の親父が引き取り養子にしたという壮絶な過去がある。無論本人には知らされていない。髪の色が同じこともあって智葉も兄妹だと思い込んでいた。

「そう……朝御飯できるからね～～」

とりあえず朝飯食つてから考えるか。



なのはに接触する前に能力確認をしようとしたところまでやつてきた。

王の財宝『ゲート・オブ・バビロン』やデバイスの威力を確かめてみよう。朝飯食つた後に作成したバリアジャケットも着てみたいし。

「結界張つてくれ」

〈OK〉

周りの景色の色が変わっていく。この空間は今だけ世界から隔離された空間となつたのだ。ここなら強い魔法をぶつ放しても周りに被害を及ぼすことはない。

「よし！ 皇帝！」

「あいよ！」

变身シーンは誰得なんで省略。

俺は銀髪だけにFF7のセフィロスの格好を元にした黒いバリアジヤケットをつ
くつてみた。手には金色で奇妙な意匠のリボルバー式拳銃が握られている。

「まずは、王の財宝！」

俺の背後の空間が歪み、そこから神々しい光を放つた武器が数本現れる。

試しに2、3本射出してみるとダイナマイトが爆発したような轟音とともに地面に小さなクレーターが射出した本数分だけ出来ていた。

「ヒュウーーッ！ すさまじい威力だなこりや」

皇帝の言う通り洒落にならない破壊力だ。これを掴んだり叩き落したり出来る湖の騎士は半端じやないな。しかし問題は真っ直ぐにしか飛んでいかないことかな。英雄王も原作だとやらめつたら撃ち込んでた記憶がある。迎撃は難しくもある程度の強者なら避ける事は出来るだろう。

今度は近くにあつた剣、エクスカリバーに似ているから多分グラムか原罪辺りだろう

メロダック

か、それを掴んで引っ張り出す。

手からずつしりとした重みが伝わり、神々しさ、美しさに心が奪われるような感覚を味わつた。気がつけば涙すら流している。

数回振り回してから蔵にしまい、また別の武器を手にとつてまた振り回してみた。他の剣、槍、棍棒、斧、鉢、と種類は様々。

これを10数回くらい繰り返した後に王の財宝を閉じた。ゲート・オブ・バビロン

全部使つてみるのは多分無理だ。一生かかつても終わらないかもしね。使いやすいのをいくつか厳選して使うことにしよう

「ふう……」

肩を軽く回してストレッチする。

夢中になつて武器を振つてたので腕がパンパンだ。

アニメや漫画の中でしかお目にかかるないような武器を自分で使つたり、好きな格好

をしてみたりと厨二心を刺激されるような経験が出来て感動だつた。

……これで踏み台なんて損な役回りでなければ最高だつたんだけどね。

（おいおい旦那あ、俺も使ってみてくれねえと困るぜ）

拳銃となつた皇帝から拗ねたような口調で話しかけられる。こいつの性能も確かめておかないとな。

こいつは弾丸を魔力で作るから魔力が尽きなければ実質無限に撃ち続けることが可能。

両手で拳銃を構えて引き金を引く。狙いは正面の木。

「おいおい……銃口がブレブレじやねえかよお〜」

「仕方ないだろ。生まれて初めて拳銃撃つたんだから」

デバイスとはいえ反動はある。俺の魔力を使つて作った弾丸は俺が的にした木から40cm程ずれた。

しかしこれだけでは終わらない。

ずれた弾丸は弧を描いて木へと命中したのだッ。

これぞ皇帝の真骨頂。撃つた弾丸の軌道を俺、もしくは皇帝自身の意思で遠隔操作出来るのだ。実質目を瞑つても相手に当てる事だつて出来る。王の財宝の精密性の低さをコイツで補うのだ。

さて、能力確認も終わつたし、死に行くか。



その後、魔力に強力なリミッターをかけて公園にやつてきた。

「おつ、あれか？」十年後が楽しみな面してやがる

「ああ」

思つたとおり。高町なのはが公園で一人ぼっちで遊んでいる。父親の士郎さんが護衛してゐる人を助けた際に大怪我をして入院してゐるんだつけ。とらハ3本編では死んじやつてゐるから幾分かマシだろうけど。

さて、なんて声をかけようか。

「よう、俺の嫁！」

(え?
誰なのこの子?)

とか思つてゐんだろうなあ。

しかし俺は心を無にして畳み掛けるぜ。

ニコボつぼく笑いかけてみる。

(何で顔が引き攣つてるの!? なんだか恐いよこの子)

何かすつごく怯えてる——ツ！？

「おいおい照れるなよ。そんなところも可愛いぜ」とおもむろに頭を撫でようとする。

おぼろろろろろろろろろろろろろろ！

スピードワゴンがいたら「こいつはくせえツー！ ゲロ以下のにおいがプンプンするぜツ——ツ！」と言われても文句の言えない状況だ。

「あうあう……」

となのはが泣きそうになつてしまつたんで今日はこれくらいで引き上げるか。

「おい！ 嫌がつてんだろう！」

なのはを背に黒髪の美少年が立ちはだかつた。

弱き者を背に強者の前に立ちはだかる者。人は皆、それを正義の味方と呼ぶ。

(なあ、こいつつてもしかして)

〈お察しの通り、こいつが正統オリ主だ〉

キタ——ツ！！

「お、おいモブが！ 俺となのはの邪魔してんじやねえぞ！」

なんというかませ台詞。恥ずかしい。場違い感が半端じやない。

「俺からすればお前がその子を虐めてるようにしか見えなかつたけどな」

ご
名
答
！

そんな君にはなのはにいいところを見せるチャンスをあげよう。

「うおらあ！ 死にやがれモブウウウウウウ!!!!」

「うおおおおおおおおおおおお」

俺は態と空振りして黒髪の少年のボディーブローをくらう。

あれ？ 思つてたより軽いぞ？

同じ転生者だしもつと思い一撃を覚悟していたんだけど、5歳児の一撃なんてこんなものか、仕方ねえ。

俺は自分の意思で思いつきり後ろへ吹き飛んだ。そしてそのままのびた振りをする。

「す、
す
ご
い」

「?? 何だつたんだ今の?」あ、ああ……。君、大丈夫だつた?」

「うん、大丈夫だよ」

• • • • •

• 100 •

「行つたか？」

へ行つたぜ。いや、清々しい程のかませつぶりだつたぜえ、

褒められたのに全く嬉しくないのって前世でも今世でも初めてかも知れない。その後二人は別の場所へ遊びに行つたそうだ。

「そうだ！ 今ので何ポイント貯まつた？」

10 ポイント

「……は？」

だから10ポイント

低すぎない？ あれだけやつてまだ1000分の一だけ？

俺は今日、10ポイント得る代償に大切な何かを確実に失つた。

夕飯の後に食べた大きめのチョコケーキはちよつとしよつぱかつた。

踏み台ポイント

現在 10. ポイント

第3話

なのはから確実に嫌われたあの日から数日後。俺は真昼間になる頃、海鳴病院に侵入していた。

なのはがオリ主と会つたからにはもう小学生になるまで近づくのは難しいかもしない。だから別のところで人知れずなのはからオリ主への好感度を上げてみようかなと思う。あとちよろつとやけくそになつた。

〈それと病院に行くのと何の関係があるんだよ?〉

「いいからいいから」

誰にも気づかれてないとはいえた声は出せないから小声で皇帝を諭す。

俺は現在王の財宝ゲート・オブ・バビロンの中にあつた気配遮断効果のある仮面と姿を消すことが出来るマントをつけて病院の中を闊歩している。そして手にはどんな鍵も開けることが可能な鍵とどんな怪我や病気も治す事が出来る靈薬がある。これらの道具で士郎さんの病室まで誰にも気づかれずに侵入して士郎さんを治療してしまおうと思う。

そうすれば

士郎さん全快

←

なのはが「オリ主君のお陰でお父さんが治るまで頑張れたよ」と感謝

←

オリ主は「なのはが頑張つて耐えたから奇跡が起こつたんだよ」と二人の仲はますます良くなる

←

高町一家は寂しがつてゐるのはと遊んであげてたオリ主に好意的になる

←

フラグが立つた！ フラグが立つた！

という図式が出来上がる……多分。

全く俺が得しない結果が生まれるが、功績を根こそぎ奪われていくのも踏み台の役目の一つだ。大なり小なりポイントは稼げるだろう。

「……か」

しばらく歩き回ると高町と書いてあるドアが見つかった。

ドアに耳を当てて他に誰かいなかを探る……うん、機械音がするだけで他には誰もいないようだ。

鍵が掛かつてるので最後の鍵（俺命名）でドアを開ける。

「失礼しますよ……うへえ」

士郎さんは全身に包帯を巻いて色々な管に繋がれている。所謂意識が重体という奴だ。さつさと治してしまおう。

靈薬の入ったビンを開けて、士郎さんに軽く、満遍なく振りかける。靈薬はまだ何本もあるけどだからって一本丸々使うのは憚られた。それに少量でも傷口を塞ぐのには事足りる。多すぎてもどうなるか分からぬし、ほどほどに、適量に。

「うつ……ううん……」

やつたねなのはちゃん！ お父さんが治つたよ！

でもはやつ、もう目が覚めたのか。効き目良すぎだろこの薬。流石はギルガメツシユが一生かけて集めた宝具の一つだ。プレシアさんの病気もこいつで治しちまおうかな。

「こ……こは？ 病……室？」

さて、俺はそろそろ退散させてもらおうかね。

踵を返してゆっくりとドアノブに手を掛ける。

「誰だ……そこにいるのは？」

……はい？

マサカ、ミエテルンデスカ？

「恭也か……？ 桃子……？ ……いや、小さいな……なの、は？」

まだ意識が朦朧としているのかはつきり視えている訳では無い様子。

気配遮断が弱かつたか？ それとも御神の剣士は気配遮断を破れるのか？

戦闘民族高町。パねえつす。

「先ず……よし逃げよう。

病室から出て廊下を早歩きで移動し病院から出ることに成功した。人気のない草むらまで着たら着けていた仮面とマントを脱いで藏の中にし仕舞つて一息ついた。

「……はあ」

「おつかれさん、今まで合計13ポイントになつたぜ」

皇帝から発生したポイントについて聞かされる。

3ポイント……か。相変わらず危険度と得られるポイントが割に合わない。裏で小細工してもポイントは低いのかな？

だとすれば本格的に動くべきは小学校入学してから、そして無印編がスタートしてから。それまでは修行に専念して力をつけようか。

「にしても、踏み台は踏み台で大変だなあ」

『踏み台を演じる』、『ハッピーエンドを目指す』。『両方』やらなくつちやあならないのが『旦那』の辛いところだな

なまじ結果を知ってるだけに出来ることならハッピーエンドで終わつて欲しいな。

プレシアさんとフェイトには和解して欲しい。プレシアさんの病気は薬でどうにかなるとして、アリシアはどうしよう。死者の蘇生って軽々しくやつてもいいもんなんだろうか。ううん、よくわからん。

今日はもう帰ろう。



私、高町なのは5歳。最近嬉しいことが2つもありました。

一つは新しい友達が出来たことです。お父さんが事故で入院してからは家族の皆は急がしくて、なのはのことを構つてなんて言えなくて。私が我慢すれば、と思って公園にいたけど、やっぱり寂しくて。

最近になつて変な男の子に変なこと言われたりして嫌な思いもしたけど、それを助けてくれる格好良い男の子がいました。

名前は折木 和人君つていいます。私に初めて出来た友達です。

もう一つは、なんとお父さんの怪我が治つて、近いうちに退院出来るそうなのです。お姉ちゃんに頼んで病院に連れて行つてもらつたら元気そうに笑つているお父さんが。

私は嬉しくて嬉しくて思わず泣いてしました。

「よかつたな、なのは」
「うん！」

和人君もお父さんの怪我が治つたことを知つてとつても嬉しそうにしてくれます。
お医者さんは「信じられない、奇跡が起こつたとしか思えない」と言つてとつても驚いていました。

そういうえばお父さんがとつても不思議なことを言つていました。病気が治つて目が覚めたら私と同じくらいの男の子を見たそうです。病院の人は誰も男の子なんて見てないそうですけど。

もしかしたら和人君が魔法とか超能力でお父さんを治してくれたり……なんてそんなことないよね。でもそうだつたらいいなあ。

「和人君と友達になつてからいいことが続いてるなあ」

「そんなことない。なのはがいい子にしてたからきつと神様がご褒美をくれたんだよ（間違つても俺を転生させた神様はそんなことしないだろうなあ）」

あの男の子もあれからこの公園に来なくなりました。もし來ても和人君が守つてくれるから、安心して遊べます。

それからお母さんやお姉ちゃん、お兄ちゃんともちゃんと話すようになりました。和人君も一緒に來てくれたお陰で、皆に今まで我慢してたこと全部話す勇氣が出ました。

お母さんもお姉ちゃんも「気づいてあげられなくてごめんなさい」って、お兄ちゃんは「放つておいてすまなかつた」って日々に謝っていました。私がちゃんと皆に言つていたらもつと違つた結果になつたかも知れない。言葉にしなくちや伝わらないこともあります。

私はどつても弱虫で、臆病者で。いつか和人君の様な優しくて勇気のある格好良い人になりたいって、気がついたら思うようになつてました。

「今日は何して遊ぼうか?」

「うんと、じやあ鬼ごっこ!」

「鬼ごっこ? 一人しかいないのにか?」

「じやあかくれんぼ!」

「同じだ」

「じゃあ公園の皆も誘おう」

ちよつと前までの私だつたらそんなこと出来なかつたかも知れない。

今日も日が暮れるまで和人君や公園の皆と遊びました。

こんな日がいつまでも続くといいな。

「だだい、ま、あ。」

疲れた。精神的にも、肉体的にも。

先は長い。今は録画したスクライドでも観て精神力を回復しよう。

「あら、おかえり」

テレビのある居間へ行くと銀色のふわっとした髪とルビー色の瞳をした美少女……の様に見えるが、れつきとした俺の母、神代 エリスが録画したドラマを観ていて。今年30歳になる筈なんだけど十代で通るだろこの人。

チツ、一足遅かつたか。これじやあスクライドが観れん。

「何処行つてたの？」

「……散歩」

「散歩好きねえ」

「ドラマいつ終わる？」

「今いいところだからあと一時間待つて」

母はどうやらテレビの視聴権を俺に譲渡するつもりはないらしい。最近は韓国ドラマに嵌つてるらしく、現在観ているのが『宮廷女官になつた少女が数々の策謀に翻弄されつつも強く生き抜こうとする』というお話。権力争いのドロドロした部分がなかなか

面白い。一週目は智葉と一緒に観てたけど母さんは何度も観直して今回で3週目。流石に俺も智葉も一緒に観ようとはしなかった。

仕方ないので部屋に戻つてこれからのことを考えよう。幼少期にやれることは粗方やつた。アリサ、すずかと会うには小学生になつてからの方が良さげだよな。いきなり見ず知らずの子どもがやつて来て会つてくれるわけない。嫌われる以前の問題だ。フェイエイトなんてどうやつて時の庭園に行けばいいことやら。はやてはまだ猶予もあるしいいだろう。

「お兄ちゃん？ 帰つてたんだ」

部屋のドアを開けようとしたら、智葉に声をかけられる。

「智葉か……」

「最近様子がおかしいけど、何かあつたの？ 誕生日もあんまり嬉しそうじやなかつたし。もしかして私があげた誕生日プレゼントが気に入らなかつた？」

誕生日プレゼント……ああ、あの蛇の抜け殻か。渡された時はビックリして腰を抜かしたよ。何処から拾つてきたんだろうあんな立派な抜け殻。財布に入れるとお金が入つてくるらしいけど1メートル位あるから入らないし。

現在は宝具を使つて壊れないように固定した後、去年にカブト虫を飼つてた虫かごを綺麗に洗つて、それに入れて部屋に飾つてある。

「違うよ、スクライド観ようと思つたら母さんが」

「ああ、テレビ占領してたの」

「それでやることがなくなつてな」

「それじやあさ、オセロやらない?」

「……そうすつか」

二人は夕飯までの時間をオセロで遊んで潰した。

熱中していたら思わず本気ガチでやつて智葉を泣かせてしまい、母さんに怒られた。

そして智葉の機嫌を直すために俺の夕飯の唐揚が三個犠牲になつたのだつた。
……本当にどうしてこうなつた。

そして時は進み、俺と智葉は私立聖祥大附属小に入学することになる。

第4話

聖祥大附属小学校へと入学、そして幸か不幸かあの三人娘と同じクラスに配属されることになった。

あのオリ主はわからん、名前知らんし。でも多分一緒のクラスだろうと思つてたら本当に同じクラスだつた。これはやり易い。その内あいつの能力についても調べておこう。

智葉は別のクラスになつたことに納得いかなかつたようだが、こちらとしては兄のみつともない姿を見せずに済むのでありがたい。

「よう俺の嫁達～」

「ゲツ！ また来た」

俺を見て顔を青くする多分美少女の部類に入るであろう金髪の少女、名をアリサ・バニングス。日米で大企業を経営する家の一人娘で本人もかなりの天才児だ。とらハ3にもアリサという少女は出てくるが……うん、とりあえず目の前にいるアリサとアリサ・ローワエルは関係ない。

彼女のまた来たという言葉通り、俺は何度もこの三人に言い寄つている。

「つれないこと言うなよ、まったくツンデレだなアリサは」「違うって言つてるでしようが！」

頭を撫でようとした手をアリサは侮蔑の表情で払いのける。

本気で撫でようなんて思つてないよ、あくまでポイント稼ぎのためだから逆に払いのけて貰わないと困る。こうやって言い寄るのは一体何度目になるだろう。半年を過ぎた辺りから数えるのは止めた。

今度は縮こまっているなのはに目を向ける。以前ほど怯えられなくなってきたけどやはり友好的な態度には見えない。

「恥ずかしがつちやつて、そんなところも可愛いぜ！」

「だからそうじやないって言つてるのにい」

「照れんなよ、可愛い子猫ちゃん」

なのは達は一斉にドン引きし始める。誰だつてそうなる俺だつてそうなる。

今ここで吐いてもいいですか。もしくは泣いてもいいですか。

最後に俺と目線を合わせないようにしている、月村すずかに顔を向けた。彼女も工業関係の会社のご令嬢で、アリサほどではないけれど頭がいい。『夜の一族』と呼ばれる吸血鬼の一族で驚異的な身体能力を持つている。吸血鬼といつても日光の下を平然と歩いているから型月やジヨジョに出てくる吸血鬼とは別のものだろうと思う。

「おう、すずか。そんな情熱的に見つめないでくれ。照れるじやないか」「別に……そんなことないけど（寧ろそらしてんんですけど！）」

「二人に嫉妬してるのか？ 安心しろよ、皆大好きだぜ」

「うう」

嫌がらせをする俺が言うのも変だが、三人とも、もつと冷たくにあしらえればいいのに。この手の嫌がらせは過剰に反応するから加害者側も面白がって止めないんだよ。

そして引き際も大事だ。なのははともかくアリサとすずかが本気になれば俺だけじゃなく家族にも迷惑が掛かる。やりすぎは禁物だ。周りにも嫌われないよう配慮しながらというのはなかなか難しい。俺の人生はこの9年間で終わりじゃないんだから、全てが終わつた後で、『周りは敵だらけでした』じや話にならない。

とまあ若干不安はあるものの、俺は順調にこの三人から嫌われている。ポイントもやつとのことで2000を超えた。

「ちょっと和人！ 見てないで助けなさいよ！」

「えつ、俺！」

「ああん!? またテメエか、このモブがッ！」

ちなみに俺がモブ呼ばわりしているのはこいつだけ。他是普通に名前で呼んでる。

だから周りからは俺と折木の仲がすこぶる悪いふうに見られてる程度に収まつてい

る。

「……まだだ」

いつものようにドアの隙間からお兄ちゃんのクラスを覗く。

今日もお兄ちゃんはあの三人にちよつかいを出していた。

お兄ちゃんがあの三人に言い寄っているのを知ったのは小学生になつて半年を過ぎてからだつた。その時はただの悪ふざけだと思つてなんとも思わなかつたけど、これでもう三年目。

おかしい。こんなことは許されない。

そうだ。これは夢なんだ。私は今、悪い夢を見ているんだ。目が覚めたとき、私はお兄ちゃんと一緒に公園で遊んで帰りに駄菓子屋に寄つて二人のお小遣いでちよつと贅沢なもの買つて（以下略）

何であんなことをしているのか聞きたいと思つたけど、なんだか恐くて聞けないや。

「お兄ちゃん……」

私の大好きなお兄ちゃん、私があげたプレゼントをどれも大事にしてくれるお兄ちゃ

ん、一緒に遊んでくれるお兄ちゃん、なんだかんだいって宿題を手伝ってくれる優しいお兄ちゃん、とっても強くて地球一かつこいいお兄ちゃん。

そんなお兄ちゃんがああいう風に他の女に笑顔を振りまいているのを見ると胸が苦しくなつて……あいつらに殺意が沸く。

あんなぽつと出のやつらに私のお兄ちゃんを渡してたまるか。

「あの」

ちょっとした気の迷いだよね。あいつらより私の方がよっぽど美人だよ。みんなお兄ちゃんを貶す様な態度は絶対にとらないし、私の方がお兄ちゃんといふ時間だって長いし、私の方がお兄ちゃんのことと何百倍も知ってるんだよ。

「あの！」

「煩いな誰!?

そこには教室に入れなくて困っている先生でした。
やばつ、もうホームルームの時間!?

「あなたこのクラスの子じゃないわよね?」

「あ……あはは……失礼します」

◆
すぐに正気に戻してあげるから、待っててねお兄ちゃん。私はいつだつてお兄ちゃんの味方だからね。

ふう、やつと今日の授業も終わつた。私立の小学校だけあつて前世の時とは比べ物にならないくらい難易度も上つてゐる。中学生までならなんとかなるけど一応予習は忘れずやつてゐる。予習といつても高校入試の問題だけね。

「おーい、帰ろ……いねえ」

「あの三人なら折木と一緒に先に帰つたぞ」

俺の後ろの席にいる枢木くくるき 篤夜あつや、通称ギアツチヨが俺の疑問に答えてくれた。こいつはなかなかいい奴だがちょっとしたことで怒り出す短気なところが玉に瑕。

「いつ？」

「授業終わつてお前が教科書かばんに詰めてる間」

と、こんなふうにいつもあの四人からは逃げられる。

嫌われすぎワロタ。

「全く、なんで折木ばかりモテるんだコンチクショーネーツ！」

ギアツチョをなだめた後に俺は学校を出ると家には戻らずに海鳴で一番高いビルの屋上へ移動。

「ふう、いい風が吹いてるなあ」

〈相変わらず旦那は高いところが好きだねえ〉

「いいじやないかよ。何もない時くらい好きにさせてくれ」

王の財宝から金ピカで無駄に凝った装飾の双眼鏡を取り出して海鳴の全域を見渡す。基本的に王の財宝の中に収納されているのは金ピカなものばかり。金色の力バーがかけられている書物に、金の糸で縫われている服。なにからなにまで金ピカ。

しかし見た目だけでなく性能もすごい、この双眼鏡は数km先の鳥の羽の本数までアップで見ることが出来るしピント合わせもそれほど難しくなく便利。最初は海鳴の地理を覚えるために始めたことだが、今となつては単なる娯楽。暇な時にこれで野鳥や動物の観察をして癒されている。

喫茶翠屋が目に入る。そういえば転生してからここに行つた事ないんだよな。コーヒートリームが絶品らしいから機会があれば母さんか智葉に買つてきてもらおう。

次に嫌でも目に入る二つの豪邸。言うまでもなくバニングス邸と月村邸。月村邸では猫が、バニングス邸では犬が大小様々放し飼いにされている。行つてみたいなーでも追い返されそうだなー。

〈おい旦那！〉

「何？」

皇帝エンペラーから切羽詰まつたような声で話しかけられる。こんなことは以前、部屋で藏の整理で出てきたデュランダルで素振りをしていたらノック無しで智葉が入つてきたとき以来だ。

〈その双眼鏡をゆっくり左へ移動させてみな〉

言われたとおりに双眼鏡を左へと移動させてみた。

「あれって！」

見えたのは下校途中と思われる例の四人組み——が黒服の男達に取り押さえられている光景だった。人気の無い場所にいるせいで叫んでも誰も助けに来てくれない。この距離じゃ俺が行つても間に合わないな。

あの四人のうち二人は大金持ちのお嬢様、身代金目的や会社関係のことで誘拐されても不思議じやない。全員を捕まえようとしているのは目撃者を無くすためかな。ナンバーは……流石に隠してあるか。

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝から今度は黄金虫の形をした追跡用のゴーレムその名も瑠璃丸（俺命名）

を取り出してあの自動車の追跡をさせるように命令して飛ばした。

こんなものまであるとは、芸が細かいぜ英雄王。

折木のやつは抵抗して自動車の外に逃げ出したもよう。携帯で何処かへ連絡した後に自分もあの自動車を追つていったのか。魔法で強化しているのか自動車を見失わないくらいのスピードが出ている。

「俺達も行くぞ」

〈あいよ〉

姿を消すマントと空を飛ぶ靴（俺に飛行適正が無かつたから使つてる）を着けて空を飛べば誰にも気づかれずに、かつ一直線で敵のアジトまで行ける。なんと素晴らしいことだろう。

「神代 劉牙いつきまーす！」

助走をつけてガンダムのパイロットの掛け声と共に勢い良く屋上から飛び上がる。空を飛ぶのは難しい。ちよつと集中力を乱せば建物にぶつかりそうで危険なのだ。最

初の頃は失敗してよく顔に擦り傷や切り傷をつくったよ。

折木にばれないように別ルートを辿つてあの黒塗りの自動車を追跡している黄金虫を見失わないよう飛ぶ。今日の夕飯まで片をつけちまおう

到着したのは誰も寄り付かないだろう廃工場。数年前まで何かを造つてたらしいが経営なんで閉鎖したらしい。秘密の隠れ家にはもつてこいの場所だな。

「人はどれくらいいるとか分かるか?」

〈今調べるぜ…………三人が監禁されてるだろう部屋に四人、他の部屋に十八人待機してやがる〉

なるほど、何かあつたときに援軍を呼び出す手筈になつてゐるのか。なかなかどうして隙が無い。

〈オリ主の野郎は三人がいる方へ行つたみてえだぜ〉

「じゃあ俺達は先に待機組みを片付けるか」

これくらいの修羅場を乗り越えられなきやこれからやつていけないぜ。

俺は正体がばれないよう仮面を被つて廃工場へと乗り込んでいった。



「……」んなもんか

首をコキコキと鳴らして武器をしまう。

全員油断してたお陰で三分で終わつたぜ。実質ほんと不意打ちだつたしな。

「ぐ……うう……」

「いてえよお」

「あが……」

目の前には死屍累々……は言い過ぎだな、全員生きてるし。しばらく再起不能だろうけどね。

拳銃などの重火器も全部破壊してある。といつても普通の拳銃に当たつても俺のチートボデイじや屁でもないんだよね。^{エンペラー}恐いから思わず避けちまうけどさ。

そして皇帝による不規則な動きをする弾丸で足を潰して行動不能にしたり、頸動脈に当てて気絶させたりと誰も知らないところで八面六臂の大活躍だつた。

繩で縛つておこう、俺は用心深いんだ。侵入した際に見つけた工場で使つてたと思われる頑丈そうなロープを持ってきてその辺に縛り付けておいた。

「向こうはどうなつてるかね、ちょっと見てくるか」

まさかやられてねえだろうな。

一抹の不安を覚えながら、俺は出来るだけ物音を立てないように三人が監禁されてい

るであろう部屋まで辿りつく。

『全くおめでたい頭してるよなお前え、態々化け物を助けようとするなんてよお～』

『何を言つてるんだお前は!?』

壁越しに折木と知らない男の声が聞こえる。

〈四人のうち三人はもう倒してゐてえだな。だが、どうやら中は現在進行形で膠着状態のようだぜえ〉

迂闊に動けば、それは人質の死を意味する。ここであの四人を死なせるわけにもいかない。

『ああ、知らねえよなあ、知つてるわけないよなあ。月村の一族が吸血鬼つて化けモンの一族だつてことをな!!』

なーる、あの男達は身代金だけが目的じやなかつたつてことか。

『何出鱈目言つてるのよ!』

『……アリサちゃん、本当のことなの。今まで秘密にしててごめん』

『そんな……すずかちゃん』

魔物娘とか人外美少女とか一種の萌え要素だと思うんだけどな。でもすずかは美少女吸血鬼つてカンジはしないんだよね。吸血鬼といえば金髪か銀髪だし、目も赤くないし、ほのかに見える犬歯もない。もしかしたらあるかもしけんけど、見えないんじや

あねえ。やつぱセクシーな犬歯がないと。

『化け物？　だつたら何だつて言うんだ！』

『和人君……』

『たとえすずかが何であろうと俺達の友達だ！』

『そうよ！　吸血鬼だから何だつて言うのよ！』

『すずかちゃんは私達の大切な友達だよ！　今までも、これからも！』

『アリサちゃん……なのはちゃん……』

彼女達の絆はすずかの正体だけでは揺るぎはしなかつた。寧ろ結束はより強くなつたのかも知れない。

『お涙頂戴エピソードをどうもありがとう、そしてくたばりやがれ糞ガキ！』

『みんなは下がつてくれ！』

男は拳銃を構え、折木は鉄パイプを構える。

向こうは拳銃を持つていて、あいつけデバイスも持たないでこの状況をどう打破するつもりだ。

男は何のためらいもなく折木に向かつて発砲した。皆がもうダメかと思つた時。

折木はそれを予知していたかのように鉄パイプで滑らせて弾丸の軌道を変えてやり過ごした。勿論後ろの三人には当たつていない。

『な……にイ!?』

『これで終わりだ!』

折木の鉄パイプの一撃は男のアバラへと命中。あまりの痛みに男は拳銃を落とした。それを見逃すわけもなく、拳銃を蹴り飛ばして男の手の届かないところまでおいやる。

『皆、早く逃げるぞ! さつきここのこととは警察に連絡した。もうすぐ来てくれる』

ポケットから取り出した十得ナイフで三人を拘束している縄を切つて、この部屋から連れ出す。

おつと危ない。俺も早くここから脱出したほうが良さそうだな。

「へ……へへ。せめてあの糞ガキだけでも」

何イイイイイ!? あの男、上着の裏ポケットに拳銃を隠し持つてやがったのか。しかもあの四人は逃げるのに必死でこのことに気づいてない様子。

仕方ないことだがこいつはいかーん!

「死にやが「チヨイナーツ!!」ガハツ!」

さつき鉄パイプをくらつた部位への飛び蹴りだ。こいつは痛かろう。「クソツ……ついてねえぜ」

男はそう言い残して意識を失つた。

「帰るか、腹減った」

後に皇帝エンペラーが折木の能力を解析したところ、折木には数秒先の未来が見える能力があると発覚した。
強すぎワロタ。

無印編

第5話

『助けて……』

『きつねうどん』、『きつねそば』ってのはわかる……。スゲーよくわかる。きつねといつたら油揚げだしな……。だが『たぬきうどん』、『たぬきそば』ってのははどういう事だああ〜〜つ!? のつかつてるのは天かすじやねーか! たぬきと天かすに何の関係があるつづーのよーーーツ! ナメやがつてあの食いもん超イラつくぜえ〜ツ!』

現在教室の掃除中にギアツチョと雑談していたところ、何か聞こえたような気がするんだがギアツチョのはた迷惑な咆哮によつてかき消されてしまつた。

時期的に考えて多分ユーノだと思うんだが。

「ちよつと黙つてくれるか? ちなみに『たぬきうどん』、『たぬきそば』は昔はイカを芯にして扇形に衣を膨らませて作つた天ぷらがのつかつてたもので天ぷらの大きさに比べて中身のイカが小さくて「化かす」つて意味からきてるらしいぞ。他にもうどんより黒っぽい蕎麦が主流で汁も黒っぽいからだとか、単純に天ぷらの種を抜いた揚げ玉「たぬき」から「たぬき」つて呼ばれるようになつたつて説もある」

揚げ物の話をしたらカツ丼食いたくなってきたな。大盛りのカツ丼注文してかつこみてえ。でも残念なことに体がまだ子どもだからあんまりたくさんは食べられないんだよな。あーカツ丼食いてえ、半分くらい食つたら七味とかゴマとか紅しそうがとかで味変えて食いてえ。

『助けて！』

このミズハスボイスは間違いなくユーノだな。三期では一人三役で大変だよね。とゆーか二期はキヤラが爆発的に増えるから仕方ない。

「お前物知りだな！」

「俺も気になつて調べたことがあるからだよ。それよりさつさと掃除終わらせるぞ」

なのは達に助けられるだろうし、今から直でユーノのところへいく必要はないな。行くとしたら夜中。ランニングのふりでもすれば家族にも怪しまれることはないでしょう。

問題があるとすればオリ主の方かな。三年ほど観察してなんとなくだがあいつは積極的に介入はしなさそうに見える。

つまりだ。無理やりにでも巻き込まないといけないだろうな。

それでも掃除当番とか面倒。二人ずつでローテーションだから今日やつたらしばらくはまわつて来ないだろうけど、それでも面倒。掃除をすると心も綺麗になるなん

て誰かが言つてたけど俺の心は荒んだままさ。

「お兄ちゃん、掃除終わつたの？」

「智葉？」

掃除を終わらせて教室を出ると廊下で智葉に会う。ギアツチヨは所属しているサッカークラブの練習に間に合わなくなりそうちから先に帰らせた。

「先に行つても良かつたのに。友達とは帰らないの？」

軽い疑問をぶつけてみると、智葉は首を横に振る。

「いいの、今日はお兄ちゃんと帰りたい気分だつたから」

「そうかそうか。愛いやつめ」

「えへへ」

智葉の頭を優しさをこめて軽く撫でる。下心なんて無い親愛の証を義妹は幸せそうに受け止めてくれた。

「ウエへへへ」

幸せそうというか、段々恍惚とした表情になつてきてるんだけど大丈夫かな。そろそろ止めよう。

「あつ……」

何故この世の終わりみたいな顔をする？

ふと思つたんだけど『なでポ』つてあるよな。あれは女性の頭を撫でるだけで相手が落ちると思わのがちだけど、そもそも頭を撫でるつて行為を相手に許すのなんて一定以上的好感度が無いとありえないよな。俺だつて仮に同年代でも赤の他人に頭を撫でられるのは遠慮したい。

「帰ろうか」

「うんっ」

夕焼け空の帰り道、二人で他愛の無い話、例えは今日の小テストはどうだつたとか、体育の50m走で記録を更新したとか、うちの担任の先生に春が来たとか。教頭のズラがずれてて笑いを堪えるのが大変だつたとか。

この踏み台人生においてこうやつて義妹とのふれあいは数少ない清涼剤だ。

でもいつか智葉から「お兄ちゃんウザい」とか言われるのだろうか。それだけならまだお兄ちゃんリアルと呼ばれてるだけマシかもしれない。「おい」とか「お前」とかで済まされるようになるかもしれない。現実の兄妹なんて幼い頃はともかく、高校生くらいになれば仲良くしてゐるほうが珍しいからな。生前は一人つ子だつたから出来る限り長い間仲良くしたい。

「ねえお兄ちゃん」

「んー?」

「私に隠し事とかしてない?」

「……」

さつきまでの和やかムードが一転シリアルスへ。智葉も真剣な表情でこちらを見つめている。夕日をバックにしているこの情景は傍から見ればまるでドラマのワンシーンの様にも写るかもしない。

「隠し事ねえ……」

「あるなあ、隠し事。というより隠し事の無い人間つているのか?」

「急にどうしたんだ?」

「誤魔化さないで。質問に答えて」

「なんなんですかこの状況は!?」

さつさと帰つて夜に備えたいんですけど。

「わかった、白状するよ。…………お前が半分残してたチョコケーキ食ったの俺なんだ」

「…………へ?」

結論、適当な事言つてやり過ごそう。

ケーキ食つたのは事実だけどね。

「あ、あれ食べたのお母さんじやなかつたんだ……(お兄ちゃんと間接キス……私が口つけたものがお兄ちゃんの中に……うへへへ)」

怒られると思ったんだが逆に戸惑っているふうに見えなくも無い。あとなんかにや
けてないか。

その後は時々「うへへ」とか呟きながら心ここにあらずの状態で話しかけられること
はなくなつた。

よくわからんが誤魔化せた……のか？



「皇帝、^{エンペラー}首尾のほうはどうだ？」

〈ジュエルシードの反応はまだないぜえ。旦那の黄金虫の方はどうだい？〉

「いいや、まだ知らせは無い」

俺は部屋のベッドに寝転びながら時が来るのジャージを着て待つている。ユーノ^{エンペラー}が
預けられている動物病院には瑠璃丸に見張らせ、ジュエルシードの反応については皇帝
を探らせて いる最中だ。

「あつ、そうだ」

〈どうかしたか？〉

「俺の魔力つてリミッターかかつてるよな」

「かかつてゐるぜ、旦那のご要望どおりにな。今のはリミッターかけてSくらいはあるんじゃねえか」

魔力についてはAAA～Sくらいあれば今のところは充分過ぎる。けど問題は……。「身体能力のリミッターもつけられないか？」

「肉体へのリミッター？ そりやまだどうして？」

不足の事態に備えてというのもあり、デバイスがきてからみつちり鍛えすぎたかもしれない。新しい魔法を開発したりや新しい戦法なんかもいろいろ考えてはいるものの王の財宝の威力が強すぎて使い道はあるのやら。

自分で手加減すれば済む話かもしれないけれど戦っている最中に熱くなつてうつかり本気になる危険性がある。実際それで智葉泣かしてはるし。

「うつかり本気出して勝つちまうわけにはいかんだろう？」

ハアと深い溜息をつく。

「負けるわけにはいかない」だつたらカツコいいんだけど「勝つわけにはいかない」……か。自分で言つて悲しくなつてきたよ。

「かーつ、悲しいなあおい。……出来ないことも無いぜ」

能力くらい選ばせてくれてもいいじゃない。王の財宝だつて無敵の能力ではないんだ。^{アンリミテッドブレイドワーカス}無限の剣製は言わずもがな、ベクトル操作による反射なんかも天敵だ。相

手の武器を奪える奴なんかも恐ろしい。

ちょっと使いづらいし、どうせチートにするんだつたらだつたら空想具現化とかゴールド・エクスペリエンス・レクイエムとかラツキーマンの能力とかミストバーンの能力とか安心院さんの一京オーバーのスキルみたいな方が応用も利くし良かつたな。とりあえず身体能力にもリミッターをつけて本来の45%。わかりやすく言うと、一般の中学生レベルまで身体能力を落とした。

「むつ!?

〈おい旦那ア!〉

皇帝エンペラーも俺と同じくジュエルシードが発動したことを感じ取ったようだ。

「よし行くか!」

家族には眠れないからランニングしてくると言つて急いで家を出る。軽く準備運動をしてから全速力で走つて動物病院へ走つていった。

「さて」

ズば抜けた運動能力のお陰でそれほど時間もかからずに目的地へと到着。既に何か大きなものにぶつかって壊された形跡があちらこちらにある。

「グオオオオオオオオオオツ!!

「うわっ!」

俺は咆哮に驚いて思わず近くの柱に身を隠した。咆哮の主は黒くて大きな化け物。

もしかしたら見えないだけで何処かになのはが隠れてるのかもしれない。

「皇帝、エンペラーこの場に俺以外の人間は何人いる?」

「……一人、だな」

やつぱりか、あーくそつ。予想していたことではあるが、実際にこうなると腹が立つ。この場に折木はいないとということはだ……あいつ、この状況を放置するつもりだな。「セットアップだ。それと今からじや遅いかもしれんが結界も頼む」

「あいよつ」

俺はバリアジャケットをに換装し、ゲート・オブ・バビロン王の財宝から四本の黄金の角、四つの黄金の覆いがついた盾を取り出した後に跳躍し、化け物の正面に立ちはだかる。ちらつとだが化け物の向かう先になのはとフェレットが見えた。

「えつ、神代くん!」

「おおつ、無事だつたか俺の嫁!」

化け物の衝突は金色の盾によつて防がれて、弾き飛ばされた。なにせあのカラドボルグの一撃を受けても凹みもしなかつた盾だ。そう簡単には破られまい。そして踏み台らしくなのはへの嫁呼ばわりも忘れない。

「あの、誰かは存じませんが時間を稼いでくれませんか!? ちょっとだけでいいんです

！」

「いいぜ！ ちよつとと言わば一日だつて耐えて見せらア！」

弾かれてもめげずに向かつてくる化け物に適当な宝具を2、3本射出して黙らせる。

「レイシングハート！・セットアップ！」

そう言うと後ろが光つて、なのはがセットアップしていた。小学校の制服を基調にした白いバリアジヤケツトだ。

どうでもいいけど宝具の爆発音で見逃した――――!!

おつと化け物が体勢を立て直して今度は触手を伸ばして襲つてくる。いや、男に触手とか誰得なんだろうか。

「ふははは！ さあ、開幕といこう！」

ギルガメツシユの台詞とともに王の財宝の宝具をやたらめつたら撃ち出し、化け物の触手は消し飛ぶ。それだけでなく本体も3分の2くらいふつ飛んだ。結界あるしこれくらいやつてもいいよね。ちよつとスカつとする。

〈スタンバイレディ〉

「リリカルマジカルジュエルシードシリアルXXI、封印！」

残つた3分の1はレイシングハートから射出された光に飲み込まれ、後にはジュエルシードのみが残つた。

なのははバリアジャケットを解除した後に俺もバリアジャケットを解除する。この場にいると面倒なことになりそうなので場所を公園へと移した。

「おいフェレット。あれは何なんだ？」

俺の質問に対してもユーノはこれまでの経緯を話してくれた。本当は知ってるけど知つてたらおかしいし知らない振りだ。

あの宝石、ジュエルシードのことだが、それを護送している途中に謎の襲撃にあい、そのままにジュエルシードがこの地球に落ちてきたりしたこと。

「ごめんなさい。僕のせいだ……」

「そんな、ユーノ君のせいじゃないよ」

その後、何やかんやでなのははユーノの手伝いをすることに決めたようだ。「俺も手伝うぜっ」って言つたら「ああ……そう」とものすごく微妙な顔をされて返された。絶対にお呼びでない状態だよ。

これくらいでは泣かないぞ。

「ふう、これからどうしよう」

なのははと別れる前にユーノにいろいろ質問されたが、俺はなのはと同じく偶然素質があつて、偶然デバイスを手に入れたつてことにしておいた。なのはだつてそうだつたしまず疑われることはない。

〈ひどいぜ旦那ア。俺の出番ねえじやねえの〉

家への帰路の途中に皇帝から文句を垂れられる。

「仕方ないじyan。お前の能力は明らかに隠密向きだ」

皇帝には悪いがあんなデカブツを正面きつて相手にするのなら火力重視だ。コイツの能力はどちらかといえば不意打ちの方が向いてる。

「そういやお前から見てなのははどうだつた?」

「ンー……一言で言えばダイヤの原石つてやつか? あれだけのポテンシャルを秘めてるんならきちんと訓練を受ければどれだけのものになるか、って思っちゃうな やつば主人公つてすごいね。基本皆才能の塊だよ。天然チートつてやつ? まずは帰つてからこれからについて考えよう。

いいぜ折木。テメエが何もかも無視して平穏な日常を送ろうっていうのなら――

――まずは、その平穏をぶち壊す!!

第6話

なのはが魔砲……じゃなかつた魔法少女になつた次の日。俺はいつものように教室に入り、三人娘の会話に無理やり参入するという恒例行事を行う。

「何の話をしてたんだ？ 俺も混ぜてくれよ」

「じゃ、じゃあまたあとでね」

「うん」

「また来た」

俺が来た途端に楽しいおしゃべりは無くなり蜘蛛の子散らすかのごとく皆席についた。俺はあとどれくらいこの作業を続けていかなければならぬのか、考えると頭が痛くなり気がおもくなる。

今日は八束神社で犬にジュエルシードがとりついて暴れまわるんだつか。

授業中は気分転換にノートに新しい魔法のアイディアでも書き連ねたりしてみる。ちなみに使うのは宝具のペン。書いた人物が許可した相手にしか見ることが出来ない魔法のインクのお陰で傍から見たら必死にノートを書いてるようにしか見えないだろう。

魔法には魔力を炎や雷に変えて放つことが出来る魔力変換なんてものがある。資質のある者（フェイトやシングナムなんかが当てはまる）は魔法抜きで使用可能な使い勝手のいい魔法だ。しかし資質が無くても訓練すれば俺にも出来ないことは無い。

魔法を使つてみて知つたのは集中力も大切だけど一番重要なのはイメージ。エミヤも言つてたな『思い描くのは常に最強の自分自身』だつて。

宝具の中には炎や雷を起こせる武器なんて数え切れないほどあるし。水……いやシャボン玉なんてどうかな。シーザーみたく石鹼水を服に仕込み、波紋じやなくて魔力を通して自由自在に操ることが出来るシャボン玉。まさか敵もシャボン玉で攻撃していくなんて思わないだろう。相手の視界を遮つたりシャボン玉に閉じ込めて捕獲なんていうのも面白そう。

他には、そうだな。飛行靴無しで飛ぶ方法とかも考えてみよう。なのは達のような飛行資質は無くともツナみたいに炎なんかでジェット噴射で空中を移動したり、月歩で空を蹴つたりとか。

やばいな。考えたら止まらなくなってきた。授業中も寝てる暇なんて無いぞ。でも漫画だけじやなくて自分のオリジナルも考えてみようか。

最終的に三人娘への嫌がらせ以外は一日中魔法のアイディアをノートに書き連ねて終わつた。ノリノリで書いていたらノートが半分近く埋まつていてことに放課後に

なつて気がつく。

……ふと思つたんだけどこれつて、黒歴史ノートじやね？『エターナルフォースブ
リザード！ 相手は死ぬツ！』みたいな。

「お兄ちゃん、何見てるの？」

「見るなあーーツ!!」

「きやあ!?」

慌ててノートに覆いかぶさるようにして隠す。そして冷静に考えてみると俺以外にはこのノートは白紙にしか見えないことをを思い出してしまつたと後悔した。

「どうしたの？ 何があつたの？」

声でわかつていたが、後ろにいたのはやっぱり智葉だつた。ノートを見ていたらいつの間にやら後ろに回り込んでいたようだ。

「あ、ああ。ノートの字が汚くてな。見られたくなかったんだよ」

「そうなの……（あやしい）」

不振な行動をとつたせいで逆に智葉の猜疑心を煽つてしまつたようだ。

「……ちよつと見せて」

「うん」

智葉は一瞬意外そうな顔をした後、俺のノートをバラバラめくつて内容を確かめてい

る。

「……白紙？」

「あーすまん。ノートをとつてないことがバレるのがちよつと恥ずかしくてさ。さつきのは智葉に驚いて適當なこと言つて悪かつた」

「……そう（やつぱりどこからめくつても何も書いてない。お兄ちゃんは神経質なところがあるし、流石に今回はきのせいかな……）」

どうも最近の俺は少し周りを警戒しすぎて逆に不自然になつてる節があるな。まだ序盤だチャンスはいくらでもある。自然に、かつ確実にポイントを稼いでいけばいいのだ。



どのタイミングでジュエルシードが発動するかよく覚えていないので、放課後は家に帰つたあとすぐに八束神社の近くに身を潜めて時が来るのを待つ。

しばらくするとなのはがユーノを肩に乗せて階段をかけて行くのが見えたので、なのはより少し遅い位のタイミングで俺も階段を駆け上がる。駆け上がつた先にいたのはジュエルシードによつて凶暴化した犬。そしてその飼い主と思しき女性が気絶してい

る。犬は全身が黒く、鋭い牙を持つていて目が4つある。これはもう犬じやなくて別の何かだ。

なのはが「レイジングハートの起動の言葉つて何だっけ?」とピンチだつたから俺が颯爽と一人と一匹の前に出て宝具を一艇犬にぶち込んだ。

「ギャイン!?

適当に射出したのでわからなかつたが、どうやら爆発するタイプの宝具だつたらしく、犬に衝突して破裂した。ものすごく痛そうに呻いている。非殺傷にはしてるけど爆発とかは大丈夫なんだろうか。

「ハツハーツ! 畏み掛けるぜ!」

俺は追撃の手を緩めずに犬に宝具の雨を降らす。元が普通の犬なだけに俺の中の良心がめちゃくちや痛んだが、心を鬼にして攻撃を続ける。もう後戻りはできない。俺はもうこの道を進むしかないのだから。

後ろをチラつと見たら俺の容赦の無さになのはがドン引きしていたのが見えた。そしていつの間にやらバリアジャケットに着替えていた。

俺が少し葛藤していた間になのはは起動パスワード無しでレイジングハートの起動に成功して、ジュエルシードシリアルXVIの封印に成功した。

「ねえ劉牙、さつきの力任せな戦い方はよくないよ。せつかくすごいレアスキルを持つ

てるのに。それにバリアジャケットにも着替えないで戦うなんて危険すぎるよ」

「うつせえなあ。勝つたんだからいいじゃねえかよ」

ユーノの言うことが100%正しいのだが自分がやること成すこと全て正しいと信じて疑わぬのが踏み台クオリティ……だと思う。しかし王^{ゲート・オブ・バビロン}の財宝の最も効率のいい戦い方が道具の射出だというのもまた事実。難しいところだ。バリアジャケットの件はただ単に忘れてただけ。

ユーノからの忠告も無視して唯我独尊を貫く俺を見てまたなのはの好感度は下がつただろう。ヒロインズに嫌われるのにはもう慣れたよ。俺は呼吸をするように原作キャラに嫌われるのだ。

そしてやはり折木は来なかつた。あいつをどうやつて舞台に立たせるかが問題だ。今のところ考えても全くアイデイアが思い浮かばない。あいつが運よくジユエルシードを拾つてフェイトに「それを渡してください」みたに脅されて、フェイトがまともに食事していいせいで顔色が悪い事を折木に気づかれて折木の家に食事することになつて。フェイトがうつかり警戒を解いてジユエルシードのことを話してしまい、お人好しにもフェイトのジユエルシード集めを手伝う、なんて上手い方法があればいいんだけどなう。三人娘が誘拐された時に救出に行つてたしお人好しである事に間違いないだろうと推測できる。

そういえばフェイトつてもう海鳴に来てるんだろうか？

なのはと分かれて帰路についた俺は遊んでいる子ども達がまばらになってきた公園で皇帝に聞いてみる。

「あるぜえ～。旦那となのはの嬢ちゃんを除くとなのはの嬢ちゃん並の反応が二つだ」待て、それだと計算が合わないんだが。仮にフェイトとアルフが来てたとすると。

「オリ主は？」

「最近になつて反応しなくなつたな。多分リミッターでもつけてるんだと思うぜ」

全く、人が必死になつて頑張つているの……に……ん？

何かおかしくないか？ 今まで自分のことばかりで失念したが、何故あいつは原作に介入しないんだ？

俺は呪いがあるから原作介入せざるをえない状態だ。

じやああいつは？

「皇帝、あいつが原作介入しないことによるペナルティみたいなのはないのか？」

「……俺は旦那の情報しか与えられてねえからなあ。向こうのデバイスも同じだろうな」

考えられるとしたらと俺はいくつか仮説を提示する。

1、俺と逆に原作介入するとペナルティが発生する

2、あいつは自分にかけられた呪いについて知らされていない

3、あいつは俺と違つて呪いはかけられていない。現実は非情である
 1はおそらくない。あの神の目的は原作の改変だつた筈だから原作介入は寧ろ推奨している。

◆
 2も可能性としては低い。あの神がいくら適當だろうとあいつにもデバイスが送られてきたのだから説明くらいしているだろう。

すると消去法で考えて3が残る。これが事実だとすればと思うとふつふつの怒りが煮えたぎってきた。俺が苦悩して恥をかいて踏み台なんて損以外の何者でもないことをやつてている中であいつは何事も無く平和に暮らしている。こいつはめちゃ許せんよなあ～～～。

それから数日経つて日曜日、今まで変わったことといえば知らない間になのはが新たなジユエルシードを二つ手に入れたこと。この経過に関しては全くわからん。原作知識も要所要所しか覚えてないし。

俺は現在、とある人物に会つて交渉をしている。

「君は……普通の石とは違う珍しい石を持っているそうだね？」

「な、何でそのことを!?」

「ひとつ……それを私に譲つてくれると嬉しいのだが」

「そんなこと言われても……」

交渉相手というのが翠屋JFCでゴールキーパーをやっている少年。こつちは全く面識もないが彼がジュエルシードをマネージャーの子にプレゼントした際に暴走してたいへんなことになるから先に回収してしまおうと接触したのだ。

「……なるほど、誰かにプレゼントする予定だったのかな？ 例えば女の子」

「つ!?」

「団星か。ならその石の代わりになると交換でどうだろう？」

俺はポケットから赤い宝石をあしらつたペンダントを取り出す。これも王の財宝ゲート・オブ・バビロンの中にあつたものだ。これ一個で海鳴という俺ん家の危機を防ぐことが出来るのなら安いものだ。

「ただの石を渡すよりブローチやペンダントのようなアクセサリーを渡したほうが女の子は喜ぶんじやないかな？」

「うつ。でも何でこれとそんな綺麗なペンダントを交換してくれるんだ？ これ、拾つたものだよ？」

「ふむ、訳あつてその形をした石を探してゐるんだ。流石に訳までは話せないけどね。悪い提案じゃないと思うよ?」

「で、でも……」

ええい仕方ない。最終手段だ。

「俺の目をよーく見るんだ」

「え、目を……?」

「そう目だ」

「あ～……あ……」

軽い催眠術だ。数秒間ほど意識が朦朧とするだけで特に後遺症も無い。その間にポケットの中にあつたジユエルシードとペンダントをすり替えて、ついでに記憶も改竄しておこう。最初からこの方法でやつたほうが早かつたな。

「はっ!? 僕は一体……?」

「そろそろ試合の時間じゃないのかな?」

「そうだつた! ありがとう! えーっと……」

「名乗るほどのものじやないよ。そんなことより早く行かないと

「うん!」

キーパーの子は駆け足でサッカー場へ走つていつた。記憶の改竄には成功していた

ようではほつとした。

「皇帝、^{エンペラー} ジュエルシードを封印するぞ」

「あいよ！ ジュエルシード封印！」

結構あっさりだつた。ともかくこれで危機は回避できた。これをなのはに届けて……いやこいつを利用すればオリ主を舞台に上げることが出来るかもしれない。

そして今、折木はなのは達とは一緒にいない。何たる偶然、天は今俺に味方している。

「よしつ」

俺は頬を叩いて気合を入れなおした。

ここでサツカ一場へ行つてポイントを稼ぐのもいいが、細かいポイントはあとでも獲得できる。今回ほどでかく狙う兼憂さ晴らしといこうじゃないか。

俺が行つたのは折木が買い物や散歩によく通る道。そして何と都合のいいことか、双眼鏡で見たところあいつは今買い物帰りの様子。折木の家もフェイトのマンションもはやての家も下調べをしておいて良かつた。ここにきて双眼鏡による観察が生きたな。気配も魔力も感づかれぬよう遮断している俺に死角なし。

「皇帝^{エンペラー} フェイトのマンションのほうにこのジュエルシードの反応をとばすんだ」

「なんだよ、せつかく手に入れたジュエルシードを渡しちまうのか？」

「俺は元からジュエルシードなどに興味は無い。おそらくこいつを使つても呪いは解

けないだろうしな。俺にとつて『呪いを解く』ことこそ至高。あとは人死にさえでなければどうでも良いのだあ」

「あ～何だ。とにかくこいつの反応をあつちのマンションのほうにとばすぜ」

「ついでに俺の身体能力のリミ解（リミッター解除の略）も頼む。80%くらいで」

なのははジユエルシードに気づかずフェイトは今まで気がついただろう。

「そして……これでもくらえ！」

五光烈華

俺は投球ホームから身体を最大限に捻つてジユエルシードを折木目掛けて投げた。色んな怨念を込めて放られたジユエルシードはジャイロ回転しながら直進し折木の顔に直撃した。

『あだつ!?』

「よしつ」

愉快痛快奇奇怪怪。とつてもスカツとした。最高の気分だ。人の不幸は蜜の味とはよく言つたものだ。

『こりや一体何だ?』

『スマスター、気をつけてください。封印されではいますがかなりの魔力を秘めています』

あいつジユエルシードについて知らないのかよ。原作知識なしタイプか。しかし何

かが起こつてることくらいは気づいていただろうに。

『ふくん、こんな石つころがねえ。本当なのかデイア?』

『へい、このアルカディアの性能をお疑いですか?』

皇帝に不満があるわけじゃないが何であいつのデバイスのA-Iは女声なんだよ。せめてどつちかに統一してくれよ。

〈旦那、来るぜ!〉

「おう」

俺は念のため近くの草むらに身を隠した。

空から黒く露出度の高いバリアジャケットを着た金髪ツインテールの少女と赤い大型犬……じやなかつた狼が折木の前に降りてくる。フェイトとアルフだ。

……いやあの、いくら人通りが少ないからって魔法の秘匿くらいしなさいよ。

『その石をこちらに渡してください』

『言うこと聞かないとガブツといくよ』

『だ、誰なんだ』

『もう一度言います。その石を……』

フェイトがそう言いかけると時間が止まつたかのように全員が沈黙しだした。

『あ、あの……今のは……』

『腹、減つてゐるのか?』

『もう! だからちやんと、飯食べないとつて言つたんだ』
なるほど、腹の虫がなつたのか。

『わつ、犬が喋つた!』

『狼だ! というかさつきも喋つてただろう!』

『そうだ。俺の家で何か食つていかないか? ちょうどこれから夕飯作ろうと思つてた
ところだし』

向こうは向こうでもうシリアルスマードはぶち壊されてるしこの調子なら放つておいて
も俺の思惑通りになりそうだ。帰つて英気を養おう。俺も腹減つたし途中でチヨコ
でも買つてくか。



◆
お兄ちゃんが朝早く家を出たのが気になつてついてきたけどよくわからない一日
だつた。

お兄ちゃんはそれほどサツカーハズなのに真っ先に行つたのが小学生チームの試合があつたサツカーフ。あの雌豚どもに会いに行くのかと思つて腸が煮

えぐり返つたけど雌豚どもには会わずに選手の男の子に会つていた。

『お兄ちゃんはもしかしてウホツな人なの!?』と心配になつた。だつて顔近づけてるんだもん。キスとかしてないよね!? そうだと言つてよバーニィ。

会話内容までは聞こえてこなかつたけどお兄ちゃんが綺麗な青い石と赤い宝石がついたペンドントを取り替えてた。男にあげるんだつたら私にプレゼントしてくれればいいのに。この前の私への誕生日プレゼントはクマの人形だつたのに。でもお兄ちゃんがくれたものなので一生大事にします。

そのあとは何かをプロ野球選手みたいな投球ホームでどこかへ投げていた。遠かつたから何かまではわからなかつたけど、あまりのカツコよさに一瞬気が遠くなつてしまつた。お兄ちゃんカツコいいよおにいちやんがジャイ○ンツに入団したらエースで四番間違い無しだよ年俸5億は余裕だよ新人賞とか総なめだよプロ一年目で絶対メジャーにお呼びがかかるよ。

そうか。お兄ちゃんはあの石を探してるんだね。

頑張ろう。頑張つてあの青い石をお兄ちゃんにプレゼントしよう。

そうしたらお兄ちゃんも私を見直してくれる筈。あんな雌豚なんかに惑わされたお兄ちゃんの目を覚まさせることが出来るかも知れないんだ。

第7話

(何がどうなつてゐる……?)

劉牙が真つ先に抱いた感情が疑惑。

朝登校して三人に話しかけようとすればそこにアリサ・バニングスの姿だけが無い。遅刻かと思つてそのまま何もせずに席についたがチャイムが鳴つても彼女が来る気配が無く。そのままホームルームが始まつてしまふ。今まで彼女が風邪をひいて休んだ記憶が無いし、無断欠席したことも無い。なのはもすずかも折木も他のクラスメイトもそのことに不振を抱いていた。

ホームルームで教員から彼女が昨日の塾の帰りに交通事故にあつたことがクラス全員に説明される。彼女が乗つっていた車が横転してしまつたらしい。幸運なことに運転手もアリサも軽症で済み、現在は念のためにと検査のため一時的に入院をしているとされる。異常が無ければ近いうちに学校に復帰できることだろう。

その二日後、今度は月村すずかが同じく交通事故に遭つた。今回は教員から詳しく話されなかつた。ということはあまり好ましくない状況だということが一部の利口な子どもには想像できよう。

劉牙が独自に調べたところ自宅でかかりつけの医者に観てもらっているようだ。吸血鬼故の回復力のおかげで想像していたよりは元気なようだ。人間ならこうはいかないかもしない。

(さっぱりわからん)

勿論彼も飽きるほどとまではいかなくとも魔法少女リリカルなのはというアニメには目を通したし、二次創作も何作品か読んでいた。自分がいることによるバタフライエフェクトのことも当然覚悟している。していても何一つ原因がわからない。考えられるとしたらジュエルシードによるトラブルだが、今のところ情報が少なすぎる。

それに一人があの状態ではなのはとフエイトが出会う筈のお茶会はやらないだろう。(二人が事故に遭った理由は何だ？　まさか二人続けて事故に遭うなんて偶然はそうそう起こらないだろうし、誰かが意図的に事故を起こしたとしてもその理由は？　二人の共通点といえば富豪だということ。お金が欲しいのなら普通は誘拐を選ぶ。だとしたら二人に恨みを持っている？　彼女らの両親なら逆恨みされる要素が多くすぎて少し調べただけじやわからない)

劉牙は一先ず考えるのをやめ、これからのことを考える。お茶会が無くなつたとしても月村宅にあるジュエルシードが同じタイミングで発動する可能性が高い。それに情報が少ない状態であれこれ考えても埒があかない。彼は本来情報を集めて綿密に策を

弄するタイプの人間だ。

そして本来であればなのは、アリサ、すずかがお茶会をやる筈であった週末に、高町なのはは高町恭也の引率でユーノを肩に乗せてすずかのお見舞いのために月村宅を訪れていた。世界からの修正作用というやつだろうか。図らずとも彼女はこの日にこの場所へ来たのだ。

ちなみにユーノは「病人の部屋に動物を入れるのは不味いだろう」という理由で恭也が預かっている。

「良かつた。思ったより元気そうだね」

「お医者さんの腕がいいから、それに……」

「えっと、のことなら気にしなくていいんだよ」

なのはが言っているのは以前誘拐された際に主犯格の男が言っていた『月村は吸血鬼の一族』ということ。なのは、アリサ、折木は他人に喋らない。そして一生友達でいるという約束の下、記憶を消さずにいた。すずかは友達から認められてもやはり自分が人間と違うという体験をするとブルーな気分になつてしまふ。

「うん、ありがとう。そういうえばアリサちゃんは元気?」

「元気元気。さつさと退院したいってばやいてたよ」

「あはは、アリサちゃんらしいね」

友人二人の他愛ない会話は続く。

しかしずつと続くと思われた楽しい時間も唐突に終わりを迎えた。なのはがジユエルシードが発動したことを察知したのだ。

『ユーノ君！』

『ジユエルシードだ！　すぐに合流するから先に行つて！』

そういうえばとなのははユーノを兄に預けていたことを思い出す。あの兄から逃げ出すのは至難の業かもしれないけれどユーノの業を信じて先に行くことにした。遅れてからでは遅いのだ。



なのははユーノと合流し、ユーノが封鎖領域の結界を張る。その直後になのはの身の丈の五倍はあろうかという猫を見つけた。確かに月村宅では猫を放し飼いにしている。しかしデカ過ぎる。確実に原因はジユエルシードだろう。最近は劉牙が突然現れてやることを搔つ攫つてしまふからなのはは劉牙無しの自分の力で片をつけたいと思つている。

「アレは……」

「た、多分、あの子猫が願つた『大きくなりたい』と言う願いが叶つたのかな……と」
ただデカイというだけでも被害になりやすいとなのははセットアップしようとする。

その次の瞬間、金色の閃光の雨が猫を直撃し猫が悲鳴をあげる。

現れたのは金髪にツインテールで全体的に露出度高めな黒いバリアジャケットを着た少女フェイト・テスター。猫にとりついたジュエルシードを封印するためにもう一度攻撃を仕掛ける。なのははそれを見逃さず、障壁を張つて猫を守つた。

そこまでは何も変わらない。

そしてなのはとフェイトの一騎打ちが始まる。

これも本来あるべき姿。

「うふふふふふふふふ。そろそろ私も出ようかな」

コツ、コツという足音にこの場の三人が注目を集め。十代後半と思われる銀色の長い髪をして黒い修道服を着た美しい女性。その紅い目は不気味なほどに綺麗だった。
そしてその目はなのはの方を向いている。

『なのは！　あの女人からもジュエルシードの反応がある！』

『ええっ!?』

彼女が発する禍々しい気配はジュエルシードによるものだつたか。フェイトと新たに現れた女性を交互に見る。フェイトは止まつてくれなさそうだ。

(ど、どうしよう?)

あまり使いたくない手段ではあるが、劉牙に救援を求めようか。

「やつぱり……いつ見ても憎たらしい顔」

「へっ?」

銀髪の女性はなのはの頭上まで跳躍するとなのはの顔を殴り飛ばして地面に叩き落す。

「あがつ!?

「なのはつ!?

「?!

なのはは杖で身体を支えて立ち上がる。地面に落ちる寸前にレイジングハートが衝撃を和らげてくれたお陰でいくらかダメージは回避することはできた。

「芋虫は地べたに這いずり回つてるのがお似合いよ」

「な、何でこんなことを……?」

なのはは息も絶え絶えに銀髪の女性に問う。和らげてなおこのダメージ。まともに

くらつたら終わりだ。

「うふふふふふふ、やつぱり直接殴ったほうがスカッとしますね。あの二人も交通事故なんて回りくどいことしないほうが良かつたかも。くすくすくすくす」

あの二人、交通事故。

なのはの頭の中でその言葉が反芻する。ぐく最近事故にあつた二人の友人。

「まさかっ!? アリサちゃんとすずかちゃん……?」

「そういえばそんな名前でしたねえ。嫌いな人間の名前とかいちいち覚えてるわけじゃないから自信ありませんけど」

銀髪の女性はまるで一昨日の夕飯でも思い出すような態度だ。それがなのはの怒りに油を注ぐ。

「何で……何でそんな酷いことが出来るのツ!?」

『『何でそんな酷いことが出来るの?』』

しかし油をそそいだのはなのはも同じことだッた。

銀髪の女性は地面を蹴つて目にも留まらぬスピードでなのはの目の前まで近づき、腹部へボディブローによる一撃を受ける。なのはは後方に吹き飛び木に衝突した。

「——あぐう!! ……ゴホツゴホツ!!!!うつ」

「酷いこと? 盗られたものを取り返すことの何が酷いことなのでしょうか? そもそも

も私の大切なものを奪つたアナタ達の方が酷いのでは?」

重い一撃を受けたのはは咳き込むと同時に吐血して苦しむ。内臓にダメージがあるのかもしれない。あまりの痛みに気を失つた。

今の一撃を見てフェイトは突如現れた謎の人物への警戒を強める。もしなのはがやられたら次はじぶんかもしれない。いつ攻撃されてもいいようなどデバイスのバルディッシュュを構えた。

「私に何か用ですか？」

「貴女は、私の敵ですか？」

「私の目的はこれへの制裁」

そう言つてなのはの髪を掴む。銀髪の女性はとても楽しそうないい顔をしていた。

「アナタがそれを邪魔するのなら潰しますよ」

「なら、私はあのジュエルシードをもらつていきます」

「ジュエルシード？……ああ、私に力をくれたあの青い石のことですか。好きにすればいいんじゃないでしょうか」

フェイトも焦つてているとはいえば力ではない。彼女と自分の戦力差を判断した結果、一人で勝つのは難しいという結果を出した。ここで無理をするよりもジュエルシード一個を確実に手に入れるほうがいい。

「なのはを放せ!!」

「（イタチが喋った?）……今私に意見できるような立場なんでしょうか？」

「それは……それにジュエルシードは危険なものなんだ！君が使っているジュエル

シードだつていつ暴走するか」

「暴走？　うふふふふふふ……あははははははは！　暴走！」

「何がおかしいんだ！」

「私にはこれに耐えられるだけの精神力がある！　想いがある！　信念がある！　暴走なんてするはず無いでしよう……ああそうだ。これもジュエルシードとやらを集めていましたね。いい機会です。奪われる辛さを思い知りなさい」

銀髪の女性はジュエルシードを探すため、なのはの服を弄る……が何も出てこない。「魔法の杖さん。レイジングハートとか言つてたかしら。あの青い石はどう？」

〈……〉

「だんまりですか。では……これでどうでしょう？」

にやりと笑つてなのはを木に押し付け、首に手をかける。

「首の骨が折れるのが先か。窒息するのが先か……5、4、3、2、1へわ、わかりました！」

レイジングハートの赤い宝石の部分から5つのジュエルシードが射出される。これはユーノも反論できなかつた。最優先はなのはの命。

「あ、そういえばこの石お兄ちゃんが集めてましたね。さつきの金髪を見逃したのは間違いでしたか。でも最終的に手に入れれば許してくれますよねお兄ちゃん」

狂つてるというのがユーノとレイジングハートが持つ銀髪の女性への見解。おそらくジュエルシードによるものが大きいだろう。本人はああ言つていたが自我を完全に保つてゐる訳ではなさそうだ。近いうちに完全に理性をなくして暴走を始めるかもしない。

(この魔力反応は劉牙!?)

ユーノはなのはより少し大きめの魔力反応がこちらに近づいてきていることを察知。まだ力任せな部分も多いが今は彼に頼るしかない。

『劉牙聞こえる!』

『すまん遅れた! なのはは大丈夫か?』

『急いで! 一分一秒でも早く!』

今自分の出来ることは彼が来るまで時間を稼ぐこと。悔しいけどもし自分が最高の状態だとしても勝てない相手に出来ることはそれくらい。

「そのお兄ちゃんつて人の命令でジュエルシードを集めてるんですか?」

「命令? 違いますよ。言うなれば愛のため。私はお兄ちゃんを愛しているからお兄ちゃんが欲しいと思つているものを集めてプレゼントするんです。そうすればツ!」

今度はなのはの腹部を怒りを込めて靴の底で何度も踏みつける。

「やめろ! ジュエルシードはもう渡したじゃないか!」

「別に『ジユエルシードを渡してくれたらこれにもう危害を加えない』なんて約束をした覚えはありませんけどね」

「そんな……卑怯だぞ！」

「愛に生きる私が正義！ 私の愛する人を略奪した輩を裁く権利が私にはある！」

言つてはいることがめちゃくちやだ。もしかしたら本人も感情に任せて適當なことを言つてはいるだけのかもしれない。ユーノに出来ることは意識をなのはから逸らすこと。レイジングハートに出来るのは少しでもなのはへのダメージを減らすこと。

「待たせたな！ 無事だつたか俺の嫁！」

そして神代劉牙という爆弾を抱えた踏み台ヒーローが現れる。



ふう、朝出かけたつぎりで昼食時になつても帰つてこない智葉を捜してたら出遅れてしまつた。出遅れてしまつたことが凶と出てしまつたのかもしれない。身体能力のリミッターを外しても飛ぶのは宝具頼りだからスピードは変わらないんだよね。

目の前にいるのは口から血を流したボロボロのなのは。そして銀髪の美女の手には5つのジユエルシード。しかもあの女からもジユエルシードの反応がある。

「あーお兄ちゃんだー♪」

「？」

見たところ十代後半から二十代前半と思われる女性。俺と同じ銀髪のロングヘアだけれども俺を兄と呼ぶには年上過ぎやしないか。

「あれ……？」

似ている。銀色の髪、紅い目。智葉に似ている。ちょうど智葉が成長したらこうなるかもしねない、そんな容姿だ。

「智葉……なのか？」

「見て！ お兄ちゃんが欲しがつてた宝石6つも見つけたよ」

「これは、どういうことだ？」

「劉牙、あの人と知り合いなの？」

「俺の妹だ。何で大人になつてるのかはわからんが」

「多分ジユエルシードの影響じやないかな。これは君が仕組んだことじやないんだね

？」

「ひつでえな、違うよ」

寧ろ出来ることなら遠ざけたかつた。最近あんまり構つてやれなかつた俺の失態だ。

「智葉、集めてくれてありがとう。でもそれは元々俺となのはが集めてなのはに預けて

「妹を殺人犯にさせてたまるかつての。お前も正気に戻れ」

「私は真剣だよ。真剣にお兄ちゃんを愛してる」
何をふざけてるんだと一蹴しようとしたが、智葉の目は真剣そのものだ。それがジユ
エルシードによる影響なのか、それとも本当の気持ちなのか。どちらにしろ俺の責任
だ。

〈リミッターは?〉

「全部解除で。全力であいつを止めるぞ」

第8話

「もう一度だけいうぞ、『ジユエルシードを渡してくれ』」

「お兄ちゃんがどいてくれたら考えてあげる（渡すとは言つてない）」

話し合いの余地はなさうだなと思い、皇帝(エンペラー)のトリガーを連続で6度引く。そして撃鉄の音と共に6発の銃弾が射出されて智葉へと向かっていく。

普通の人間ならば銃弾が放たれれば恐怖して身を屈めるなり、避けるためにその場から移動するだろう。しかし智葉はその場から微動だにしなかつた。

「うふふふふふふふ。お兄ちゃん、この素晴らしい力があればこんなこともできちゃうんだよ」

〈おいおい、あんなのありかよ!?〉

意外！ それは髪の毛ッ！

智葉の長い髪はさらには伸びてまるで手足のように動かし飛来してきた銃弾5発を包みこんだ。包まれた状態では銃弾の操作が出来ない。おまけに弾丸が吸収されてしまったことから魔力吸収能力もあるかもしれない。皇帝(エンペラー)との相性は悪そうだがこれで

相手の特性の一つはわかつた。やりようはある。

「ご馳走様。でももつと食べたいな」

「そうか、お前が大人しく降参してくれたら家に帰つて一緒に昼飯食べられるんだけど

な

皇帝エンペラーを腰のホルダーにしまい、剣を地面に刺してから両手を合わせる。

「これならどうだ！ シャボンランチャー！」

巨大なシャボン玉が分裂して多数の小さなシャボン玉となり、智葉を取り囲む。

「まあ、綺麗なシャボン玉」

シーザーの技と原理は同じだが、こいつには波紋ではなく魔力が流してある。スフィアのように思うように動かすことが出来る上にシャボン玉の弱点であるスピードの遅さもある程度カバー出来る。実戦で使うのはこれが初めてだが上手くいった。

「でもこれで一体どうしようというのかしら？」

「そいつは見てのお楽しみってやつだ。ところでお前、さつき俺の銃弾をいくつ食つた

？」

「え？ 5つだよ……あれ？ でも撃鉄の音は6回……」

そうだ。智葉は一発だけ吸収し損ねている。元々全弾当てるつもりで俺は6発撃つたわけじゃない。『下手な鉄砲数撃ちや当たる』ってやつだ。

最後の一発は地中に隠してあつた。そして今は智葉の真下にある。

「ひやあ？」

全く速度が衰えていない銃弾が智葉の真下から発射される。彼女は反射的に髪で防がずに上体を右に逸らして銃弾を回避した。その際に俺が放ったシャボン玉に触れた。

衝撃を与えたシャボン玉は地雷の如く爆発し、さらにその爆発が連鎖して周りのシャボン玉も爆発していった。気がついたときにはもう爆破からは逃げられない俺の新技、名づけて『シャボンマイン』。起爆機能を持つたシャボンは軌道が変化する銃弾とは相性抜群だぜ。

「い、いたい……」

爆破によつて生まれた煙がはれると服や露出していた肌が少し焦げている智葉が片膝をついている。まだ試作段階なためにまだまだ改善点は多そうだ。

「でもこれがお兄ちゃんの愛なんだね。知つてるよ、傷つけ合つて生まれる愛もあるんだよね」

どこでそんなことを知つたのかを小一時間問い合わせたいところだが、それはまたの機会にしよう。

さつきの爆発で発射したシャボンは全て消えてしまつた。なのに片膝をついたまま

地面に顔を向けて起き上がらない。髪を伸ばしそぎたせいか地面についてしまつてい
る。

「……まさかッ!?」

地面に刺してあつた絶世の名剣デュランダルの原典を抜いて回転斬りのように周囲を切り払う。
俺の予想は当たつていた。俺の後ろに智葉の髪の毛が迫つていたのだ。危うく自分の
策でやられるところだつた。

「あーあ、あと少しだつたのに」

「今のはやばかつたな」

「やつぱり一個だけじゃお兄ちゃんに私の愛は伝えられないよね」

智葉はポケットから取り出した5つのジュエルシードを髪に貼り付けていく……つ
て智葉の髪は魔力を吸収するからやばいじゃねーかッ！

「うおおおおおおおおおおお！」

デュランダル
絶世の名剣を構えて走り出す。吸収が終わる前に髪を切つてジュエルシードを切り
離す。

「な、なんだ？ 足が!?」

足が動かない。と思つたらさつき斬つた髪が俺の足に纏わりついている。なんてこ
とだ、切り離しても操作可能なのかよ。

「すごい！　すごいすごいすごいすごい！！」

「なんつー魔力だ。これがジュエルシード6個分の魔力……か」

原作でなのはとフエイトが海のジュエルシード6個を封印する話があるが、あれは意思を持たない水にとりついている。しかし今回は強い想いを持つ智葉にとりついているのだ。やばいとしか言いようがない。

纏わりつかれてたのはそれ程長い間ではなかつた。切り離すと動かすことは出来てもパワーは激減するみたいだ。

「さあお兄ちゃん、もつと愛死合おう！」

「なんか恐い言葉が聞こえた気がするんだけど気のせいだよね？」

彼女が先程とはうつて変わつて臨戦態勢に入る。髪の毛は刃物のように先が尖つた形へと変化。髪の色が銀色なだけに本物の刃に見える。しかもそれが複数だ。

俺はもうなりふり構つてられないと思い、王の財宝を発動させる。そしてランクの低い宝具を3艇射出した。

しかし向こうも髪でつくつた武器で迎え撃つ。宝具は叩き落されたが向こうの髪で出来た剣はボロボロだ。

「すごーい！　お兄ちゃんつてそんなことも出来るんだね」

ボロボロになつた部分は抜け落ちて、また新たに髪の毛が生えて武器となる。魔力が

続く限り無限に武器をつくることが出来るなんて恐ろしい能力だ。ランクの高い武器をぶつけとも剣を使い捨てに出来る以上意味はなさそうだ。

「こうやつたら私も出来るかな？」

髪で出来た剣が王の財宝^{ケート・オブ・バビロン}のように射出されてきた。

「くっ」

一瞬驚いて硬直してしまったがすぐに持ち直して剣で叩き落す。

「やつた！ 私にも出来た！」

俺の嫌な予感がした。俺は後ろから全ての選定の剣の原典とされる原罪^{メロダック}を取り出して絶世^{デュランドル}の名剣^{ナムダル}の原典と共に構えた。

俺の嫌な予感は的中した。彼女はまるで無限^{アンリミテッド}の剣^{ブレイドワーカス}製のように髪の毛で武器をつくつては投擲、つくつては投擲を繰り返しての連続攻撃を繰り出してきた。俺は投擲された武器二本の宝剣で切り裂き、撃ち落し、薙ぎ払い、それでも防ぎきれなかつた分は防御用の宝具を展開して防ぐ。勿論防戦一方というわけじゃなく、こちらも分割思考を使つて宝具を射出しているが、向こうの限界がわからないし宝具の数だつて無限じやない。故にこの我慢比べがいつまでつづくのかなんてわからない。おまけに向こうは髪の毛だけで攻撃と防御が同時に出来るというインチキ能力だ。

我慢比べは時間間隔がおかしくなるほどに続く。そういえばここすずかの家の庭

だつたな。封鎖結界が無けりや宝具と硬化した髪の毛の流れ弾でえらいことになつたな。とかどうでもいいことを考えていたら突然向こうの攻撃が止まつた。まさか魔力が切れたのか。それとも我慢比べをすることに飽きて別の戦法に変えてくるのか。どちらにしろ相手から目を離すのは危険極まりない。

智葉がスタスタとゆつくり俺に近づいてくる。警戒をせずにニコニコと笑いかけて俺の警戒心を煽つた。

「何のつもりだ？」

「もう……勝負はつきましたから」

「は？」

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝の中の宝具はまだ半分も撃ちつくしていない。それなのに勝負がついた

？

「すぐわかりますよ。もう仕込みは終わりました。あとはゆつくり料理するだけです」「何言つて……なつ!?」

髪が腕に巻きついて剣が地面に落ちる。今まで撃ち落してきた髪の毛全てが今俺に襲い掛かっている。気がついたときには足にも巻きついて動けない。弱い力でもそれがさつきの数十倍あつたらそれは充分脅威となる。

「くそっ！　このつ！」

急いで巻きついた髪の毛を振り払い、近くにあつた新たな宝具を手に取り髪の毛を迎え撃つ。先程まで宝具と撃ち合つてた量は半端ではない。四方八方全方位から襲い掛かってくるから逃げることも出来ない。

「そうだ！」

俺は絶世の名剣から炎を出す宝具に持ち替えて辺りの髪の毛を焼き払う。何故もつと早く気がつかなかつたんだろう。

「これで」「そう、これでお終いです」なつ?!

すでに智葉は目の前にいた。そして俺が逃げられないよう抱きしめる。腕だけじゃない、髪を巻きついて身体を動かすことが出来ない。この至近距離で宝具を撃つたら自爆する。

「つゝかまえたつ♪」

「ううつ」

魔力が髪から、いや全身から奪われていく。力がどんどん抜けていく。

「あ……あ……」

「d i e 好きですよお兄ちゃん。私だけのお兄ちゃんずつと離さない誰にも渡さないこれは私だけのもの誰にも触らせない愛死てるよおにいちやん」

「フハハツ！ クツクツクツヒヒヒヒケケケケケ！ ノオホホノオホヘラヘラヘラヘ

ラアヘアヘアヘー！」

「あれ？ 壊れちゃったのかな……？」

別に壊れてるわけじゃない。力が残り少ないから喋らないし笑ったのもこつちに注意を引きつける為。6発目の弾丸はまだ生きてるんだぜーツ。操作の方は皇帝エンペラーに任せてたけどな。

「はぐう！？」

上空に打ち上げたままの弾丸は今になつて智葉の頭に着弾する。その髪の毛は魔力は吸い取れるだろうがそれは彼女の任意。シャボンでの不意打ちでそれは証明されている。

そして一瞬の隙をついて俺は拘束を逃れ

「いたたた…………つ！？」

最後まで落とさなかつた短剣を智葉の胸に突き刺す。

「…………あはっ、あははははははは！ もしかして最後の手段ですかお兄ちゃん？」

そんな小さな剣で私がどうにか……どうにか……あれ？ あれあれあれあれあれあれあれあれあれあれあれ？」

智葉は自分の力が急激に抜けていくことに戸惑つていることだろう。さつきこの短剣を抜いた時にこの作戦を閃いた。

「ルールブレイカー……なんてな」

破戒すべき全ての符はメディアの逸話から生まれた宝具であり、原典は存在しない。しかし古今東西を探せば魔術無効化、契約解除の宝具などいくらでもある。たまたま短剣の形状をした宝具があつたのは運がいい。殺傷力の低さから相手はきつとセイバーみたく油断してくれるだろうから。近づいて刺さなきやいけないのが玉に瑕だけどな。

智葉は気を失い元の9歳の姿へと戻る。ジュエルシード6個が封印された状態で彼女から分離されたからだ。記憶の処理もしておかないと。

〈最強だ！ 僕達は最強無敵のコンビだぜえーッ！〉

別に悪い気はしないけど、デバイスでもコンビって言うのだろうか？

「魔力を吸われ過ぎた」

魔力回復薬を取り出し一気飲みしたら咽た。不味い、絶対にもう一杯なんて言わないので。

◆

智葉に記憶の処理を施した後、彼女を背負つてユーノの気配を辿つた。ユーノはかなり遠くまで離れていたようで探すまでに少し時間がかかった。

「劉牙、大丈夫だつた？」

「ああ、ほら」

6個に増えたジユエルシードをユーノに手渡す。封印してあるし別に手渡しでも大丈夫だろう。

「なのはは？」

「応急処置はしてあるけど、やつぱり病院に連れて行つたほうがいいかもしないよ」そこまで酷いのか。と思い、智葉の治療にも使つた回復薬をなのはに振り掛ける。死に掛けてても治せるものだしこれで病院に行く必要もないだろう。

「それは？」

「俺がレアスキルでつくつた回復薬だ。近いうちに目を覚ますだろう」

「良かつた」

「なあ、ユーノ。このことは俺達だけの秘密にしないか？」

「……へ？」

ユーノはあつけにとられた表情で俺を見ている。

『今回暴れてたのは智葉だ』つてこと秘密にしておいてくれないかつてことだよ。いくらなのはが俺に惚れてるつていつても妹が重症負わせちまつたらもしかしたら俺のイメージが悪くなるかもしれないだろ？だからだよ。今回暴れてたのは赤の他人で、俺

は颯爽となのはを助け出したつてことにす r 「君は……何を言つてるんだ」

「君はなのはに申し訳ないとは思つてないのか！ イメージダウン？ 惹れている？ ふざけるな！ なのははもう少しで死ぬかもしけなかつたんだぞ！」

俺の自分勝手な言動にユーノはキレていた。いい、それでいいんだ。

「だから助けたじやねーかよ！ おまけにジユエルシードも増えた！ お前だつて人のこと言える立場じやねーだろーがよ。なのはに危険なジユエルシード探しさせてさ。そもそもお前がジユエルシードを見つけたんじやないかよ！ そうでなきや智葉だつてこんな目に合わずに済んだんじやねーかよ！ 俺は悪くねえ！」

「それは……そうだ」

ユーノは悔しそうに奥歯を噛んでいる。

「ジユエルシードが^{海鳴}ここに散らばつたのは僕のせいだ。それはとても申し訳ないことだと思つてゐる。確かになのはに謝れだと僕が言えた義理じやない。だけど君の妹がこんなになるまで放つておいたのは君じやないか！ なのは達に言い寄つてばかりでその子に構つてあげなかつたことについてはその子に謝るべきだ！」

「んだとでめえ！ 話変えんじやねえよ！」

それから何回か平行線で話が続いた後ユーノは「君とはしばらく顔を合わせたくない」と言つてなのはを背負い何処かへ飛んでいった。

俺はいつまでもよそ様の家に無断で居座るわけにもいかず、智葉を背負つて家へと帰つた。両親には遊びつかれて寝ている智葉を見つけて連れ帰つたと言い訳をした。そして俺は現在智葉の部屋で智葉が目を覚ますのを待つてゐる。

「おい、エンペラー皇帝」

「あ、なんだよ?」

「笑えよ」

「イヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒツ!」

「ワツハハハハハハハハハハハハハハーツ! ……はあ」

「よくもまああんな心にもねえことをペラペラと……」

全く本音が無かつたわけでもないけどな。『ジユエルシードが落ちてこなけりや智葉がこんな目に合わずに済んだ』つていうのは事実だし。だからといってユーノが憎いわけではないが。

「ううん……誰? うるさい……」

ちよつと煩くしすぎたようだ。目を擦りながら智葉が目覚める。安心した。いつも

の智葉だ。さつきまで戦つてたのが悪い夢みたい。

「智葉、ごめん!」

「へ? お兄ちゃん?」

「もつとちゃんとお前に気を配つてやれれば……」

「何言つてるの？ とか頭上げてよ」

記憶を消したせいで今日のことは覚えてないだろう。今の智葉に謝つても自己満足以外の何者でもないだろう。でも謝りたい。

「正直に言おう。なのは達のことは別になんとも思つてない」「じゃ、じゃあなんで言い寄つてるの？ いつつもいつつも」

「それは……」

「それは？」

「すまん、言えない。……でもこれだけは言える。今年中に全部終わる。終わつたらあいつらと関わることはなくなる。これは絶対だ。だから来年まで待つて欲しい」

智葉は何も言わない。怒つているのか困惑しているのか。それとも喜んでいるのか。

「本当に？」

「本當だ」

「絶対？」

「絶対零度より絶対だ」

「ふふつ、なにそれ」

その微笑に大人の姿の彼女が重なり不意にドキリとさせられた。今思えば大人智葉

は非の打ち所の無い美女だつたな。

「わかつた。その代わりちよつとだけ目を瞑つて？」

「ん？ ……こうか？」

言われたとおりに目を瞑つた。何だろう。そういえばギャルゲーとか恋愛系のラノベだとこの後……

「——ン」

「……え？」

気がつけば、俺の唇は智葉に塞がれていた。

俺のファーストキスの相手は義理の妹だつた。

踏み台ポイント 現在5000ポイント突破

第9話

——魔法少女リリカルなのはは百合アニメ。

そう言われるようになつたのはいつからだつたか。百合アニメは言い過ぎかもしれないがSTSは男女間の恋愛要素を徹底的に排除するかのようにユーノはほぼ空気だつたし、なのはの元旦那のクロノはエイミイとくつついたし、主要メンバーに男はシヨタだけだつたし、ザツフィーずつと犬だつたし、目立つてたのはおっさん達だし、敵もスカさん除けば全員女だし。ああそういうやナンバーズにも一人いたか。なんだつけ、唯一男っぽい……オクターバエスパーのザエルアポロ・グラント？……ダメだちよつとうろ覚え。はつきり覚えてるのは性悪メガネアッコロくらいかな。後は顔見たら思い出すレベルまで忘れてるな。STSキャラ多すぎ、そして何でクアットロはメガネとつちやつたんだろ。そもそも何であいつら19歳にもなつて男つ気がまるでないんだよ。あれか？今は仕事が恋人つてやつ？そんなこと言つてる女に限つて三十路前に結婚を焦り出す。

と時間になるまで暇だつたのでちよろつと考察をしていたらなかなかの時間つぶしひになつた。アリサとすずかは無事退院してそのお祝いという形で原作と同じく海鳴

温泉での温泉旅行はキツチリやるようだ。勿論俺は誘われてないけどね。別に悔しくねーしょ。温泉なんてその気になりやいつでもいけるしょというか俺去年夏休みにハワイ行つたしょ。パンケーキ美味かつたしょ。

俺は時間になつたらジユエルシードが発動する場所へ行つてそろそろ出てくるであろう折木の奴と戦い無様に敗北すること。それだけのためにあそこまで行かなきやならないとは、きつついなあ。

「そろそろか」

時間はもう真夜中。なのはも確かに真夜中にジユエルシードが発動したのを感じとつてたから現場でスタンバつてたほうがいいだろう。自分の部屋の窓から抜け出して屋根に上り王ゲート・オブ・バビロンの財宝から黄金とエメラルドが輝く鋭利な形状をした飛行船を取り出した。この飛行船は後に名を『ヴィマーナ』と呼ばれるものだ。ヴィマーナとはインドの二大叙事詩「ラーマーヤナ」と「マハーバーラタ」に出てきた空飛ぶ船の事である。シヴァ神を初めとして、古代の神々の多くはこのヴィマーナに乗つて人間同士の戦いに参加したり、病気の人を訪問して薬を処方したりしていたらしい。

ギルガメッシュが神の類が嫌いなくせに神剣やら神の船やら神関連の宝は捨てないんだな。宝に貴賎はないつことだらうか。

ともかく一度これに乗つてみたかったんだよね。我様とバサカの空中戦の迫力はパ

なかつた。昼間は明らかに目立つが今は真夜中。目撃させる確立は昼間よりだいぶ低くなるだろう。

さて、問題はこいつをどうやつて運転するかだ。前世でオートマの免許は持つてたけど。ヴィマーナ上部の中央にある金ぴかの椅子に座る。ゴツゴツして痛いかと思つたら思いのほか座り心地がいいが足がつかないのが難点。それにハンドルもアクセルもブレーキも見当たらん。古代の飛行船にそんなもんがあるのかどうかは疑問だけど。「お前は運転方法とか知つてる?」

「とりあえず念じてみたらどうだ?」

ふむ、一理あるな。こういうオーパーツ的なものは念じて動いたりするのも少なくない。とりあえず海鳴温泉まで超特急で。

「うおつ!?

マジで動いた。神の船だし神性持ちのギルガメッシュだから担い手じゃないけど使えたつてオチじやなくて良かつた。本当に良かつた。ヴィマーナは夜の空をかなりのスピードで飛行する。

「HOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

俺は現在テンションマックスの状態で空の旅を楽しんでいる。ジェットコースター やフリーフォールのような絶叫マシンは大好きだがそれとはくらべものにならん。な

んだこれすごすぎだろ癖になりそう。このスピードなら1分もすれば目的地までつきそう。短い空中散歩になりそなうだがそれまで楽しませて貰おうじゃないか。いやこのスピードなら少しくらい寄り道しても間に合いそう。ちょっとくらラスベガスまで行つてこようかな。

「YAH—H—H—！」

〈おいおい、そろそろいかねえと間に合わねえんじやねえのかい？〉

皇帝エンペラーに諭されて我に返る。危ない危ない、マジでアメリカまで行つちまうところだつた。

「むつ？」

いつものジュエルシードが発動した感覚を察知した。名残惜しいが空中ドライブはここまでだ。全てが終わつたらこいつで世界一周してみるのも面白そうだ。智葉を一緒に乗せてみるのもいいかもな。一人でするドライブほどつまらないものもない（皇帝もいるがこいつは一人と数えるべきなのだろうか？）。

「さて、急ぐぞと」

ヴィマーナのスピードを最高にして目的地まで突つ走る。鬼が出るか蛇が出るか。

海鳴温泉の外れでヴィマーナをしまいここからは飛行靴での行動となる。木々が多くて大きな飛行船はここじゃ使えないし第一あんなでかいのが突っ込んでいたら大惨事になるのは自明の理。

「さてと、あいつは来てるかねーっと」

もしいなけりやなのはの邪魔になりながらフェイトと戦つてポイントを稼ぐ方向に転換しなけりやならないし。それはそれでフェイトにも悪い印象を与えられてポイント稼げそうな気がするな。

空ではなのはとフェイトがジュエルシードを賭けた戦いをすでに始めている。ぱつと見互角のようだが、その実なのはは少し押され気味だ。別の方ではユーノとアルフが戦いを始めている。そして空中に待機しているフルフェイスに黒いコート、ありやキリトが着ているコート……名前なんだつけ？　とにかくその格好をしている。そして武器は黒い片手剣だ。フルフェイスは素性を隠すためかな。二つの戦いを傍観しているのは1対1の戦いに手出しあしないという意思表示だろうか。とにかく接触してみるか。

「てめえ何モンだ？」

「……お前は」

ご丁寧に声も魔法か何かでノイズが混じって誰のものかの判別がつきにくい。フルフェイスのせいで表情は見えない上に声での判別もできないか。

俺は木の上に立ち、フルフェイスのやつに殺気をとばす。

「リリカルなのはの原作にてめえみたいなやつはいなかつた筈だぜ。お前、転生者だろ」「(やはりこいつも転生者か) 転生者? 訳がわからない。お前は何を言っている?」

「チツ、俺がいることによるイレギュラーか? まあいい、オリ主は俺だ」

お決まりの間抜けなオリ主(笑)のやりとり入りましたー。自分から相手に転生者だとばらしましたー。おまけに相手の「転生者? 何それ?」を鵜呑みにしましたー。仮に転生者だとして「転生者だろ」と言われて「はいそうです」と答えるバカはそういういません。本当にありがとうございました。

〔王の財宝〕
[ゲート・オブ・パビロン]

俺の背後の空間が金色に歪んでそこから数多の武器が姿を現す。負け試合だし籠つた魔力が低い武器を優先的に取り出している。射出するスピードは変わらないから大して差はないと思うが。

そして俺は弱い宝具をフルフェイスのやつに向かつて適当に投擲する。

「くつ!」

フルフェイスは俺が投擲した宝具を全て紙一重で回避。その動きはまるでどこへ移

動すれば当たらないかを予めしつているかのよう滑らかで無駄がない。そういえば折木は予知眼を持っていたからもしフルフエイスが折木だとしたらこれくらい出来ても不思議じやない。しかしこれでもまだあいつが折木だという証拠には程遠い。そもそも遠目からでは予知眼使つてるかどうかなんてわからん。

ああそうだ。驚いとかないと。

「何イ!? 俺の王^{ゲート・オブ・バビロン}の財宝^{ゲート・オブ・バビロン}が!!」

「強力な能力だが、狙いが雑だな」

そらそуд。適当に撃つてるからな。

「クソッたれ!」

逆上した（演技をする）俺は先ほどの3倍はあろうかという宝具を展開しフルフエイスに向ける。

「何て数だ。仕方ない、デイア！」

〈はい、マスター！ あの自惚れバカに目にモノ見せてあげましょう〉

あ、確定した。自分は声変えてるくせにデバイスの音声はそのままかよ。折木がデバイス持つてることは自分自身以外、もしかしたらフエイトとアルフは知ってるかもしけないけれどそれ以外は知らないだろうからそれも仕方ない。

てか自惚れバカですか。傍から見たら『チートを手に入れたことに酔いしれて自分を

磨くことを忘れたアホ』だからあなたがち間違いないのか。

折木の周囲の地面や木が削り取られ……いや分解といったほうが正しいかもしない。そして俺はこれを何処かで。

「ふう……よしつ」

分解された物質は再構成されて折木の脚部に黒い装甲となつて顕現した。これは色こそ違えどクーガーの兄貴のアルター能力、ラディカルグッドスピードにそつくりだ。

「どんな能力かわからんがくらえッ！」

さつきの3倍はあるうかという宝具の投擲。俺の予想が正しければあの能力と俺の王の財宝との相性は最悪の筈。

思つたとおり黒い装甲を纏つた足は目にも止まらぬスピードで地面を駆けて投擲された宝具を次々と回避していく。動く的ほど当てにくいものもない。ゲイボルグの原典のように相手を追尾する宝具もあるから対処方法が皆無というわけでもないけれど今はその時じゃない。

「クソッ！ 当たれ当たれ当たれエ!!」

ううん、ここまでスピードがあるとシャボンの包囲網も突破されそうだな。シャボンが爆発する前に駆け抜ければいいだけだし、予知してもどうにもならない状況があつたとしてもこの速さで切り抜けられそうだ。

折木は全ての宝具を避けきつて、その場でクラウチングスタートのポーズをとった。

「衝撃のオ……」

「くっ」

あれがくるのか。

俺はとりあえず後ろから武器を取ろうとしてもたつく。

「——ファーストブリットオ!!」

装甲の噴射口から蒸気が勢いよく噴出し、その勢いが爆発的なスピードとなり弾丸の如く俺に迫りすさまじいジャンプ蹴りをくらわせた。

クーガーの兄貴とカズマの必殺技でお馴染み、『衝撃のファーストブリット』だ。

「はろばつ!!?」

本気でガードしたが、受けきれずに吹き飛ばされて木の上から転げ落ちる。正直言つて今のはかなり効いた。

「ク……ソ……があああ!!」

俺はブチキレ（勿論演技）で落ちていた剣を二本拾つて修羅の如く折木に襲いかかる。リミッターがかかつてるので重くて振り辛い。

〈何なんですかこいつは？ クソしか日本語知らないんですか？〉

「……それは言いすぎだろう」

何なのあのデバイス。

ぶち壊していい？

スクラップにしてジャンクショッピングに売り捌いていい？

俺の本来の半分以下のパワーの剣戟はあつさりと受け流される。

「うおおおおおお！」

「……遅い、アームブロスト武器破壊」

折木にそう呟かれ手に持っていた剣で俺のランクDかE程度の剣は切り裂かれる。

今度はソードアート・オンラインのスキルですか。

「こんな……オリ主であるこの俺がアアア！！」

「終わりだ！ 魔神剣！」

剣から発射された地を走る衝撃波が斬撃とともに俺に直撃した。衝撃波をくらつた

俺はまた吹き飛び木にぶつかって跳ね返りまた木にぶつかっては跳ね返りとさながら
ピンボールのようだ。

「B A A A O H A A A A A A A A — — !！」

声にならない断末魔のような悲鳴をあげながら俺は無様に敗北していくのだ。後
で覚えてろよ、機会があつたらマジで再起不能一歩手前までボコすから。

.....

「行つたか？」

◆ 「行つたぞ、ご苦労さん」

とりあえず全てが終わるまで気絶したふりをしていた。蛇足だがなのはが俺を発見して「何でここにいるんだろう」って呟いてた。

実際にかいのもらつたから気絶するほどではないにしろかなりダメージは受けている。チラツと見たらなのはは原作どおりフェイトに敗れてジュエルシードはフェイトのものになつた。

「くそーくそー俺はオリ主だぞー（棒）」

「……何言つてんだ？」

「いや、言わなきやいけないような気がして」

俺は傷を癒すため回復薬を飲む。折木のやつ、思つてたより強かつたな。本氣でやつても一筋縄ではいかない相手かも。そして帰つて寝た。

「木だな……」

〈ありや立派な木だな……動いてるけどよ〉

ジユエルシードによつて凶暴化した大木が暴れまわつてゐるのをなのはとフェイト、そして折木が協力して戦つてゐる光景がそこにはあつた。フェイトの「とまれとまれとまれ」がなかつたな。あのジユエルシードは俺が折木にぶん投げたやつだつたのか。それとも智葉が拾つたやつだつたのか。どちらにしろこれで帳尻が合う。

折木が木の根っこをバラバラに切り裂いてその隙になのはとフェイトが砲撃で木が張つてた結界をブチ破りジユエルシードの封印に成功した。そろそろ行くか。

「せりやあああ!!」

「!? はつ！」

「オリト！」

「神代君!？」

干将・莫耶の原典を折木に向かつて斬りかかるもあつさりとかわされる。というかフェイトがオリトつて叫んでるけど何？ 折木和人おりきかずとでオリトなのか。桐ヶ谷和人きりがやかずとでキ

リトみたいに。

「くそつ、またかわしやがつて！ いい加減俺に斬られやがれ！ それとそのジユエルシードをこつちへ寄越しな」

「それはどちらともごめんだな。俺達もそ れが必要なんだ」

「なら今ここでぶち殺してやる。前と同じようにいくと思うなよ」

ちらりとあちらを見るとなのはとフエイトも向かい合つて一触即発の雰囲気。ジユ
エルシードの周りで暴れたら危ないんだから場所を移動するくらいしようぜ。

二人の杖がぶつかり合……

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

わなかつた。黒服の少年が割つて入つて二人を止めたのだ。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい話を聞かせてもらおうか」

みんなご存知、KYでお馴染みのクロノ君。彼は危ないから割つて入つただけで職務
を全うしているだけなのにKY呼ばわりされて可哀想な子。

「二人の戦いの邪魔すんじやねえこのKYがああ!!」

心の中でクロノを擁護してみたものの、俺は踏み台としての仕事を全うするだけなん
で方向転換してクロノに斬りかかった。クロノはそれをS2Uで受け止める。そうい
やこのころはまだデュランダル持つてなかつたな。

「グッ、何をする！ 公務執行妨害だぞ！」

「時空管理局だあ？ 宇宙の果てを知らないようにそんなものは知らねなあ。それに
さつき言つただろ！ 二人の邪魔すんじやねえ！」

「……仕方ない。拘束させてもらう！」

クロノは近距離で俺にバインドをかけて動きを封じた。言葉通り俺は拘束されてしまつたのだ。これくらいなら魔力を流して破壊するくらいはできそうだけれど面倒だしこつちの方がやられ役っぽいからやらない。

「なつ、バインドだと!? てめえ卑怯だぞ！ 正々堂々戦いやがれ！」

「不意打ちしてきた君が卑怯云々を語るな」

クロノ言うことにぐうの音も出ない。そもそも俺の本来の戦法は不意打ち上等卑怯上等だし、正々堂々戦う方が珍しいし。

(カツコ悪)

(何しに来たんだろう。ちゃんと妹さんに謝ったのかな……?)

((時間稼ぎにもならなかつた(ね)))

(……油断しすぎだ)

何を思つてるかはわからんが少なくともこの場にいるやつらは誰一人として俺を賞賛していないことは確かだろうな。

「フェイト逃げるよ！ あいつ管理局だ！」

「で、でもジュエルシードが」

「そんなものより身の安全の方が大事だよ！」

アルフはフェイントをこの場から連れ出そうと彼女を説得している。クロノはそれを見逃す筈もなかつた。

「待 「いかせん!」」

フェイント達を攻撃しようとしたクロノを折木が遮つた。

「二人とも! こいつは俺が引き受ける。早く逃げろ!」

「こいつは俺に任せて先に行けーみたいな台詞は死亡フラグですよ!」
「でも!」

「俺のことはいいから早く! アルフもぼさつとするな!」

「……わかつたよ。フェイント、しつかりつかまつてなよ』

「アルフ! ?」

アルフはフェイントを乗せて、その場から全速力で去つていつた。

「くつ、逃げられた』

「ほつ」

折木はフェイントを逃がすことができて安心するも警戒を解いたりはしていない。同じくクロノも戦闘態勢で二人の睨み合いが続く。その均衡を破つたのは意外な人物だつた。

《クロノ執務官、もう止めなさい》

空中に画面が映り、そこには妙齢の女性がいる。その女性の声を聞いてクロノは杖を降ろした。アースラの艦長でありそこにいるクロノの母親でもあるリンディ・ハラオウ（年齢不詳）さんだ。STSだと統括官になつてたけどイマイチどんな役職かわからん。中将とか大将の方がわかりやすくて好き。

《ご苦労様》

「申し訳ありません。一組逃がしてしまいました」

《それよりそこの子達に話を聞きたいかから連れてきてくれないかしら》

なのはとユーノは言わずもがな、折木も「自分のしたことの責任くらいとる」と言って大人しくついて行くことになった。俺だつて勿論ついて行くそうでなければ話にならないし。

俺達4人はクロノに連れられて次元航行艦『アースラ』へと出向いたのだつた。

第10話

『飢えなきや勝てない。気高く飢えなくては』

とある元天才ジヨツキーが鉄球使いへと放つた言葉だ。人は厳しい環境でこそそれに耐えるべく進化を遂げるのだ。逆にそれがなければ退化していくのみ。動物園のライオンがいい例だ。むやみに怒らせたりしない限りは檻の中で寝ているか見物客を眺めるだけで襲ってくることはない。そのライオンをサバンナに返したら生存競争に耐えられずに死んでいくだろう。動物園では狩りなどしなくとも飼育員が餌を持つてくれる。その日々が続いていくうちに狩りの仕方を忘れてしまったのだ。

そう、俺は飢えるのだ。飢えて飢えてポイントを手に入れるのだ。

俺達はアースラの中へと案内されて盆栽、しそおどし、茶釜と外国人が日本を勘違いしたような茶室に通される。途中でユーノが人間だったことが明かされてなのはは驚いていた。そして俺は「ユーノはいつもなのはの着替えとか見てたんじゃねーの?」とか聞こえるようにボソッと呟いてやつた。なのはも覚えがあるようで顔を真つ赤にして「ユーノ君のスケベ! 変態!」と罵詈雑言のオンパレードでユーノの精神にダメージをあたえたた。

「ようこそ皆さん。私は次元航行艦『アースラ』の艦長、リンディ・ハラオウンです
お茶とお菓子を出された。

「さあ、お話をしましようかつとその前に……」

リンディさんの目線が折木に向く。折木は先ほどクロノにそのフルフェイスをとる
ように言われたが断固としてそれを拒否していたのだ。

「そのフルフェイス脱がないかしら？ 暑いでしよう？」

「いえ、結構です」

「どうしても？」

「はい」

そんなことを言つてゐ間に俺は折木の後ろに回り込む。

〈マスター危ない！〉

「えっ？」

デバイスが今になつて気がついたようだがもう遅い。俺は折木のフルフェイスを掴
んで引つ張り上げた。そして折木の目をぱちくりした顔が晒される。

ざまあ、ブークスクス。

「あつ！ 和人君！」

「てめえだつたのか！」

俺も今初めて知ったかのような反応をしておかないと怪しまれるから内心笑いを堪えて驚いておく。

「ううつ」

「和人君も魔導師だつたんだね」

急いで両手で顔を覆い隠すももう遅い。リンディさんもクロノも折木の顔をバツチリ抨んだどう。

「えつと……一人はお知り合いなのかしら?」

「ち、ちが」「はい、同じクラスの友達なんです」……はあ」

意外性のあつた自己紹介は終わつた。しかし折木は自身も目的を話さず、フエイト達の居場所についても口を割らなかつた。リンディさんも無理に聞き出すつもりもなさそうで、話は先へと進む。ユーノとなのははこれまでジユエルシードを集めていた経緯を話していた。

ちなみに俺と折木のデバイスの出所も聞かれたが、俺は「拾つた」と答えて、折木は「元々両親が魔導師で今は亡くなつている」と答えている。

「……それで僕は地球に降りてジユエルシードを集めていたんです」「そう。立派だわ」

「だが、無謀でもある」

リンディさんは褒めるがクロノは少しきつい言葉を言われ項垂れる。一步間違つたらユーノは死んで事實を知る者はいなくなり被害が今以上に増えたかもしれないのだ。

そしてリンディさんやクロノからロストロギアというものを説明された。ロストロギアというものは簡単に表現すると異世界で高度に発達した魔法技術の遺産のこと。管理局はロストロギアには危険なものも含まれているのでそれを回収して管理する仕事もある。別に何でもかんでもロストロギア扱いしてぶんどつていく訳じやあない。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「君たちは今回のことを見失つて、それぞれの世界に戻つて元通りの世界に戻るといい」
なのはは反論しようとするもクロノに「一般人が出る幕じやない」と正論を言われて黙る。その一般人に数年で追い抜かれるクロノエ……。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もできないでしよう? 一度家に帰つて、今晚4人でゆつくり話し合うといいわ。その上で、改めてお話ししましょう」

やつと来たか。俺はこのためだけにここに来たと言つても過言ではない。

「あのさあ、何で話し合う必要があるんだよ?」

俺が口火を切る。

「一般人の出る幕じやないんだつたら別に話し合う必要なんてないわな? デバイス没

取して諦めさせるなんなりすればいい」

「た、確かに……」

「そうだな」

ユーノと折木が俺の言葉に頷く。

「……何が言いたいのかしら？」

「はつきり言わせて貰おう。リンディさん、アンタは俺達から協力を申し出るよう誘導してるんじゃないですか？ 協力して欲しいんなら堂々と頼んだらどうです？」

俺はドヤ顔でそう言つてやつた。さあ論破しやがれ。

これはよくありがちな話だ。確かにのはは魔力も高く才能もある。管理局は人材不足だとよく言われているし喉から手が出るほど欲しがるだろう。しかしそれはあくまで育成枠としてだ。今の今まで魔法なんて知らなかつた少女を即戦力にしようなどと俺でも思わん。リンディさんだつてそういうだろ。しかもこれからジュエルシードなんて危険物を集めのだからなおさらチームワークの訓練を受けていないのはを進んで加入させるとは思い難い。

人が人を選ぶにあたつて最も大事なこと。それは『信頼』だ。頭がいいとか才能があるとかは二の次だ。今日会つたばかりの少女を信頼できるかと問われれば否だと答える。実際なのははフェイトのためとはいえ勝手な行動をとつていて。結果上手くいつ

たとしてもそれはあくまで結果論だ。

「そうですか、嫌なら別に無理強いはしませんよ。確かにあなた達は強いんですけどそこにいるクロノも私の息子だということを差し引いても優秀な魔導師です。彼一人でもきっと残りのジュエルシードを集めてくれるでしょう。どうぞお引取りを」

リンディさんは全く表情を崩さず涼しい顔で俺を論破した。流石にその若さで（年齢知らんけど）戦艦一つ任される人だ。たかだか少し未来を知っているだけのガキに言い負かされるなどありえんことだ。

クロノをチラツと見たら顔を赤くして口元が少しにやけていた。この頃のクロノは中学生くらいだつたつけ。自分が力入れてる分野で母親に褒められれば嬉しくもなるよな。

俺が固まっている間になのはとユーノは自分から手伝わせて欲しいと志願。折木もフェイトが気になると言つてフェイトについて聞き出さないことを条件にアースラに協力することになる。ついでに俺も協力することにした。



あれから俺達は3個のジュエルシードを、フェイト側は2個のジュエルシードを手に

入れて残りは6個。海にあるジュエルシードのみとなつた。

海上での6個のジュエルシードの暴走は原作と違つてなのはとフェイト、そしてそれをサポートした折木によつて封印され、半分ずつ分け合う。俺はとりあえず連れ戻そうとしてたクロノを邪魔してた。

そして舞台はいよいよ佳境に差し掛かる。なのはとフェイトの決闘が始まつた。俺、折木、ユーノ、アルフは手を出さない正真正銘二人のガチンコバトルだ。

「受けてみて……デイバインバスターのバリエーション。これが私の全力全開！　ス

ターライトオブレイカー——！」

自分が使える中で最強の技を使つた後というものは必ず隙ができるというもの。だから最強の技を使うのであれば必ず相手を仕留めなくてはならない。フェイトはなのはを仕留めきれずに逆にバインドに捕まりスターライトブレイカーの餌食となる。これはアカン、間近でみるとものすごい迫力でとてもとも人に向かつて撃つていい魔法には見えない。

「ん？」

「何だ？　雲が……」

俺と折木が空を見上げるといつの間にか暗雲が立ち込めていた。そこから紫色の雷が走りフェイトを襲う。

「フェイト!!」

折木が急いでフェイトの元へ駆けつけふらつきながらも飛び続けているフェイトを支える。そうしているうちにフェイトの持っていた9個のジュエルシードは上空へと吸い込まれていってしまった。これは見逃さないと時の庭園までの座標を特定できないからな。今頃エイミイがジュエルシードの行く先を辿つて座標を割り出しているだろう。

一行は一先ずアースラへと帰還した。フェイトは折木やなのは達の懇願もあつて拘束されずに手厚く保護された。

アースラの前の画面には先に突入した部隊が見える。そこで彼らが見たのはフェイトそつくりの少女が円柱のガラスケースに液体とともにに入れられている光景。少女の名はアリシア・テスタークッサ。フェイトの元となつた人物で、とある事故で既にこの世を去つている。

プレシアは紫の雷で突入部隊をあつという間に殲滅しアリシアが入つてゐるガラスケースを愛おしそうに見つめる。

プレシアはきっとこの光景をフェイトが見てゐるだろと喋りかける。もう終わりだと、フェイトはアリシアの代用品にすらなれなかつたと、お前はもう要らないと高笑いしながらフェイトへ叫んだ。

「もう止めてよ！」

「プレシアア!!」

なのはは泣きながら、折木は憤怒の表情でプレシアを見ている。このときプレシアは本当はどう思っていたのか、俺はプレシアではないからわからない。本当にフェイントを憎んでいたのかかもしれないし、本当は愛していたからこそ自分と一緒にいてはいけないと突き放したのか。真意はこれから確かめに行くとしよう。

プレシアはフェイントが集めたジュエルシードを発動させて次元震を引き起こす。そのチカラであらゆる秘術があるとされる伝説の都『アルハザード』へ行きアリシアを蘇らせることがこそプレシアの真の目的だった。

「あ……ああ……」

真実を知り、プレシアに見捨てられたと知ったフェイントの目は光を失っている。
心だ！ 今の彼女には心が必要なんだ！

「フェイント！」

「あ……オリト……」

折木はフェイントの両肩を掴み、優しく微笑みかける。

「もう和人でいいよ。……フェイント、お前は人形なんかじゃない」

「え？」

「何度も言うぞ、お前は人間だ。たとえアリシアのクローンとして生まれたんだとしてもだ。少しの間だつたけどお前と一緒に過ごした日々は偽者なんかじゃない！　お前はお前だ！」　フェイト・テスター口ッサだ！」

うん、熱い言葉だね。お兄さん泣きそうだよ……主に出る幕がないことで。クールに去りたいところだけどそんなわけにはいかないし。

「……ねえ和人。私はどうしたらいいのかな？」

「それは誰かに聞いちやいけないよ。自分で決めるんだ。フェイトはどうしたい？　このままだとお前の母さんは何処かに行っちゃうぞ」

（ウジウジしても何も始まりませんよ。全てが終わって後悔してからでは遅いんですけど）

「それは……嫌だ。母さんとちゃんと話がしたい！」

「そうか、なら一緒に行こう。俺もお前の母さんに物申したいことが山ほどある」

「そ、それに母さんに和人のことも紹介したいし……」

フェイトさん顔を赤らめている。折木はすでにフェイトにもフラグを立ててたのか。それとも弱ってるところに優しくされてコロッと落ちたのか。

「ん？　何か言つたか？」

「う、ううん何でもない！　急ごう！」

折木はフェイトを連れて転送装置のある場所へと走つていこうとするがその前にクロノがいた。

「クロノ、止めてくれるなよ」

「勘違にするな、僕も行く」

「わ、私だつてフェイトちゃんのお母さんに言いたいことがたくさんある！」

「全ては僕から始まつたことだ。最後までキッチリ片をつけたい」

「あたしも行くよ。あんの鬼婆に一発かましてやらないと気がすまないからね」

クロノの言葉を皮切りになのはどユーノ、アルフも立ち上がつた。原作と違つて最初からフェイトも参戦状態だ。

「ここまで来たんだ。最後まで付き合うぜ」

正直帰りたい気持ちで一杯だけどついてかないとな。プレシアさんが実際どう思つているのかも気になるし、上手くポイントも稼いでおきたいエイミイの手腕で俺達7人は時の庭園へと転送された。



転送された先では大量の傀儡兵がところ狭しと配置されていてそう簡単に先へ進め

そうにない。ここはまだ入り口で中にはもつと大量にいることだろう。

「全員下がつてろ。ここは俺がやる」

俺はそう言つて一步前に出る。

「そうか、君の能力なら」

「そういうこと、皆は魔力温存すればいい」

俺の後ろの空間が歪んで数多の武器が姿を現す。そしてそれを襲つてくる傀儡兵に向けて投擲していく。小さいのも巨大なのも宝具の雨によつて次々に爆散していくき、ついでに扉もぶち壊して中にいた傀儡兵も多数破壊していくた。これでもランクA以上の宝具は温存してるんだぜ、ゲートオブ・ビロン王の財宝マジチート。

「ざつとこんなもんよ」

「……とんでもないな」

「あのときまともに攻撃を受けなくて本当によかつた」

クロノと折木以外は驚きのあまり絶句しているようだ。なのはやユーノの前でもあるここまで本気でやつたことはないから無理もない。

「よし、先を急ぐぜ！」

「君が仕切るのか!?」

俺達はクロノを先頭にして庭園内を進んでいく。途中で見える虹色の変な穴は虚数

空間といつて魔法が使えなくなるそうだ。クロノに言われるまで忘れたぜ。

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝で傀儡兵を破壊しまくつてもどんどん出てきやがる。走りながらの投擲は結構疲れるつてのに。ギルが仁王立ちしながら宝具撃つてる理由がわかつた気がする。

虚数空間を避け傀儡兵を倒しながら進んでいくと途中で分かれ道になつていたので途中で立ち止まつた。

「ここから二手に分かれて進もう。やることは二つ。プレシアの逮捕とこの庭園の駆動炉の停止だ。こんな大掛かりな妨害だ。恐らく、エネルギーは駆動炉から供給されるはず。駆動炉を停めれば仕掛けも停止するはずだ」

プレシア逮捕という言葉にフェイントは少し複雑そうな顔をしている。でもどんな理由があつたとしても罪はちゃんと償わなければならぬしな。

「フェイントと和人と劉牙は僕とプレシアの方へ、フェイントはプレシアと向き合いたいだろうし、和人と劉牙には僕の壁になつて貰いたい」

「殴つていいか？」

「張つ倒すぞ！」

「冗談だ。なのはとアルフ、ついでにフェレットもどきは駆動炉へ向かつて欲しい」

「うん、こつちは私達に任せて」

「誰がフェレットもどきだ！ それとついでってどういう意味!?」

「駆動炉に行つたら鬼婆殴るの後になるじゃないかい！」

それぞれ腑に落ちないことがあつたが時間も無いので渋々承諾し二つのチームに分かれて俺達は最下層へ、なのは達は最上階へ向けて再び走り出す。

第11話

「そらそらそら——!! ……ハア、ハア」

投擲した宝具によつて次々に傀儡兵は木つ端微塵になつていく。そして段々息切れしてきた。クソツ、こいつら（フェイト以外）雑魚の殲滅俺にばつかりやらせやがる。そろそろ魔力が切れそうだ。魔力にまでリミッターかけてることがここであだになつた。

そして一番奥のでかい扉の前まで到着。まるでRPGで魔王が待つてそうな部屋の扉に見える。しかしこれをどうやってあけるかが問題だ。俺は疲れたので近くの壁にもたれかかつて休む。

「神代は少し休んでろ。この扉は俺が開けよう」

折木の手が扉に触ると巨大な扉が分解されて折木の両足に黒い装甲として再構成された。アルター能力の分解と再構成を上手く利用して扉を開けて能力を発動するという一石二鳥な手段を取りやがつた。というか傀儡兵とかこの手段で破壊できたじやねーかよ。

扉の先にいたのはアリシアの入つたガラスケースを眺めるプレシアさん。思ったよりも来るのが早かつた俺達を忌々しそうに見つめている。

「フェイト、あなたも来たのね。何をしに来たのかしら?」

「……母さん」

「さつき言わなかつたかしら。あなたはアリシアの、私の娘の出来損ないなのよ。あなたに母親と呼ばれる筋合いはないわ」

言い寄ろうとしたフェイトを容赦なく拒絶するプレシア。それでもフェイトは諦めなかつた。諦めたらここまで連れてきてくれた皆さん申し訳が立たないからだ。

「私は話をしに来ました。貴女の娘……フェイト・テスタークサとして。……私はアリシア・テスタークサじやありません。貴女が作つたただの人形なのかもしません」

フェイトは現実を受け止めてなお前に進もうとしている。

ふと思つたのだが、フェイトはアリシアの一つの可能性だつたのではなかろうか。プレシアさんは「こんなのアリシアじやない」とか言つてるが、もしかしたらアリシアが少しでも違つた成長をしていたらフェイトのようになつていたのかもしぬれない。遺伝子が同じなのだから可能性はありそうだ。アリシアは魔力を持つて生まれてこなかつたんだつけ。つまりフェイトは並行世界で魔力を持つて生まれたアリシア……つて何だか俺でもよくわからなくなつてきたぞ。

「だけど私は、フェイト・テスタークサはあなたに生み出してもらつて、育ててもらつたあなたの娘です」

俺はそのときプレシアさんの顔が一瞬悲しそうに歪んだのを見逃さなかつた。ほんの一瞬だつた。そして狂つたように笑い出す。それはフェイトの思いを込めて発した言葉を嘲笑うかのようだ。

「……だから何だというの？ 今更あなたの事を娘と思えというの？」

「あなたがそれを望むなら、私は世界中の誰からもどんな出来事からもあなたを守る。私があなたの娘だからじやない。あなたが私の母さんだからッ！」

その言葉を聞いてもなおプレシアさんは思いを変えることはなかつた。フェイトから目線を外しアリシアへと向く。

「私は娘を……アリシアを取り戻す。その為に、アルハザードに行くのよ！ ゴホッゴホッ」

プレシアさんが嫌な音を出して咳き込む。嫌な音も出る筈だ、何せ吐血しているんだから。

俺は何か言おうとしたがちょっと疲れすぎて声にならない。

「……ふざけんなよ」

「何か言つたかしら？」

「ふざけんなって言つたんだよ！ あんたは逃げてるだけじやねーか。娘の死からも！ 残つた家族からも！」

「十年も生きてないような子どもが知つた風な口を！」

「そんなにフェイトが嫌いなら、憎いなら処分すれば良かつた。もの言わぬ傀儡兵にもジユエルシードを集めさせれば良かつたんだ！ 何でしなかつたんだよ!?」

そうだ。その姿を見るだけでも辛いのなら何処かへ捨てるなり処分するなりできた。自分で直接手を下すのが嫌なら適当なこと言つて死ぬのが確実な危険なことでもやらせればよかつた。俺が思いつくくらいだからプレシアさんだつて当然思いついた筈。だがやらなかつた。

プレシアさん折木の言葉に明らかな動搖を見せている。

「だつて……私にはフェイトの母親を名乗る資格なんてないのだから……」

「何を言つている……？」

「母さん？」

プレシアさんの様子が急変した。先ほどまでの狂氣は全く感じられず、とても穏やかな表情をしていた。その眼からは涙が溢れている。

「聞こえてるかしら管理局。フェイトは私の命令で動いてただけ。全ては私の責任よ」

それほど大きな声ではなかつたがこの場にいる全員が聞き取れる声だつた。

「母さん!?」

「貴女一体何を!?」

リンディさんとフェイトが驚いた声を上げる。俺はこの言葉に嫌なものを感じた。折木も同じ気持ちだつたらしく脂汗をかいている。少しだが体力が回復した俺は立ち上がつて様子を見ることにする。

「フェイト……さよなら。幸せになりなさい」

ブレシアフェイト

母は娘に精一杯の笑みと別れの言葉を送る。ジュエルシードを制御する体力ももうなくなつたのか時の庭園は崩壊を始めた。

彼女の足元に亀裂が走り足場が崩れだす。フェイトが泣きそうな顔でブレシアを助け出そうとするも、急いで駆けつけたアルフがそれが無理だと判断し身体を張つて止めた。

「つざけんな！」

しかし我らがオリ主は諦めていなかつたようだ。超スピードでブレシアの元へ駆けつけその手で彼女の手首を掴む。

「天の鎖よ！」

そして俺はアリシアが入つたポットを天の鎖エルキドウで引き上げて回収に成功する。思わずやつちやつたけどどうしようこれ。

「ナイスだ神代！」

「言つてる場合か！ さつさと引き上げろ！」

ラディカルグッズスピードだからこそ間に合つたが時間に猶予があるわけじやないぞ。それにポット持つてるせいで両手が塞がつて何もできないし。

「うわあっ!!」

折木の足場も崩れ落下しかけるもプレシアの手首を掴んでいる手とは反対の手で近くの瓦礫を掴んで、一先ず虚数空間に真っ逆さまは避けられたが、ピンチなことに変わりはない。

「早くその手を離して逃げなさい！」

「離してたまるか！　あんたが死んだらフェイトが悲しむんだ！」

「意地を張つてる場合じゃないでしよう!!　このままだと二人とも……」

「あんた、さつき吐血してたけど病気なのか？」

「今はそんなことどうでも「俺は、プレシア・テスタークサの病気を治す！」何を言つて……」

折木がそう言うとプレシアさんが淡い緑色の光に包まれる。一体何が起こつてゐるのかわからん。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

折木は唸りながら渾身の力を込めて自分よりも身体の大きいプレシアさんを投げ飛ばした。それをフェイトとアルフが慌てて受け止める。

「イタタタ」

「ううつ……はつ、和人は!?」

あいつは何処だ?

「嘘……?」

プレシアさんをぶん投げた反動で逆に虚数空間に落ちていく折木を見て俺達は愕然とした。今からじやもう遅すぎる。もう助からないであろう折木の顔に悲壯はなく、ただただフェイト達を優しい表情で「幸せにな」と呟いていた。カツコつけたつもりかよ。「和人オー———ツ!!」

フェイトの悲痛な叫び声は庭園内に木霊してより虚しさが増してくるような気持ちになる。

あの野郎は自分を犠牲にしてフェイトの笑顔を守つたつもりだろうが、結局のところ別の悲しみを植えつけただけだった。

◆

時の庭園が完全に消え去る前に折木を除いた全員が脱出に成功した。折木が虚数空間に落ちて行方不明になつたことをなのはが知るとやはりショックを受けて顔を真つ

青にしている。泣かないのはショックが大きすぎて逆に泣けないのか、それとも泣いてしまつたらそれを事実だと認めてしまうことになるからだろうか。テスタロッサ親子も勿論折木のことを悲しみ、そして感謝をしていた。

事件の処分についてだが、フェイトはプレシアさんの自白があるから裁判で有利になるだろうとクロノは言っていたが、主犯であるプレシアさんはそうもいかないだろう。せつかく親子の蟠りがなくなつたのに現実は非常だつた。と思つたらそうでもなかつたらしい。

「これを……」

プレシアさんは持つてているデバイスをから何かのデータを取り出す。何語で書いてあるかわからないから俺には読めない。

「これは?」

「ヒュードラ事件の全貌よ」

「なつ!?!」

ヒュードラ事件は確かプレシアさんがアリシアを亡くした事件だつたつけ。データは他の研究員がプレシアさんに罪を擦り付けるために削除したような。

「……艦長、これ」

「ええ、当時の安全基準が満たされてないわね。……これが本物だという証拠は?」

「ないわ。別に捏造だと思つてくれても構わない、私が犯した罪くらい自分で償うつもりよ。でもこれでフェイトの罪がなくなる可能性が少しでも上るのなら、私を陥れた奴らが捕まつてくれるのなら御の字よ」

どうやらデータをバラバラにしてばれないように何処かへ迫いやつてたらしい。それでチャンスを見つけては回収して繋げていつたとのこと、抜け目のない人だ。

それとこれは本人も驚いていたことだがプレシアさんが患っていた病がいつの間にか完治していたらしい。「身体が軽い。こんな気持ち初めて」的な気分だと思う。

俺はといえば折木とは別に親しい仲ではなかったから特別悲しいという感情は生まれなかつた。寧ろあの顔をボコることができなくなつて悔しくはあるし、それに超オリ主補正とかいうふざけた補正によつて生かされてる可能性を考慮すると余計に悲しいとは思はない。

全てが終わり、なのはと俺は地球へと帰される。なのはは強がつてはいるものの、顔には陰りが残つたままで彼女が心に負つた傷が大きいことは明白だ。

俺は真っ直ぐ家に帰つて両親と智葉に顔見せだ。許可はとつてあるものの魔法云々は話してないからなるべく心配させないようにしないと。

「……疲れた。やっぱ家が一番だわ」

「ふいー。何か久しぶりに喋つた気がするぜ」

デバイスとの不仲を演じるために皇帝には基本黙つてもらつてゐるけど、これつて意味あるのか。

「ちょっと寝よう」



気がつくと俺は転生前にいた白い空間にいた。そして目の前にいるのは 神吐き氣を催す邪惡。

「……何の用だ？」

「まずは無印を無事終えたことを祝つてやろうかと思つての。ふんふん……踏み台ポイント9130 ptか」

すげえ、もうそんなに貯まつてたのか。これなら目標達成待つたなしじゃね？

「しかしのお……正統オリ主が犠牲になつてしまつたなあ……」これはイカソイカソンよなあ

神クソッタレはわざとらしく「イカソイカソンなあ、イカソイカソンよなあ」と繰り返している。

「やはりオリ主を守りきれなかつたことにペナルティを課さないとイカソイカソンよなあ」

「なつ!？」

こいつは今何ていつた？

折木を守れなかつたことに対するペナルティだと？

「ふざけるな！ んなもん自己責任だろ！」

「何がいいかのオ～～？」

肩 神はこちらの話は聞かないがこちらを見てニヤニヤしながらわざとらしく悩んでいるふりをする。

「やはり減点か。せっかく集めたポイントじゃがこればっかりは仕方ないの」「てめえッ！」

俺は正直我慢の限界だつた。血反吐を吐く思いで集めてきたポイントがこんな勝手な思いつきで減らされるなんて。しかし俺の思いに反して俺の腕は上がらない。いや、腕どころか身体全体が鉛のように重いのだ。

「30000ptマイナスで6130……いやキリよく60000ptでいいか」

「ふつざけんじや 〈ただの建前だろ〉」

俺の負け犬の遠吠えにも等しい罵声を皇帝エンペラーが遮つた。

「？」

〈ただの建前だろ？　あのオリ主を守れなかつたとかよ。ただ単に旦那がこんなに早くポイントを貯めにくるとは思わなかつた。それでこじつけでそれを減らしにきたつて話だ、違うか？〉

「そうじやよ」

あつけらかんと言ひ放つ。クソミソカス野郎はそれを隠す氣もなかつたようだ。

「それとついでじや。やはりT Sの呪いだとあまりにも軽すぎて緊張感にかけるのでな、呪いは変更じや。目標達成できなければ『この世界全ての者の記憶からお前の存在が消え去る』にしておこう」

「クソ野郎ぶち殺す！」

「安心せい、すぐになくなるわけじやないわい。関係が薄いものから徐々に忘れ去られていくんじや。どうじや？ 優しいじやろ？」

優しい？ んなわけあるか。どんどんみんなの記憶から忘れ去られていく恐怖を徐々に味わうのだ。生殺しだ。よく、『人が死ぬのは全ての者から忘れ去られた時』と言われる。もし俺がそれを体験するはめになるとしたら……考えただけでぞつとする。

「てめえは……てめえは人を何だと思つてやがる!!」

「玩具……かの？」

「てめえッ!!」

「ふむ、貴様は踏んだ蟻の死を悲しむのか？ 肉屋に並ぶ肉を見て牛や豚が死んだことを嘆くのか？ それと同じことじやよ」

殴りたい、殴りたいのに身体が動かない。悔しい、こんな悔しいことがあつてたまるか。俺が何をした。何故俺だけあいつとここまで扱いが違う。

「それと最後にいいことを教えておいてやろう。オリ主、折木和人は生きておるぞ。あいつにやつた特典の一つ「神の奇跡×3」の内一回を使って虚数空間から抜け出して八神家に転移したようじや。よかつたの？ 全く、アリシア蘇生に使う筈の一回をこんなことに使いおつて……まあよいか、わしりインフォース派じやし」

神が何かをぐちぐち言つてゐるが俺にとつては内容なんてどうでもいい。

「おおおおおおおおおおつ!!」

理由はわからないが立ち上がるだけならできた。歩くのも鈍いが多分できそう。もしかしたら殴れるかもしれないと考え腕を振りかぶる。

「何じゃ？……つて立ちあがつとるし！？」
しかし殴ることは叶わず
もう用事も終わつたし帰れ」

——ぐあつ!?

神の掌から発射された衝撃波で吹き飛ばされて、俺は意識を失う。 目が覚めたらさつきまでいた俺の部屋のベッドの上。酷く汗をかいていたらしく掛

け布団が湿っている。

俺はその後家族で夕飯を食べて部屋に戻りベッドで寝転がりながら先程のことを現実だと受け止めて……泣いた。

A,
S編

第12話

気分は最悪。持ち直すまでにしばらくの時間をかけてあれから一ヶ月が経過。ヴォルケンリツターも闇の書から出てきたことだろう。

正直神^{カズ}への意趣返しとして八神はやてと折木をまとめて葬ろうと5月末に八神家に向かつて宝具を投擲しようとしたが、できない。どう頑張っても、何をやっても攻撃ができない。どうにかして殺害しようとするも急に心変わりしたり身体が動かなくなったりという怪奇現象が起つる。

怪奇現象と言つてみたもののだいたい原因は想像つく。ゴミ^神は俺が暴走して原作キヤラを殺害しないようになんらかのストッパーをかけているとみた。ちなみに解除の方法も思いつく限りのこととしたが全て徒労に終わる。契約を切る宝具を使つたら宝具自体が跡形も無く壊れるということもありどうしようもない。

つい最近八神はやてを見かけたがまだ車椅子生活を送つていて。折木のお人好しを考慮すれば能力で治してそうなものだが意図的にそうできないように俺と同じく何らかの精神操作はされているとみた。仮に治さなくとも闇の書を夜天の書に戻せば治る

のだからデメリットにすらならない。

万策尽きた。王の財宝の中には神殺しの宝具の原典。例えば有名なロンギヌスの槍、天の雄牛を繋ぎとめた天の鎖、フンババの首を切り落とした青銅の斧、カグツチを斬った天之尾羽張等々パツと思いつくものだけでもこれだけある。ただこれがあれに通用しない可能性があるから策とするにはちょっと足りない。

何もしなければ皆から俺の存在が消されて、仮にポイントを集めたとしても解放されるとは限らない。そしてちょっとした意趣返しさえも許されない。

「やめだやめ！」

俺はこれ以上考えてもどツボに嵌るだけだと一先ず『考えるのを止めた』。とにかく俺はまだ弱い、弱すぎる。リミッターをかけてあることを差し引いてもだ。もし強くなつて、そしてクソッたれの神様を一発でも殴ることができるのが御の字だ。それにあいつは俺がどんな反応を示すのか楽しんでいる。いじめというのは大抵苛めた対象がどんな反応をするかを見て楽しむためにやるものだ。俺が嘆き、苦悩すればそれはやつに娯楽を提供していることと同意。

これからあつてはならないのは……『精神力』の消耗だ……くだらないストレス！
それに伴う『体力』へのダメージ…!!

くだらない消耗があつてはならないッ！　いや……逆にもつと強くなつてやるッ！

まずは修行だ。とは言つても魔力を鍛えても仕方が無いし王の財宝は鍛えようが無い。この際だから波紋呼吸法でも覚えてシャボンランチャーもどきを改良するか。

修行一日目

まずは魔法で肺などの呼吸器官を強化。強制的に波紋の呼吸ができるようにする。そして波紋の呼吸を自分の身体にじょじょに慣らす事から始めた。

「コオオオオオ……」

確かにこんなカンジだつた気がする。一気に息を吐くではなく少しづつ吸い込み少しづつ吐くのだ。

「クウオオオオオ……ゲホッゲホツ」

何十回かやつたあたりで咽た。頭が痛い。脳にいく酸素の量がおかしくなつたせいかも、ちょっと休憩。

休憩ついでに自分のデバイスに気になつていたことを聞くことにした。

「なあ皇帝エンペラー、お前はどうして俺に協力してくれるんだ？」

「神づいぶんと今更な質問だなあ、おい」

「しかしあのクズから送られてきたにしちゃえらく送り主に反対的だつたじやないかよ」

「そりやあいつに創られたわけじやねえからさ。それに旦那のことはかなーり氣に入つ

てんだぜ』

「その言葉がおべんぢやらでねえことを祈るよ」

〈ひつでえなあおい〉

修行一ヶ月目

7月になるころ、身体から薄らとだが鮮やかな山吹色の光を発した。一ヶ月経つて何も変わらないようなら諦めようかと思つた矢先にやつと成果が出た。この呼吸のリズムを忘れないよう反芻して身体に刻み付ける。独学にしてはものすごい成長速度だと自負している。

八神家を見張らせている瑠璃丸とは別の虫、鬼灯丸を通して知つたことだが折木のやつもシグナムに弟子入りして剣術の稽古をしているようだ。俺つて師匠とかいないよな、心の師匠はジョナサンとシーザーとジャイロだけど。

「はい、ボカリ。ちょっとは休んだら？」

「サンキュー」

智葉に水筒を渡されて、俺は修行を中断して水分補給をすることにした。呼吸をする際に一緒に体の中の水分も放出しているから喉が渴く。

修行は皆に内緒で行つてゐる筈だつたのだけれどいつの間にやら智葉に嗅ぎつけられて、時々こうやつて飲み物を持つてきてくれる。

「前から思つてたけど、その変な呼吸何なの?」

「えー……これはあれだ。アンチエイジングつてやつだよ」

間違つてはいない。間違つてはいないよ。

「アンチエイジング!? まだ九歳なのに?」

「若いからつて油断しちゃいけねえぞ? こういうのは若いうちから始めることに意味があるんだよ」

適当な事言つているけれど、この世界にジョジョは無いし波紋だの仙道だの言つたところで分かる筈も無い。

「ふーん、私も運動くらい始めようかな……」

「いいんじゃない?」

修行二ヶ月目

やつと魔法の補助無しで波紋が練れるようになった。波紋を流しながらの壁登りは無駄ではなかつたようだ。夏休みの宿題は日記と自由研究以外初日で全て片付けて波紋の修行に専念していた甲斐があるというもの。流石に油柱なんてないから姿を消しながらマンションの壁を登つての訓練だつた。

水の入つたコップを逆さにしても水が落ちないし水の上に立つこともできる。

「長かつた……つつても二ヶ月程度だけど」

〈俺はなーんもしてねえからすつげえ暇だつたぜ〉

射撃の腕を上げよう。俺は王^{ゲートオブ・ビヨン}の財宝^{カーボン}から時の庭園にいた傀儡兵を取り出す。投擲した宝具を回収した際に何かの手違いで一緒に回収していたらしい。壊れていたが他の宝具の影響を受けたのか修復してるだけじゃなく性能も上がっていた。的にするにはちょうどいい。

久しぶりに皇帝^{エンペラー}を構える。自律で動く傀儡兵は全部で8体。小型で動きの早いタイプを選んで配置した。そしてその8体は様々な方向から俺に襲いかかってくる。

俺は攻撃を避けながら腰溜め撃ちで傀儡兵3体の頭を撃ち抜く。頭部を失った傀儡兵は機能を停止しそのまま落下した。残りは後5体。

近くにいた敵を踏み台にして空中へ跳躍。上空から残り5体の頭上を撃ち抜いて8体とも機能を停止した。

「……なるほど、少人数相手ならかなり有効だな」
〈だろ!?　だろ!?　だろお〜?〉

魔力の消費量が少ないのもいい。使い道としてはやつぱりシャボンとの併用が一番だ。吊るされた男^{ザ・ハングド・マン}とかあればいいな。

今度はシャボンランチャーの特訓に取り掛かろう。

修行三ヵ月目

「シャボンカツター！」

シャボンを高速回転を加えて円盤状に変化させ放つシャボンカツター。波紋を帶びているから割れる必要が無く、魔力を流して起爆効果も付加してある。シャボンカツターは傀儡兵の胴を真つ二つに切り裂いた。ゲート・オブ・パビロン王の財宝程の破壊力やスピードはないが放つまでの速度はこちらの方が上だしなかなか使いやすい。

「壊れた水泡」
[ブローケン・シャボン]

大型の傀儡兵は流石にスパツと真つ二つにはできなかつたから起爆効果を使つて粉碎。技名は単にカツコつけてみただけ。シャボンの維持に波紋を使つてお陰で魔力を起爆効果のみに集中できるから爆発力も強くなつていた。

そしてスクラップになつた傀儡兵の部品を使つてちよつとしたものをつくつてみた。正面に角の骸骨がついた丸い形の戦車にしてその中身に相手を追尾するタイプの道具と着弾すると爆炎を放つ道具を組み込む。相手を追尾して着弾と同時に爆炎を放つ兵器が完成した。

夏休みも終わつたてもう9月か。学校もあるし修行は少し減らそう。

修行五ヶ月目

波紋の成長が伸び悩み始めた。正直これ以上何をやつていいか思いつかない、独学ではこれが限界なのか。それとも俺にはやはり実戦が足りないのだろうか。戦いの最中

に成長するのなんて王道バトルものの主人公だけだぜ。

幽波紋スタンダードが発現しないかと王ゲートオブ・パビロンの財宝オブ・パビロンの中を漁つてみたが『スタンダードの矢』はついぞ見つかることは無かつた。

その代わりプロトギルが使つてた金色の双剣が見つかつたけど使い道もないし物騒だから元に戻す。ある意味エアより危険だよなあれ。つーかエアが危険だからって理由で入れない癖になんでこれが入つてるんだろうって思う。

修行六ヶ月目

黄金長方形の回転があつたやんとシャボンカツターに『黄金の回転』を加えて放つ試みを開始。

LESSON 1 『妙な期待をするな』

LESSON 2 『筋肉には悟られるな』

LESSON 3 『回転を信じろッ！　回転は無限の力だ。それを信じろ』

LESSON 4 『敬意を払え』

この四つを意識しろ。1：1・618の黄金比の長方形を自然界の中から探し出せ。正直もつと早く気がつくべきだつた。

一ヶ月で黄金長方形の回転を極める？
できるわけがないッ！



もう12月か、結局黄金長方形の方はからつきしだつた。一応腕につけている時計は黄金比率の長方形の形をしている。諦めて何もしないよりはマシだし、そもそも今は極めても使えない。

「なのはが襲撃されるのって12月の頭だつたつけ？」

俺の虫が色々監視しているから知識のズレはカバーできる。

〈旦那！　なのはの嬢ちゃんが襲われてるようだぜ！〉

「ああ」

俺は家を出て飛行靴を履き空を飛ぶ。

空ではすでにフェイト達がなのはの救援に来ていてユーノはなのはの怪我を治している。そして赤いゴシック調のドレスを着ている少女、ヴィータは黄色のバインドに捕らえられて動きを封じられていた。

二対一でフェイト達が優勢かと思いきやピンク色の長髪をポニーtailにした女騎士、シグナムと銀髪で犬耳が生えた筋骨隆々の偉丈夫、ザフィーラが駆けつけ人數的には五分五分となつた。

いやー、鬼強いツスねシグナムさん。カートリッジが無いとはいえフェイトが手も足

も出ない。

「どうしたヴィータ、油断でもしたか？」

「うるせえよ、こつから逆転する所だつたんだ！」

「そうか、それは邪魔したな、すまなかつた」

シグナムは目を閉じてヴィータの動きを封じているバインドを解いた。

「だがあんまり無茶はするな、お前が怪我でもしたら主達が心配する」

「わあつてるよ！ もう……」

「それから、落し物だ」

拗ねているヴィータの頭にウサギの顔がついた赤い帽子を置き、子どもをあやすかの
ように頭を軽く叩く。

S T Sだとあれ被らなくなつたよな。子どもっぽいからか？

「破損は直しておいたぞ」

「ありがと、シグナム」

そろそろスタンバツとくかと思い宝具を展開する。

「状況は実質3対3、1対1なら……」

「おつと残念、これで4対3だ！」

「な!？」

二人へ向けて宝具の雨を降らす。非殺傷だしせいぜいDランクの宝具だしと思つて容赦なく放つた。やつこさんは突然のことで一瞬反応が遅れてしまつたようだ。煙が晴れたがそこに二人の姿は無い。

俺はハツと新しい気配がした方向に体を向ける。

そこにいたのは二人を抱えている折木の姿だつた。ラディカル・グッド・スピードの速さであればこれくらいは当然か。

「折木イ！ 何でテメエがここにいやがるんだよ!!」

知つてゐるけど正直あいつがどう答える氣か興味あるのであえて激昂した口調で問いかけた。

「テメエは虚数空間に落ちて死んだ筈だろうが！」

「なつ、どういうことだ和人！」

シグナムとヴィータはそのことについては聞かされていなかつたようで動搖してい
る。

それに対しても折木は酷く冷静だつた。

「……答える必要は無い」

はい死刑♪

けれど今ではない。

「ぶち殺す！」

「やつてみろ」

やつべえ、今すぐこいつをミンチにしたい。

後ろから適当な剣を選んで折木に叩きつける。

折木はそれを難なく受け止めた。

「そこのお嬢さん方、大方こいつに何か吹き込まれたんだろう？ 今俺が解放してあげるからね」

鍔迫り合いの最中にシグナムとヴィータの方を向いてニッコリと笑いながら歯の浮きそうな台詞を吐く。

「……シグナム、知り合いか？」

「いや、心当たりはないな」

二人はそんな俺を見て微妙な顔をしていた。

ドン引きしてくれた方がまだマシだった。

「どこを見ている！」

「ぐつ」

折木は俺が余所見をしている隙に俺が持っていた剣を弾き落とす。俺は少し距離をとった。

二人はもう自分達の戦いへと赴いたようでもうここにはいない。

そして今頃なのははSLBのためのチャージを始めていることだろう。「すまない、こつちは急いでるんだ。早々に片をつけさせてもらう」

「生意気言うんじゃねえぞモブか!!」

二本の剣を取り出してめちゃくちゃに振り回す。

「精度が低い、あれから特に成長してないのか……」

一振りで俺の二本の剣を破壊した。生意気なことを言つてはいるだけに能力のパワーアップはしているらしい。

ラディカル・グッド・スピードの足で上空に高く跳ぶ。

「壊滅のオ……！——セカンド・ブリットオオオオ！」

上空から高速回転しながら俺に向かつて一直線に降下してくる。

「ア、……ガアアアアアアア！」

バリアを展開するもあっさり破られて俺に直撃。その直前に俺は思いつきり仰け反つて自分から吹き飛び威力を軽減する。相手が手応えを感じつつ自分はその衝撃をできるだけ外に逃がして戦う戦法にはもう慣れた。

そしてSLBが結界を壊す。

気がついたら折木が消えていた。どうやら結界が壊れた瞬間逃げ出したようだ。

こうして俺の最後の戦い（になるかもしれない）が幕をあける。

第13話

なのはは原作通りリンカーコアを蒐集され時空管理局の本局にある医療施設へと運び込まれる。無論魔法がしばらく使えなくなるだけで命に別状はない。魔法だつてリンクアーコアが回復すれば以前と同じように使用できる。

しかし彼女達がダメージを受けているのは折木の存在。
何故奴が生きていて、しかも敵に回っているのかだ。

「何で和人君が……」

「分からぬ……でもきっと何か理由が」

二人の希望的観測。特にフェイトが自分が助けて貰っていた前例もあるためきっとそうだと自分に言い聞かせていることだろう。だが、どちらにしろあいつがあつちやこつちやフラフラと味方につく蝙蝠じみた行為をしていることに変わりはない。

「はあ、なのはもフェイトもいい加減現実を見る。あいつは屑だ。犯罪者に手を貸して
いる屑だよ」

「で、でも！ もしかしたらあの人達に脅されてるのかもしれないし」

「そんな風には見えなかつたぜ。そもそも何故あいつは生きているのに何の連絡も寄越

さなかつた？ そんなの連絡して生存がバレることを嫌がつたからだろ。虚数空間に落ちた振りをして死を装い裏でコソコソ動いてたんじゃねーの？ お前ら結局あいつに騙されてたんだよ」

二人は俺の言葉に目を伏せた。

半分は唯あいつに悪口が言いたかつただけで、もう半分はもし自分が何も知らなかつたらと仮定してあくまで予想できる範囲の事柄を述べただけだ。

「大体初めて会つたときからふざけた野郎だとは思つてたぜ。まあ？ あいつが犯罪者だつて大義名分もできたから今度は容赦なくぶつ殺すことができるつて——」

乾いた破裂音が病室に響いた。

俺がフェイトに頬を打たれた音だ。フェイトは目に涙を溜めながら俺を睨んでいる。なのはもどこか俺を避難しているような目つきだつた。

「和人のことそんなふうに言わないで……」

理屈ではなく感情論なのか、組織に属するのならそれは甘いと思うんだが。

オリ主つてなのはの味方したりフェイトの味方したりはやての味方したりと大忙しえすねー、反吐が出るぜ。

「チツ、皆して和人和人つてよお……」

俺は居心地が悪くなり病室を出る。

いや、正論を言つてゐるだけなのに嫌われる。これだから踏み台転生者はやつてられる。やることもないし散策でもするか。どうせだから監視用の虫をこの辺に一匹放つておくのもいいかも知れない。

プラプラ歩いてたらクロノに会つた。これからなのはの様子でも見に行くつもりだつたのだろう。

レイハさんとバルさんの強化フラグクルー？

「劉牙か……後で聞こうかと思つてたが今でいいか」

「何が？」

「あの襲撃のことだ」

「こいつもか。

つーか知つてることは話せる範囲でさつき話したし、これ以上話すことなんてないんだが。

「君の目的は何だ？ 一体何を狙つてるんだ？」

「……はあ？」

クロノの質問の意図が分からぬ。

「正直、君の戦いは眞面目にやつてゐるのかふざけているのかよく分からぬ、なのはやフェイトへの勘違い甚だしい対応についてもそうだ。時の庭園での戦いでのこともあり

る。君はもつと聰い人間だと思うんだ」

クロノ・ハラオウン！ 貴様ツ！ 気づいているなツ！

時の庭園でちょっと真面目になりすぎたか。なのはやフェイトはそうでもないだろうがクロノは薄々感づいていたようだ。

クロノが気づいているのならリンディさんも気づいていると想定しておいた方が良さそうだ。

「ふざけてる？ 僕がいつふざけたっていうんだよ。僕はいつだつて真面目だぜ」

「君に強力なりミツターがかかつているのも分かつてる」

「はあ!? 何でそれを知——あ、やベツ」

慌てて口を塞ぐがもう遅かった。クロノはニヤリと口を歪ませている。カマかけられた。よくよく考えれば直接調べさせててもいらないのにリミツターの有無や強弱なんて分かる筈もない。

ぬかつたぜ。

「やつぱりそうか」

「ケツ、だつたら何だつていうんだよ」

「急に態度悪くなつたな」

「嵌められれば誰だつて気分悪くなるだろ」

こいつも社会の荒波に揉まれてるんだなーと今更ながらに思う。チート貰つただけの一般人とは違うんだね。

「安心しろ……と言つても信じないかもしけんけど時空管理局に敵対するつもりもお前らに敵対するつもりもない。ついでに言えば管理局に入るつもりはない」

敵対したつていいことないしね。

「……そうか、いい魔導師になると思つたんだが」「諦め早いな、もつとしつこいかと思つたんだが」

時空管理局はもつと強引に話を進めるイメージがあつたからクロノがあつさり引き下がつたのに少し驚いた。

「やる気のないやつをスカウトしても仕方がない。幾ら人材不足だからって誰でも入れるわけじやないんだ」

「そりや違ひねえ」

イヒヒツと悪そうに笑い出す俺。

「そいやプレシアさんどうなつた?」

この場にいないつてことはやつぱ無罪にはならなかつたんだろうか。

「プレシアはまだ裁判の途中だ。フェイトは比較的早く終わつたんだが、彼女はやらかしたことがことだからな。だが、彼女の持つていたデータの裏づけがとれた。上手くい

けば執行猶予がつくかもしない」

「ふーん」

「それと、彼女は娘の遺体を埋葬する決意を固めたようだ」

「……そうちか」

プレシアさんにとってはそれが一番のかもしれない。普通死んだ人は生き返らない、失つたものに囚われるのではなく手に残つたものを大切にすることでの悲しみを乗り越える。

転生者である俺がそんなこと言う資格なんてないだろうけど。

横目でクロノをチラッと見た後に頭をポリポリ搔いていたあることを思いついた。
クロノを味方につけられないだろうか。できればリンディさんも。協力者がいればもつと動きやすくポイントも溜まり易くなるかもしれないし、誤魔化しも効く。嫌われることに重点を置いていたせいで今まで気づかなかつた。

「すまんクロノ。そのことはリンディさんも知つてているのか？」

「あ、ああそうだ。というよりリンディ艦長に言われて考え直したのがきつかけだ」「後でお前とリンディさんに話がある。重要な話だ、今後にも関わる」

俺のいつになく真剣な表情にただ事ではないことを悟つたようで、「会わせたい人がいるからまた後でと」約束を取り付けることに成功した。

「皇帝、エンペラー さて、作戦会議だ」



クロノが言っていた会わせたい人、ギル・グレアム提督との会談は滞りなく終わった。特別な話、というか俺は簡単な受け答えくらいしかしていない。別に嫌いな人ではないがボロが出て後の行動に支障を出したくなかった。

はやてを犠牲に闇の書を封印するという計画のせいで嫌われがちなおじさんではあるものの、やつてること事態は『10を救うのが無理だから1を犠牲にして9を救う』という理に適つたやり方だ。

騎士王時代のセイバーもエミヤも他の為政者達も同じことをしてゐる。

仮に許せないことがあるとすれば闇の書を地球で発動させたことくらいだと思う。

「それで？ 話つて何かしら？」

この場にいるのは俺、リンディさん、クロノのみ。他是飯でも食ひに行つてるんだろう。

「その前に、この話は二人の胸に留めておいて欲しいんです。記録や他人に話すという

のは止めていただきたい」

「聞かれると困る話なのか？」

俺はクロノの質問にコクリと頷いた。ちなみに監視カメラこそないにしろ記録はされている様だったので宝具を使つてジャミングをかけている。サーチャ一にはハラオウン親子が愉快に談笑している映像しか映らない。

「まず言いたいのは俺が呪われているっていうことです」

いきなりグレーゾーンに突入しそうな話の入り方をする。しかしこれがアウトではないという確信があつた。

どこまでならOKでどの線を越えたらOUTなのかを皇帝エンペラーに審判して貰つている。

この原理はちょっと違うがダービー弟のアトウム神がそれに近い。

例えば、『神代劉牙は踏み台転生者である』と言えば、判定は
OUT! OUT! OUT! OUT!

となり。

『神代劉牙はなのは達に嫌われなければならぬ』と言えば、判定は

OK! OK! OK! OK!

となる。

「……いきなりそんなこと言われても正直信じられないわね」

「まあ、普通はそう思うでしようね。そして俺は特定の人達に嫌われなければその呪いを解くことができません」

「辻褄が合わないこともないが……」

やはり疑わしいのだろう。

普通は「俺は呪われているのだッ！」とか言つても「厨二乙」と返されるのがオチだし。

「証拠とかはあるのかしら？」

「証拠……証拠……うん」

目に見える証拠なんてない。未来の知識ならあるけど、少し試してみるか。

「仮面の男」

「『仮面の男』って何かしら？」

「言葉の通りです。もし次になのは達が闇の書の騎士達と戦う時にそいつが現れたら俺の話を聞いてください」

仮面の男とはグレアム提督の使い魔、リーゼロッテ、リーゼアリアのことだ。

そんなこと二人は知る筈もないだろう。裏で糸を引いている人間がついさつき会つた男だとは予想できる訳がない。

「一つ聞きたい。君は何を知っている？」

「信じられないんじゃなかつたの？」

クロノは俺の言葉に何か確信めいたものがあることを感じ取つたようだ。まさか自分の師匠が事件解決の邪魔をしてくるなんて夢にも思わないだろうね。

この場での話はこれ以上先に進まずに終了。

俺はまた守護騎士が行動を起こしたら教えてくれと言つて帰つた。



本日、フェイトが転校してきました。

まーだからどうつて訳でもないけど。俺が近づいて気安く声をかけようものならアリサに噛み付かんばかりの顔で睨まれるわ、フェイトには冷たい目で見られるわで完全に嫌われてるわな。もうこいつらはどうでもいいや好きに生きてろ。

あとギアツチョのやつが、

「恋人ができたことをよオ……『春が来た』とか言うだろオ……恋をするのが冬が終わつて春が来るくらい嬉しいつて比喩表現だ。でも何で失恋しても誰も『冬が来た』なんて言わねえんだよオーッ。何で『夏が来た』とも『秋が来た』とも言わねえんだよオーッ」

と言つていた。知らんがな。

その後あいつも質問の列に並んでいた。

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんに転校してきた金髪のことなんだけさ」

原作組み一行は携帯でも買うんだろうが俺はもう知らん。ついて行つてもまかれるだけだし智葉と一緒に帰る。

「あの人。夢の中で逢つた、ような……」

「やめい」

と彼女のデコを人差し指で軽く弾く。

そういうやこいつはよく覚えてないだろうがフェイトと一度顔合わせしてたな。フェイトも見たのは黒化バージョンの智葉だし覚えてないといいんだけど。

「痛いな～もう」

「アイス奢るから許せ」

「バーゲンダッショウ」

「……スペーカップで」

「バーゲンダッショウ一択」

「そ、そうだ、もう冬だし肉まんの方が「バーゲンダッショウ」……わかつたよ」
美味いんだけど高いんだよな～あれ。手痛い出費だ。

まあいいか。

コンビニでスパークル1個とバーゲンダッシュ1個、俺はクッキー＆バニラで智葉がストロベリーだ。

「甘くておいひく」

アイスの甘さに顔を緩ませる智葉。

そら普通のアイスの2倍以上の価格なんだから美味いだろうさ。

俺もクッキー＆バニラを口に含む。アイスに入っているからチョコクリーク＆キーが柔らかくしつとりとしている。そしてバニラとの相性も最高で言うことなし。

「クッキー＆バニラ美味しそう。もーらい」

「あ、こら」

「あははは」

ボーッとしてたら横からアイスを一口搔つ攫われた。

「私のもあげるから、ホラ」

と言つてスプーンですくつて俺の口に近づける。

俺はちよつと躊躇つたが、思い切つてそれを食べた。

甘い、ストロベリー＆アイスつてあんまり食べないけど果肉も入つて結構美味しいな。

「春にさ、新作の桜味が出るんだって」

「ふくん」

「だからさ、出たらまた奢つて欲しいなって」

要は、「また来年も一緒にアイス食べたい」つて言いたいのか。
状況が状況だし、正直確約はできないな。
でも心配はかけたくないなあ。

「わかつたよ」

そうとしか言えなかつた。

——はあ、まだ消えたくねえなあ……。

帰つた後、しばらく暇になるんで最近波紋修行にかまけて剣を振つてなかつたのを思
い出し素振りを始めようとする。しかし相変わらずどの剣を振つていいかで迷う。
剣が一本なら迷わないんだが。

「いつそのこと一本に纏めるか」

モンハンでも元の武器に素材を足して強力な武器に生まれ変わらせていた。なら宝
具に宝具を足して強化してみよう。数え切れないほどあるし数百本なくなつたところ
で被害軽微。

メロダック
基盤になるのは原罪でいいか。お気に入りだし、あらゆる選定の剣の原典だし魔剣や
聖剣との相性も良さそう。

炎はレーヴァテインを使つて、叩くのはミヨルニルでいいや。
「ここで問題発生。」

「手が足りない」

足りないなら増やせばいいじゃないと傀儡兵を出現させて手伝わせる。

レーヴァテインに油を塗つて波紋を流し炎の出力を上げる。その炎で宝具の刀身部
分を熱して溶かしミヨルニルで叩いて原罪に接合させる。
メロダック

叩くのは傀儡兵にやらせればいいや。

後、折木に折られた宝具数本も加えてみる。

俺の都合で折れてしまつたとはいえこのままにしておくのは少々可哀想だ。こいつ
らからも折木への怨念らしきものが感じられるし。

これとこれと、あとこの宝具も入れちまおう。どうせ創るんなら自重せずに高ランク
の宝具のオンパレードと行こうじゃないか。

最後に込めるのは俺の波紋と血液、俺をどん底に落としたやつらへの恨み辛み、そし
て未来への希望。

自分で言うのもなんだがすさまじい剣ができる。それに新しく創った宝具なら肩
神の影響を受けないという可能性があるかもしれないし名のある宝具数百本分を凝縮
すれば神殺しくらいできそうな気がする。

一日じや無理だな。この辺に結界張つておこう。こういうときにネギまのダイオラマ魔法球みたいなのが欲しくなる。

第14話

クロノから守護騎士たちを結界に閉じ込めたとの連絡を受けて俺は夜中に駆けつける。合成宝具はまだ完成していない、進行度は精々50%どころだ。仮に完成してたとしても使えないけど。

ミヨルニルだけでは無理が出てきたので何かないかと探したら鍛冶道具一式があった。誰のかは知らないが、きっと名のある鍛冶師が後に使う鍛冶道具なのだろう。それも使つてより作業のスピードもアップした。

なのは達はカーリツジシステムを搭載したレイジングハート・エクセリオンとバルディツシユ・アサルトを携えてシグナム、ヴィータに一騎打ちを申し込む。そしてアルフも前回のリベンジにとザフィーラと戦っている。

そして俺は

「ハロー、美人のお姉さんとクソ野郎」

シャマルとその護衛をしている折木^{スケサク}と対峙している。

「もうここが!？」

「くつ、ここは俺が引きつける。シャマルは「おーっと行かせないよお姉さん、一緒にダ

ンスでも踊らない?』

『ごめんなさいね、今お仕事中なの』

「やつぱりアンタもそいつに何かされてるね、やつぱ邪魔だよテメエは!」
俺のニッコリとした表情のお誘いにシャマルは苦笑いしながらどこぞのOLのよう
な返しで断ってきた。

「やつぱりアンタもそいつに何かされてるね、やつぱ邪魔だよテメエは!」
俺はまたもや折木と戦う。まあ負けるんだけどね。

その間にクロノがシャマルの背後を取つたが、謎の仮面の男に蹴り飛ばされる。そし

てシャマルは仮面の男に闇の書を使つて結界を破壊して逃げ出すように示唆。上空が
黒い雲に覆われるとそこから紫色の雷が振り、結界は破壊され、守護騎士たちに逃げら
れてしまうのであつた。

舞台は移つてハラオウン邸。

今回のことでの俺の話を聞いてくれるようになつたようだ。

「まさか、本当に『仮面の男』が出てくるなんて……』

リンディさんも俺の予言が当たつたことに驚きを隠せない様子。ただ、守護騎士に協

力者がいるのならまだしもそれを具体的な姿で言い当てたのだから尚更だ。
「やつぱり、『仮面の男』の正体も知つてゐるのか」

クロノの質問に対しても俺は首を縦に振る。

「なら教えて貰えないかしら？」

「教えたところで貴女方は信じられないだろうし、仮に信じたとしても証拠がないんで捕まえることなんてできません。それに、知つていると返つて不自然な行動をされる恐れがあるのでそれは遠慮したいですね」

二人もなるほどと少し不満げではあつたが納得はしてくれた様子。仮に今、グレアムのおっさんを問い合わせたとしても知らぬ存ぜぬでかわされてしまうのが闇の山だ。

「しかし、闇の書を起動させる権限を持つているのは主だけだ。完成を妨害させるならまだ分かるが完成を手伝うなんて正気の沙汰とは思えない。完成させたら暴走して世界を滅ぼすだけだというのに」

クロノの言う通り、記憶をリセット、正確にはリセットとは違うが、されている守護騎士ならともかく、闇の書がどういうものか知つている者であれば危険性は重々承知の筈。

「クロノ、逆に考えるんだ、『完成させちゃつてもいいさ』と考えるんだ」

「こんな時に君は何をふざけ……いや、ちょっと待てよ」

ジョースター卿の教えが功を奏したのか、クロノとリンディさんは何かに気がついたようで考え始める。『完成させてはいけない』という固定概念に捕らわれているから目的には気づきにくいんだよな。

「……『完成させた後、強力な氷結魔法か封印魔法で闇の書を主ごと封印する』、そんなところかしらね」

「艦長もやはりそう思いますか。それで……」

「E X a c t l y、グレートですよ二人とも」

付け加える点があるとすれば封印するためのデバイスを開発しているつて位か。流石にそんなことまでは分からぬだろう。

「（何で英語？）しかし、それが事実だとしたら闇の書の遺族全員が『仮面の男』の正体の候補にあがつてしまふわね」

「それに、封印するにしてもそんなことができる魔法なんてそれこそオーバーSランクの魔法でもない限り不可能だ。それが真実だと仮定すると向こうはそれ程の魔法が使えるやり手つてことになる」

二人とも長考に入つてしまつた。

「すいませんが、俺が話したいのはそういうことじやないんですけど？」

二人は俺の言葉にハツとなりこちらを向いた。

「え、ああそうね。それで、あなたが予言染みたことができることはさつきの件でよく分かつたわ。それで、あなたはどうしたいのかしら？ 少なくとも協力はしてくれるとは思うけど」

「そうですね、基本は俺がすることに対して見て見ぬ振りをしてくれればいいだけです。

少なくとも折木は俺が引け付けるんで他の守護騎士を警戒さえしていればOKかと」

「俺を除いたイレギュラーはあいつだけだし、俺とあいつが争つていれば他は特に問題なく進む筈。勝つことはできなくともあいつが他を援護できなくなることはできる。

「……そういうえば何やかんやで君は折木和人と毎回戦つてたな。それに彼はフエイトと対立していた時や今回も守護騎士をサポートをしているところを見たことがない、最初見たときはただ無鉄砲に暴れてるだけかとも思っていたが」

「後は俺が印象悪くなるように情報操作してくれればなお良いですね」

俺が魔力ランクが高いだけの木偶の棒だと思えば管理局もわざわざ俺を入局させる気にはならないだろうし、周りの俺への評価が下がれば、それだけポイントにも繋がる。

「君は……それでいいのか？」

「？」

クロノの言葉に疑問符を浮かべる。

「確か呪いとか言つていたな。そんな境遇にされて君は何故そんな風に自然に振舞つていられるんだ？」

「……もう、慣れたから、かな」

クロノ、というより俺の今の現状を知つたら多分10人が10人似たような質問をする

ると思う。俺は「もう慣れたから」としか答えられない。

「全てを失うのと、少なくとも大切なものが残るので、どちらかを選べと言わなければ俺は後者を選ぶ。俺はそういう人間です。なのはだつて利用します。フェイトだつて利用します。ユーノも、闇の書の主も、胸糞悪いんですけど折木も、勿論管理局も利用します。解決さえすれば事態をいい方向に持つていこうとは考えていません。呪いさえ解ければ俺は未来を知つてもその通りに出来事が起ころうに全力で取り組むだけです」クロノは俺の言葉にあつけに取られていたが、リンディさんは俺を真っ直ぐ見つめている。俺の真意でも読み取ろうとしているのか。

「仮にあなたの言葉に従つたとして、私達に得るものは?」

「闇の書事件の解決による功績は勿論。闇の書の主と守護騎士たち、古代ベルカの歴戦の勇者とそれを束ねる古代ベルカの使い手、それで不服であれば——」

俺は王の財宝^{ゲート・オブ・パピロン}からきめ細かい布で包まれた武具10本を取り出してテーブルの上に置く。全てCランク程度の代物だが干将・莫耶のランクがCであることを考えると結構なものだと思う。

「俺のレアスキルで取り出した武器10本、できる限り使いやすいものを選びました。これを差し上げましよう。管理局に献上するも良し、あなた達のものにするも良し、お好きにどうぞ。足りないのであれば追加いたしますが?」

「賄賂のつもりかしら?」

「いえいえプレゼントですよ」

「あなた、本当に9歳?」

「ええ、何なら保険証でも見せましようか?」

一瞬静まり返った後、俺はケラケラ笑い、リンディさんもクスリと笑う。

「私達は特別なことはしなくても大丈夫、変に犯人探しはせず今まで通り守護騎士の動向を探つていれば良い。これでいいのかしら?」

「はい、充分です。クロノは?」

クロノは何やら複雑そうな顔をしていた。

「何だか、誰かが書いたシナリオ通りに動く役者みたいで正直あまり気は進まないが、少なくとも事件が解決できるのなら協力はさせてもらう。その代わり、君にとつても予想外の事態が起きたらその時は——」

「ああ、そうなつたらクロノ達が思つたように動いてくれて構わない。もしそうなりそうなら俺から連絡させてもらうし」

イレギュラーな事態が起きないようには頑張っているとはいえ智葉の件もあるし、警戒しておくに越したことはないからな。

「それと、これは返却させてもらうわ」

リンディさんから宝具をつつ返される。売れば一財産どころではない金額になりそうなモンだが。

「差し上げるつもりだつたんですけど、気に入りませんでしたか？」

「そうね、生憎だけど息子より年齢が下の子から賄賂をもらうほど落ちぶれていないのでよ」

彼女なりの矜持だということか、逆に心象を悪くしたか？

こつちが本気だということを誠意で表そうとしたのだが。協力してくれると言つてたし大丈夫かな。



「ふんつ、浅知恵の回る男じやわい」

「ここは神のいる世界、仮に神世界とさせていただこう。」

このテレビで神代劉牙の動向を見ている老人こそ転生者を生み出しては玩具にして遊んでいる神なのだ。この老人は彼がちやくちやくとポイントを稼ぎ、尚且つ無印よりも上手く立ち回っていることを良く思つてはいないのだ。

「9080ptじゃと？ 減らしたポイントをこうも早く取り戻すか。それに何が『神

を殺せる剣』じゃ、イライラさせてくれるわい』

彼はこの短期間で既に30000pt以上稼いでいる。A, S編の期間が無印編と比べて短いということや、既に原作キャラ達の印象がかなり悪く、一撃手一頭がポイントに繋がっているのだ。

「まあ？ ワシにかかれば関係ないんじやがの。こやつは今までよりもつた方じやが、A, S編が終われば用無しじやな。スカリエツティ側に面白いやつを送りこんだしおの？」

先程までの不機嫌な顔とは対照的にクククと下卑た笑いを堪えながらもう一つの画面を見ていた。

映つているのは白衣の男が円柱型のガラスケースに入つている我が子を見て高笑いを上げている画像。

「いや、楽しくなつてきたわい、あやつの顔が絶望に変わるのが待ちきれん」「ほう、一体何が待ちきれんのかな？」

「それは……」

神は振り返つてまるで石化したかのように固まつた。そこにいたのは神よりも威厳のある格好をした老人。それを視認すると神はマツサージ器の如くガクガクと震えだした。

「さ、ささささ、最高神様ア!?」

なんとこの威厳ある老人は神よりも位の高い最高神だつたのだ。

「な、何故ここに!?」

「最近輪廻転生の輪に劣化した魂をよく見るなと思えば貴様の仕業だつたか！　この愚か者がア!!」

「ヒイイイイイ!!」

その怒声、まるで雷が落ちたかの如く。神は先程までの余裕は何処へやら、雷に怯える子どもの如き醜態を晒している。

「全く、貴様の部下の鷹丸から報告が無ければもつと気づくのに遅れていたかもしけん」
 「（くつ、あやつかッ！　目をかけてやつた恩を忘れおつて）し、しかしですね最高神様、人間なぞ蟻のように増える種族、その中から数十人ダメになろうと代わりは幾らでも……」

この神は本当に人間を玩具や実験動物程度にしか考えていないようだ。

「確かに、数十億人いる中でのたかが數十人」

「で、ではつ!?」

「そう、代わりがいるのは何も人間だけではないぞ？　貴様の代わりも幾らでもいるのだからな」

神の希望を取り戻した顔は一瞬の内に絶望へと変わる。

段々と神の視線が低くなつてきていることに神自身が気がついた。原因は、下が沼のようにぬかるんでいること、しかもただの沼では無さそうだ。

「二、これは底なし沼!」

「無限地獄への入り口じや。貴様は少々やりすぎた。弄ばれる立場を経験してくるがいい！」

神はみつともなく足搔くも底なし沼は神の身体を少しづつ、少しづつ飲み込んでいく。

「もう一度！　もう一度チャンスを下され！　もう一度オオオオオオ！」

神は底なし沼に完全に飲み込まれて、もう見る影も無い。

「全ては貴様の思惑通りということか、鷹丸よ？」

「思惑つて、人聞き悪いな、あの爺さんの不正を報告しただけじゃないですか」

「いつの間にかいだ見た目20代前半くらいの青年、はニコニコ笑いながら帽子を取つて礼をする。

「貴様にはあやつがいた。ポストを任せよう、担当していた転生者達も一緒にな」

「嬉しいな、神に就任していきなり大仕事を任されるなんてつ」

全てがわざとらしい。笑つてゐるが本心がつかめない男だ。

「貴様もあやつと同じことをすれば……分かるな？」

まるで脅しているかのようなドスの利いた声は流石にニコニコしているこの男の顔を引き攣らせるのに充分だつた。

「……分かつてますつて、『転生者の不正な作成』、『転生者の不正な間引き』、『人間界への過剰な干渉』あの爺さんが行つてたことですよね、……つていないし」

いつの間にやら最高神と呼ばれた老人はこの空間から消えていた。

鷹丸はつけっぱなしのテレビ3つを順に眺める。

一つ目は神代劉牙のもの。

二つ目は折木和人が八神はやってや守護騎士達と談笑をしているもの。

三つ目は神が新たに創つた転生者（女）のもの。

「劉牙君、という訳でボクは君の呪いを今すぐ解くことはできないんだよね、まあ後1000pt程度だし頑張つてね。聞こえるわけ無いけど」

担当が替わったのは彼らにとつて吉と出るか凶と出るか、それはこの男にしか分からぬ。

第15話

現在シグナムさんが謎のムカデ型生物の触手に縛られ中で何か工口い。化け物と女騎士とかどこぞのR18ゲームを思い出してしまった。このままではシグナムさんが産む機械になつてしまつ。写真とか撮つちやおうかな。いや動画の方がいいかな。目の前を覆い尽くすまでの黄色い雷は剣となつてムカデのような化け物に刺さつてそいつは息絶える。残念、録画し損ねた。ニヤニヤ動画にでもUPしてやろうかと思つたのに。主に嫌がらせ目的で。

『フェイトちゃん！ 助けてどうするの!? 捕まえるんだよ！』

「あ……めんなさい」

「無事かシグナム！ つてフェイトまで!?」

「和人……」

シグナムの救援のつもりできたのであろう和人もいる。念のためスタンバつておいて良かつたぜ。

「チツ、てめえまでいやがつたか。今度こそブチ殺す！」

「今度も勝たせて貰うぞ。シグナムこいつは任せてくれ」

「ああ、テスター・ロッサとは私が戦う。彼女とはまだ決着がついていないからな」

こいつはホント何処にでも現れてフラグ建てようとするな。狙つてんのか？

狙つてないんだとしたら第一級フラグ建築詐欺師の称号を差し上げましょ。とつと捕まつて牢屋の中で臭い飯でも食つてろ。そして食中毒にかかつてくたばれ。

フェイントとシグナムが武器を交差し始めた。向こうの戦いは既に始まつている。しばらくしたらフェイントが蒐集されるんだつたな。まあそうとは限らんが。

「今からてめえをブツ殺すぜ。小便は済ませたか？ クソッタレな神様にお祈りは？ 世界の隅っこでガタガタ震えて命乞いする心の準備はオーケー？」

「……それはごめん被りたいな」

「スカしてんじやねえよクソカスがアーッツ！」

ゲート・オブ・バビロン
王の財宝から干将・莫耶を取り出して折木へと襲い掛かる。折木はそれを一本の剣で受け止めた。

「いつもの俺とは一味違うぜ。なんせてめえをブチ殺すために修行してきたんだからな」

「相手にペラペラ話せる努力なんてたかが知れるぞ」

「口の減らねえ野郎だ！」

力任せに折木の剣を押しにかかる。だが一筋縄ではいかずにパワーは拮抗する。

俺は剣で砂を巻き上げて目晦ましをし、相手の出方を伺おうとする。

「くつ、蒼破刃！」

青い風の衝撃波が砂を吹き飛ばし、それだけでなく俺へ攻撃までする。「うわあっ!?」

「まだだ！ 紅蓮剣！」

剣を振るうと今度は火炎の球が飛んで来た。俺はそれをギリギリで回避する。折木は休む暇を与えてくれないようで俺に向かつて剣を構え、突進してきた。

「秋沙雨!!」

素早い連続の突きを繰り出してくる。俺は全てを裁ききれず剣を弾かれてしまった。チラッと向こう側を向いたらフェイト達も大技を繰り出さんと武器を構えていた。

俺は一端距離をとらんと後ろへ跳んだ。

——ズブリツ

「!？」

俺の胸から見知らぬ腕が生えている。

「ア、……デメ、エは……」

呼吸が苦しい。苦しみに耐えながら後ろを向けば、そこにいたのは仮面の男。「さあ、奪え。持つているのだろう、闇の書を」

仮面の男の中にあるのは俺のリンカーコア。

フェイントとシグナムも突然の事態に腕を止めている。

「くつ……」

仮面の男にいいように利用されていることについて腹が立っているのか、それとも自分の戦いを邪魔されたことに憤りを感じているのか。

折木は闇の書を取り出して俺のリンカーコアから魔力を蒐集する。俺の魔力が高いこともあり、ページがみるみる溜まっていった。

気絶してしまいそうな位痛いが、俺が今までどれだけ辛い目に合ってきたかと思つていい。これ位で気絶なんてしないさ。仮面の男の腕を掴み、骨を折ろうとフルパワーで握り締めてやつた。

「捕まえ、たぜ……ダボがッ!!」

「くつ、放せ！」

仮面の男は腕を引き抜こうと躍起になつて力を入れ出した。

「仕方ない！　これならどうだ!?」

あろうことか、まだ蒐集している最中のリンカーコアを——碎いた。

「ツ、アアアアアアアア、ア、ア、ア、!!」

リンカーコアは魔導師にとつて臓器のようなもの。臓器を握り潰された様な痛みが

俺の腕の力を奪い、仮面の男は乱暴に腕を引き抜いて俺を蹴り飛ばす。

「くつ、余計な負傷をした」

そう言い残し消えていった。少なくとも骨にヒビ位は入ったか。

「ゴハツ」

溢れた血が口から吐き出される。口中が鉄の匂いと味で充満して気分が悪い。俺は最後の力を振り絞って丸薬型の回復薬を口の中に放り込んで飲む。すぐに治るわけではないが、少なくとも出血多量で死ぬことは無い。一緒に血も飲んじやつた。あんまり良くは無いが致し方なし。

そんな俺を哀れな目で見つめる折木。
てめえだよ、てめえのせいだよ。

「すまない……」

「謝るな……よ、独善者」

人のための善と書いて偽善。だからこいつのは偽善ですらない。てめえなんぞ独善者で充分だ。そういう意味と怨念を込めてそう言つてやつた。

※偽善の本来の意味は人のための善という意味ではありません。

それに謝つて済むようなことじやないからな?
あ、そろそろ限界だ。

俺の視界は真っ暗になつた。



「気分はどうだ？」

「最低に口ウつてやつだよクロノ」

アースラ医務室に俺は運ばれた。寝ていたのは精々3時間程度らしい。なのは達も様子を見に来たらしいが俺は寝てたから知らん。つーか今も気分悪いし頭痛い。

「身体には異常は無い。だが……」

「リンカーコアにでも異常があつたか？」

「分かつてたのか？」

「自分のことだそれくらい分かる」

クロノは少し言い辛そうだったが、意を決したように言い放つた。

「君のリンカーコアへのダメージが酷すぎる。回復してももう「魔法は使えないってか？」……ああ、正確に言えば以前のように自由には、だが

それはイザナミつてやつだよクロノ君。

まあ、仮面の男がAAAのフェイトよりもSオーバー（リミッター付き）の俺を狙つ

てくるつて予想位はしていた。あんなあからさまにやつてくるとは思わなかつたが、これで俺のフェードアウトフラグは立つた。

俺の魔法なんて索敵魔法とか強化魔法とかが精々だし、王の財宝はロツクが掛かっているからコピーとかは不可能。おまけに波紋や黄金長方形の回転は魔法じやないし、蒐集されても大してあの合成魔獸の強化には繋がらないだろう。王の財宝が自由に使えなくなつたのは痛いが、合成宝具生成の際に数百本出した宝具以外に絶世の名剣は何となく組み込まずにそのままにしてあるし、さつき飲んだ丸薬のように外に出しているモノも多い。

それとダメになつたリンカーコアだが別に回復薬のような宝具を使えば再生できるし、このままで念話くらいならなんとかできる。

「……すまない」

「同情するなら金をくれ」

「……傷病手当が出ないか上に掛け合つてみるよ」

「マジで？」冗談で言つてみたけど、言つてみるもんだな」

その後なのは達も見舞いに來たが、普通に当たり障りのない話をして帰つて行つた。今までの罰が当たつたとか内心で思つてたらなんとも思つて無くとも流石に傷つくぞ。しかしリンディさんとエイミイさんは本氣で責任を感じているようだつた。俺もちよ

い罪悪感を感じている。

そして誰もいなくなつた。暇だ。この薬品の匂いがする部屋つてどうも落ち着かない。

〈俺がいるじゃないかよ〉

「そういやそうだつた」

〈朗報だぜ〉

「ん？」

〈今回ので100000pt突破だ〉

「マ！」

おつとこは病室だしうるさくしたらダメだ。念話でいこう。

〈マジか、もうここに用はないな〉

目標達成しても正直素直に喜べない。あの屑神が約束通り俺を解放してくれるとは限らないな。だが少なくとも俺のポイント集めは終わりだ。病室じやなくて家のベッドで寝たい。

俺はリンディ艦長とクロノに精神的にダメージを負っているふりを装つて『もう家で休ませて欲しい』と頼んだら、『身体の怪我が良くなつたら』と言われてしまつた。

とりあえずあの猫姉妹にどうやって落とし前つけてやろうか。利用したとはいえあ

「は痛かつたぞ。マジで死ぬかと思つたぞ。暇なうちにできる限り証拠がなく痛めつける方法とか考えておこう、とか思つてたらご本人様登場。『災難だつたね』とか言われた。マジでブチ殺してやろうかと思いました。◆

「人類よ、私は帰ってきた」

「お帰りなさい」

「ツツコミ位してよ」

『チャングムの地雷』が終わつたらね

相変わらず韓国ドラマの好きなお母上様でした。

ちなみに『チャングムの地雷』とは爆弾処理の仕事を失敗して死んだ父の後を継いで立派な爆弾処理士になろうと奮闘する少女の人生を描いた物語（フィクション）である。

「智葉は？」

「友達と遊びに出かけたわよ」

そつか、あいつは今いないのか。

仕方ない、合成宝具の出来具合を見に行こう。

俺は自分しか通れない結界を通つて鍛冶場へと歩いていく。

そこら辺に散らばつていた宝具がもうほとんどなくなつてゐる。その代わりに役目を終えて機能停止して傀儡兵が横たわつてゐた。ご苦労様と俺は王の財宝の中に回収する。回収だけなら問題ないな、放出が難しくなつたのか。

一番奥のほうで二体の傀儡兵が一本の剣を打つてゐる。一体はヤールングレイプルという手袋を手に嵌めてミヨルニルで剣を叩く、もう一人は剣を抑えていた。最後くらい俺がやろうと波紋エネルギーを全開にして剣に流し込む。

ふむ、何か足りないな。やつぱり鞘かな。約束された勝利の剣にも全て遠き理想郷があるし。

よし、造ろう。幸い型はあるから宝具を溶かして固めよう。

全て遠き理想郷^{ヴァロード}みたく金ぴかでゴージャスなのがいいか。柄の色は金だしそれに合うように金色にしてしまおう。溶かすのはオハンでいいな、防御系の宝具だしいい線いつてるかもしだれん。後、ゲイジヤルグの原典のような魔法を無効化できる宝具も混ぜて鞘自体の防御力を上げてみるのも面白いかもしだれん。

それからまた数日過ぎた。

「完成した———ッ!!」

俺が天に向かつて掲げる剣。原罪^{メロダック}の倍はある大きさだがやたらと手に馴染むのは俺

の血が混ざっているからか。刀身はセイバー・オルタの約束された勝利の剣の如く黒く染まっている。これ魔剣だろと思つたが、波紋を流すと半分だけ黄金の輝きを取り戻すかなり異質な剣だ。それに波紋を流し続けたお陰で波紋も流しやすい。

「幸運と勇気の剣で斬る……なんつ」

何氣なく振つたら結界内とはいえ色々吹き飛んで更地になつた。

「……結界張つといて良かつた。威力の調整とか難しそう」

あの神に対しても一切の躊躇無く振ることができそうだ。

さて、こいつの名前は何にしよう。やつぱり神を殺す目的で創つたのだから、それっぽいのがいいな。

ゴッド・スレイヤー
神殺しの剣……じやちよつと安直過ぎだな。だから神喰らいの魔剣なんてどうだろ

う。あの傲慢な神をブチ殺すのにふさわしい名前じやないか。A, S 編終了まで残りの一週間弱。半分は家族に、もう半分はこいつを使いこなすために使おう。ついでに黄金長方形探しもやってみるか。

そうと決まればまず普通に扱えるようになるよう特訓だ。

一度振つては山が吹きとび、二度振つては曇り空が吹き飛んで太陽が顔を覗かせる。なんと無駄に破壊力の高い剣だろうか。少なくとも対城宝具並みの破壊力はあるとみた。

俺は剣を振る。折木への憎しみを込めて振る。神への殺意を込めて振る。家族を失わないために振る。俺の未来のために振る。1000回程振つたところでコツがつかめてきた。この魔剣は俺の意思だ。俺が斬りたいと思ったものを斬り、消し飛ばしたいと思つたものを消し飛ばす。俺の意思に反応する剣なんだ。だから明確にどうしたいか定まつていなければ暴発してさつきのように山が吹き飛ぶという出来事が起ころ。

後、自然界の黄金長方形についてなんとなくだが分かつてきた。神に感謝はしないが、自然に感謝をする、心の奥底から、深層心理の奥まで。それをやつていたら少し見えた気がする。成功率は約1%がいいところだけれど大きな進歩だ。鉄球と違つてシャボンであれば数は稼げるし成功率1%ならシャボンを100発放てば一発は成功すると前向きに考えよう。実際やつてみたらやたら強力なシャボンカツターカツタ^{タスク}を時々見かける。あの抉るような破壊力、こいつはもう刃ではない、牙だ。これからは牙と呼ぶツ。

後、鬼灯丸を通して知つたことだがはやてが闇の書の影響で麻痺を進行させいで入院してた。いよいよ物語りも大詰めらしい。正直言つて原作通り終わるか不安だし念のため最後まで付き合つてやるか。最後にでつかい的も出てくることだし、猫姉妹をシバくチャンスだし。

第16話

闇の書が暴走する当日、俺は智葉に自分が魔法使いであることをばらした。俺が踏み台やつて俺以外で最も被害を受けたのは彼女。だからその原因の一端位知る権利はあるだろうと思っていたが、凶までなかなか決心はつかなかつた。しかし思い切つて話した。その証拠にと本日の夜に空の散歩に連れてつてやると約束をして。

「わあ！ すごいすごーい！」

「ふふつ、そうか……」

ヴィイマーナに乗つて夜の空を飛んでいる。智葉が乗つている関係で速度を落としての飛行だ。リンカーコアがダメになつたせいで王の財宝ゲート・オブ・バビロンから出せるのは一日に精々5つか6つ程度にまで弱体化していた。だがこれくらいならなんとかなりそうだ、少し疲れるけど。

「お兄ちゃん、人がゴミのようだよ！」

「せめて蟻と言いなさい」

ちなみに巻き込まれたくないんで病院からは離れている。こちらは双眼鏡で視認できるし、瑠璃丸を飛ばしているから声も聞こえる。

この辺でしばらく様子を見るか。ここへ来たのは正しい結末を迎えるかどうかを見届けるという理由もあつた。

向こうの方ではなのは達と守護騎士達がバインドで動きを封じられている。リーゼ姉妹の仕業だろう。仮面の男の片方が闇の書を使って守護騎士達から蒐集を始める。魔力生命体である守護騎士にとつて魔力がなくなるということは自分の姿を保てなくなるということ。抵抗も虚しく全員が魔力を奪われ消えていった。まだ蒐集されていないフェイトや折木を残しておくのは闇の書が覚醒した時にその足止めをするために残したのだと推測する。

「何見てんの？」

「今は見ないほうがいい」

人が消滅するシーンなんてショックがでかくて見せられるか。

そして仮面の男はなのはとフェイトに化けてはやてを屋上に転移させる。はやてに守護騎士達が消滅する幻覚を見せて彼女は絶望と怒りで闇の書を起動させてしまった。はやての姿が銀髪で黒い翼のある長身の女性へと変わった。

『また、すべてが終わってしまった。いつたい幾度、こんな悲しみを繰り返せばいい』

「ねえ、何見てんの？」

智葉に双眼鏡を奪われてしまつた。

ゲート・オブ・パビロン

彼女が前を向いている隙に王の財宝から宝具を飛ばす。

「ウスノロと転校生とカスと……知らない女の人は？ 何であんなところにいるの？ と
いうか何である人泣いてるの？」

「カスつて折木のことか？」

「もしくは女タラシでも可」

どうやら智葉も折木のことを好かないようだ。

『主の願い、そのままに――デアボリック・エミツション』

はやての技の中で唯一神話関係ない技キター――ツ。双眼鏡を使わなくても邪悪なエネルギーの固まりが広がっていくのが分かる。

『持つかな、あの二人』

『暴走開始の瞬間まで持つて欲しいな』

——コツチヲミロオオオ

『ん？ 何か言つ――』

仮面の男が二の句を告げ終わる前に邪悪なエネルギーの固まりから離れたところで大爆発が発生。俺がさつき投擲した改造宝具、その名も『偽シニアハートアタック追尾せし爆炎戦車』。その姿は某殺人鬼の使う第二の爆弾にそつくりだが、オリジナルよりも二周りほど大きい上に破壊は可能、そして使い捨てという弱点だらけ。しかし追尾の性能はこちらが上だし破壊

力も申し分ない。

君達は裁かれなくてはならないんだ。俺に手を出したのが間違いだつたんだ。無事では済まさないよ。

「汚い花火だな」

「できそこないね」

氣分がいい。俺は前もつて出しておいた黄金の杯に持つてきたシャンメリーオを注ぐ。
酒ツ！ 未成年だから飲めないッ！

「飲む？」

「飲む飲む！」

シャンメリーワーは色つきのソーダなのに何故か普通のソーダよりも美味しい気がする。俺の分も注いでちびちび飲み始めた。

「今どうなつてる？」

「銀髪の女の人が三人を圧倒してる」

双眼鏡なしだとピンクやら黄色やら黒やら光がシュンシュン動いているだけでよく分からん。声を聞き取るのにも限界がある。

智葉から双眼鏡を奪つて戦況を見ることにした。

『咎人達に、滅びの光よ』

銀髪の人がピンク色の魔方陣を展開し、周囲に散らばつた魔力を収束させている。なのはの十八番、スターライト・ブレイカード。周囲から魔力をかき集めるから自分の魔力消費が少なく大技を放てるとかマジ鬼畜。

『——スターイト……ブレイカー』

収束された魔力がピンク色の極太レーザービームとなつて町を飲み込む。なのは達はシールドを開いて何とか耐えようとしていた。普通はもつと遠くに逃げることを選択するものだが、アリサとすずかが結界内に取り残されていたせいでそれはできなかつた様子。

俺は喉が渴いてグイっとシャンメリーやを飲み干す。

気がつけばなのは達が触手に絡めとられて動きを封じられている。魔法少女と触手つて聞くとR-18的な展開しか思いつかん。

「チヨイナー！」

「いだつ!?」

智葉が俺の足を踏んできた。何故だ。

「何すんだよ!?」

「……邪念を感じたから」

何故分かつた。しかしガキに欲情などせんがな。

『私は道具だ。悲しみなど……ない』

『そんな言葉を……そんな悲しい顔で言つたつて。誰が信じるもんか！』

『あなたにも心があるんだよ！ 悲しいって言つていいんだよ！』

『はやてはお前にそんなこと望んじやいないんだ！』

『言いたいことがあるなら力で示せ。お前らいつだつてそうしてきたじやないか。説得なんてらしくないぞ。』

『意識のある内に、主の願いを叶えたい』

『このつ、駄々つ子!!』

『待てフェイト！ 辻闇に突つ込むな！』

フェイトが業を煮やすデバイスを構えて銀髪の人へ突つ込む。それを止めようと追いかける折木。そうだとめえも一緒に吸收されてしまえ。そして二度と出てくんないや、やっぱ苦しんだ後に出で來い。俺がボコせなくなるからな。

フェイトの攻撃は防がれて、そのまま折木と一緒に吸收されてしまった。

『フェイトちゃん!! 和人君!!』

俺は目が疲れたので智葉に双眼鏡を渡して玉座に座り、杯にシャンメリーオを注いで飲む。展開変わらないし何か飽きてきた。さつさとメイン始まらないかな。

『智葉、俺軽く寝るわ。戦況が動いたら起こして』

「……飽きたの？」

「膠着状態ほどつまらないものも無い」

「ウスノ口押されてるけどね」

そういうや智葉って銀髪だし目も赤いしでリンフォースにちょっと似てるなとか思いながら浅い眠りについた。



「お兄ちゃん起きて……——チユ」

「!？」

唇に何か柔らかいものが触れた感覚に驚いて飛び起きた。また不意打ちでキスされた。俺はよくよく不意打ちキスの餌食になるらしい。智葉大人バージョンだつたら言うこと無しだったのだが。あ、黒化は無しでお願いします。

「んつん~」

伸びをした後軽く身体を動かして血の巡りを良くする。

「何か新しい人達が出てきたんだけど……」

智葉に双眼鏡を渡された。それを使って向こう側を見ると守護騎士とはやてがいて、

再会を喜んでいる。闇の書から抜け出すことに成功したようだ。その代わりにどす黒い半球体がすぐ近くにある。

俺の今回の第一目標は猫姉妹半殺し、第二目標はあのデカイ的だ。横に立てかけてあつた全て遠き理想郷に似た鞘から神喰らいの魔剣を抜く。

「智葉、危ないからちよつと退つてな」

闇の書の闇。確かにナハトヴァールとかいう名前だつた気がする。詳しくは覚えてないが消し飛ばしても特に問題は無いだろう。全力の試し斬りにはもつてこいじゃないか。

そしてナハトヴァールが半球体から姿を現す。背中には黒い羽が6枚、鎧を着た獣のような前足、昆虫のような横足、機械のような身体、口だけの顔に、頭の上にはリインフォースそつくりの上半身がついている。合成魔獣という表現がぴつたりの化け物だ。出てきた瞬間に剣を振る。一閃、黒い羽が挽がれてナハトヴァールはのた打ち回る。この空間を越えた攻撃はゲイボルグによる因果逆転に似ている。剣戟が飛んだのではない。『剣で斬つた』という結果をつくつてから『剣を振る』という原因をつくつたのだ。それにこいつの能力はそれだけじゃない。

「ソフ……神喰らいの魔剣、お前から再生能力を奪わせてもらつた」

判明しているもう一つの能力、それは『強奪』。色々なものを奪われた俺の意思が剣に

影響して発動してしまった能力。相手の能力を知つてさえいればそれを一時的に奪うことなどが可能なのだ。今回はナハトヴァールの持つ驚異的な再生能力を奪つた。もうやつに逃げ場は無い。

「消し飛べ」

魔剣から放たれた光と闇が入り混じつてできた灰色の光線。それは光の柱となつてナハトヴァールのみを覆い隠し、俺の言葉通り跡形も無く消し去つた。

ナハトヴァール
グレー・グレイヴ
灰色の墓標と名づけよう。

それと同時に俺が奪つた再生能力も消えてしまつた。奪つた相手が消滅したら能力も一緒に消滅してしまうようだ。

「……」

それをあっけにとられた表情で見ていた智葉。石化したかのごとく俺の破壊後を見ている。やり過ぎたか、恐がらせてしまつたかもしねない。

「——い」

「へ？」

「カツコいい！ 悟飯とかダイみたいだつた！」

とんだ肩透かしだつた。俺は思わず苦笑する。

それにしてもヒーローね。俺なんか精々ベジータやクロコダインあたりが打倒だと

思うが。

さて、気づかれないうちにさつさと帰ろう。こちらの用事は済んだし、残骸もろとも消し飛んだナハトヴァールが再生するとは思いづらい。それにはれると色々やつかいなことになりそうだ。

そんなことを考えていたら上から雪が降ってきた。

「あっ、雪。ロマンチック……」

「ホワイトクリスマスだな。ほら、風邪をひかないうちに帰ろう」

「もつと見てようよ」

「帰りながらでも見えるさ。それと、今日のことは二人だけの秘密な」

「うんっ！」

ヴィイマーナをゆっくりと起動させて家路へ向かった。降つて来る雪の冷たさと隣にいる智葉の体温が心地よく、今までの荒んだ心が少しだけ癒されていくような、そんな僅かばかりの幸せを味わつた。

今日は転生して初めて幸せだと思つたクリスマスイブとなつた。



あれからクソカス神からの連絡は無い。リインフォースが消えるまではA, s編だとでも言いたいんだろうか。どうせ折木がリインフォースを直してフラグを建てて終わるだけだろうに。そうなつたらツヴァイの方はどうなるのやら。存在を消されるだけかもしれないが。

そして俺は今、リインフォースが消える高台から少し離れた樹の上で座つてリインフォースを眺めている。どうやらなのはやフエイトよりも早く来ていたらしい。少しでもこの町を目に焼き付けておきたいのか。彼女は今から消滅しようとするにしてはとても穏やかな目をしている。幾ら恩人のためとはいえ何故ああも落ち着いていられるのか。

『私など見てて楽しいか?』

「?」

突然心に直接響いてきた声に驚いて樹から落ちそうになつた。この声は彼女のものだ。彼女は俺が観念していることに気がついている。仕方ないので観念して話すことにした。

『……いつから気づいてた?』

『あんないつと見られていたら嫌でも気がつく』

実に簡単な理由だった。

『……すまなかつた。闇の書を通して君の事も覗いていた。私は取り返しのつかないことを、なんて謝罪の言葉を言つたらいいか分からない』

沈んだ声で俺の心に語りかけてくる。

『俺のリンカーコアを碎きやがつたのは仮面の男で魔力を奪つたのは折木の野郎だぜ？ アンタに全く非がないとは言わないが、そこまで気にしなくてもいいと思うが。それに治つたし』

『!?

別にリインフォースを恨んではいないし。寧ろ俺と同じく運命に翻弄された被害者として同情さえしている位だ。後ナイスおっぱい。

それにナハトヴァールの再生能力を奪つたことで碎かれたリンカーコアが治つた。普段使わないし表向きは碎けたままにしておきたいから封印して分からぬようにはしている。

しかし俺が彼女を許しても彼女自身は自分を許せないらしい。

『なら最後に聞かせて欲しい』

『……私が消えることまで知つてているのか。何故……いや、聞くのはよそう』

そうしてくれると助かるよ。

『何故アンタは自分が消えるのにそこまで冷静にいられるのか教えて欲しい』

リインフォースはしばらく黙ったが、やがて、小さな声で呟き始めた。

『私は主に、八神はやてに救われた。呪われた魔導書として縛られていた私を解放してくれた。その彼女が今、また私のせいで危険に晒されるのかもしないのであれば、消えることに苦はない』

なんと尊い決断だろうか。人、この場合はプログラムであつても人と呼ばせてもらう。人とは本当に大切なモノができるところも強くあることができるのか。

『皆が来た。少しだけだつたが君と話せて良かつた』

『……アリーヴエデルチ』

これを最後の言葉とリインフォースからの念話を途絶える。

〈助けなくていいのか?〉

「何だろうな、なんとなくだが無粋にも思えるんだよ。覚悟をしているやつの覚悟を搖るがしてしまいうような行為にはさ」

そしてそれをいともたやすくと行おうとする折木。はやての車椅子を押してやつてきた。原作でははやてが自力で着てたけどどんな腕力してるんだ?

『リインフォース!　お前は望まないのかよ、皆が笑つて終われるハッピーエンドつて

やつを!』

折木が上条さんのような台詞を吐いた。

『無理だ！ 私の身体はもう！』

『俺がリインフォースを直す、だから消えるな！』

折木が手をかざしている。最後の神の奇跡つてやつを使うつもりだろう。

『俺はリインフォースを直す』

プレシアさんの病を治したときのように高らかに宣言する。

「？」

しかし、あの時のようなエメラルドのような美しい光が発生しない。

『な、直れ！ 直れ直れ直れ！』

再度手をかざすもリインフォースは何も変わらない。

『もういい、私や主に気を使わなくていいんだ』

『違う！ そんなバカな!? 後一回分残つてる筈なのに！』

俺にも分からぬ。何故やつの能力が発動しないのか。

神がやつの特典を使用不能にした？

ありえない、そんなことするくらいなら最初から能力なんて与えていない。そもそも

あいつは自覚がないだけでクソ神の操り人形だ。

だとしたらクソ神に何かあったのか？

考えても仕方ない。あいつの株が下がつたところで好感度がド底辺にいる俺の知る

ところではない。

俺にできることは覚悟をした彼女の最後を見届けることだけ。

『主はやて、守護騎士達、そして小さな勇者達。ありがとう……そしてさようなら』
リインフォースは光になつた——俺が無意識のうちにとつていたのは『敬礼』の姿で
あつた——涙は流さなかつたが、本人同士にしか分からぬ、奇妙な友情があつた——

第17話

リインフォースを見送ったその夜、俺は無印編後にもあつたふわっと浮き上がるような感覚を味わう。神が俺を連れて行くのだろう。

先手必勝だ。第一希望の殺害が無理でもせめて腕の一本くらいは斬りおとす。一太刀入れられれば能力を奪うことができるし、それである程度優位になるかもしれない。俺は白い空間に来たと同時に神喰らいの魔剣を構えて人影に斬りかかる。

「あー初めましてになるかな？ 僕は」

「死ねえ――――ツ！」

何か言う前に斬り捨てる。直に斬る。間接的に斬るとかこのチート魔剣を持つても不確定なことはせず切裂いてやる。

しかし魔剣は神に掴まれてしまつた。だが、能力を奪うことには成功した。これで、

「……いやお前誰!?」

目の前にいたのは老人ではなく前世の俺と同じくらいの若い男。「いきなり斬りかかつて来て第一声がそれって正直どうなのさ？」

俺が力を抜くと男も剣を放して、俺は一步退く。

「あのクソ爺はどこだ？」

辺りを見回したがこの男だけしかいない。

「クソ爺？　ああ、前任者の爺さんだつたらやりすぎてクビ。それだけじゃなく無間地獄に落とされたよ。僕はその後金に就いただけ」

あの爺さんが無間地獄に落とされただと？

「……信じられん」

「信じる信じないは君の勝手かな。あつ、僕、鷹丸。まつ、座りなよ。何も無いけど鷹丸と名乗った男は俺が斬りかかつてきたことにもまるで動じずに床に胡坐をかいた。

俺は剣を構えたままで警戒を解かない。

クソ神に何かあつたのかというのは折木の状態を見てなんとなく分かつていた。こいつの言うことを信用していいか分からぬ。クソ神と結託して俺を騙しているだけかもしね。

「……折木、もう一人の転生者のことだが。あいつの神の奇跡ってやつが使えなくなつたのはお前が何かやつたのか？」

「正確には『何もやつてないから使えなくなつた』というのが正しいかな。そもそも『神

「あの奇跡」っていうのは転生者の願いを神が世界の理を無理やり歪めて叶えるものだし、普通は禁止だよ」

「あの爺は禁止行為を行つてたつてことか?」

「そだよ、ついでに言えば君達以外にも転生者創つて遊んでいたらしくてね。輪廻転生の輪から無理やり魂を持つてきたり、遊びすぎてボロボロになつた魂をゴミを捨てるかのごとく輪にポイ捨てしていたらしくてね。無間地獄からあと2000年くらい出でこないんじゃないかな?」

もしこの鷹丸とかいうやつの言つていることが事実なのであれば、解放されて嬉しいのが半分。もう半分はクソ神を斬ることができないことになりそうだ。

「アンタを信じるに足りる証拠が欲しい」

しかし神を信じるきにはもうなれない。それにクソ神が消えたとしてこの男が俺を玩具にしないとは限らないのだ。

「うーん……別に信用する必要も信頼する必要もないかな。僕はあの爺引き摺り下ろして昇格したかつただけだし。別段君達になにかをするつもりは無いよ。あの爺さんの二の舞にはなりたくないしね」

俺はとりあえず一番気になつていたことを聞いてみる。

「俺の呪いはどうなつた?」

「それなら君が条件を満たしたんだから解けたに決まっているさ。確証が欲しいかい？」
なら朝起きたら家族に会つてみるといい。君のことは覚えているからさ」

「年が明けてからという可能性も捨てきれん」

「疑り深いね、君。あの爺さんはどんだけ性悪だつたんだか」

鷹丸はやれやれといった表情で肩を竦めている。

「じゃあさ、何でも一つだけ君の要望に応えてあげようか。あ、新しい特典とか人を生き返らせてとかはなしだから」

いや、俺にどうしろっていうんだよ。

「俺の呪いを解除しろ」

「だから君の呪いはもうなくなつてるんだつてば！」

信じられるか。

「……本当になんでも叶えることができるんだな？」

「さつき言つたのはなしだけどね」

正直こいつのことは信用できんが言うだけならただだ。

「誰にもばれずに折木のクソ野郎と一対一で対決。俺が今望むのはこれだけだ」

「——以上が闇の書事件の顛末だ」

「そうか」

俺はクロノに公園へ呼び出され、闇の書事件が解決されたことを知らされる。家族は俺のことを覚えている。クロノや他のやつらも俺のことを覚えている。エンペラー皇帝に確認させたところ呪いはなくなつていたそうだ。鷹丸の言つてたことは本当だつたようだ。俺は既に知つてるし、というかナハト消したの俺なんだけどね。クロノ達にはばれてはいないようだ。

「仮面の男は？」

「……僕が駆けつけたときには真っ黒焦げ状態だつたよ。一体誰がやつたのやら」

そう言いつつもクロノはジト目で俺を見ていた。

「何故俺を見る？　俺はもうたいした魔法使えないぞ？」

「なんとなくだ。闇の書の防衛プログラムを消した灰色の閃光についても目下捜索中だ。君は何か知らないのか？」

「いや、全く分からん。俺の知る未来ではなのは達が結託して化け物を弱らせてアースラの荷電粒子砲で倒してた」

「あれにはアルカンシェルって名前があるんだが」

いやいやあれは荷電粒子砲とか名前ついてもおかしくないって。

「闇……じゃないか、夜天の書の主と守護騎士、それと折木のクソ野郎の処遇はどうなるんだ？」

原作では保護観察処分で済んだんだつけか。だが折木が加担している以上罪が増え るかもしだれないからな。

「彼女達には闇の書事件解決の功績もあるし、保護観察処分程度で済みそうだ。しばらくは奉仕活動だろう」

なんだ、結局奉仕活動で済むのか。死人が出てないというのもあるし、俺が言つても仕方ないかもしだりんがリンカーコアを碎いたのはリーゼ姉妹のどつちかだし、こいつらはグレアムのおっさんが責任とつて辞職すりやモーマンタイだろ。だからこそドサクサに紛れて爆殺したんだからな。あのシアハもどきは結構使えるからまた作ろう。

それに管理局も夜天の書の主とその守護騎士、それにニアSランクの魔導師を加入させることができるのでからこれくらいはするだろう。

フェイトはプレシアさんの裁判が終わり次第一緒に住むことができるらしいが、それまではハラオウン家が預かることになつてているとか、両親がいない折木はあのまま八神家に居候することになるとか、今回の件でなのは達に管理局から勧誘の話があつたこととか、ちなみに俺はリンクアコアをダメにしたことになつてから勧誘はない。

「……そういえば、さつきから気になつてたんだが、髪はどうした?」

「切つたに決まつてるだろ」

やることが終わつた俺が真つ先にやつたのは散髪。髪が長くて鬱陶しいし、洗うのは大変だし、慣れればそうでもないが動き辛い。もう踏み台演じることもないしバツサリ切つてすつきりした。長さはクロノやユーノと大して変わらない。両親や智葉からもこつちの方が似合つてるとか言われたし切つて良かつた。

「そうだ、仮面の男に伝言頼めるか?」

「は? まあ、いいが」

「皮肉を込めてこう言つといてくれ『災難だつたな』つてさ」

さて、クロノと別れて暇になつてしまつた。もうやることといえば鍛錬くらいしか思いつかない。魔力はもう鍛えても仕方ない領域までくるし、しばらくはまた波紋と黃金長方形探しでもするか。

鷹丸は俺と折木が戦う場を用意して指定の時間にそこへ俺と折木を送ることを約束した。世界から隔離されているから誰も邪魔できない、誰も気づくことはない、正々堂々一対一の勝負ができると言つていた。他にやることもないし、もし折木をボコボコにする機会が巡つてくるのなら嬉しい限りだし、何より俺自身の因縁に決着をつけたい。

年が明けた午前0時に戦いは始まる。

魔剣に関しては5日じやどうしようもない。

今思えば波紋や黄金長方形の回転つて便利過ぎて下手な幽波紋よりも使えるよな。とにかく寝る時以外は波紋の呼吸で生活し、全てに最大限の感謝をして自然界から黄金長方形を探し出す。騎兵の回転は無理だが足りない分は波紋と魔力の相乗効果で補え、理論上はいける筈。あれは人一人では回転のエネルギーに限界があるから馬の力を借りるのであつて、それは必ずしも馬でなければいけない理由はない。

今更鉄球を使つたつて仕方ない。だから割れないシャボンを回す。これぞダブルシーザーのコラボレーション（ジャイロの本名は英語読みでジュリアス・シーザー・ツェペリ）だ。以前できた抉るような一撃ができるだけコンスタントに放つことができるよう特訓しまくる。

切つた髪は何かに使えないかとつておいてあるけど何に使おう。昔は綺麗な髪つて桂とかの原料になるから高く売れたらしいね。今でも髪の毛を買い取ってくれる店はあるけどあんまり聞かないし。洗つた後にマフラーにでも縫い付けて波紋の伝導率が上げられるか試してみよう。

スタンド

決戦つて今さツ！

俺は指定の時間に何処かへと飛ばされる。場所はローマのコロッセオみたいな歴史ある闘技場だ。コロッセオつてよおおおお、『殺せよ』つて聞こえねえかあああ。

「なつ、神代！」

目の前にいるのは既に来ていた折木。

「俺が戦う相手はお前なのか？」

「お前が何を聞かされたのかは知らんがてめえが戦う相手は俺だ」

折木は少し沈んだ表情でこちらを見ている。罪悪感でも感じているなら今すぐ喉を搔き切つて自害するといい。

「済まなかつた。俺のせいでお前のリンカーコアが……」

俺は何も言わずにただただ折木を冷たい表情で見ているだけ。
「でも仕方なかつたんだ。俺ははやてを助けたかつた。だから「言いたいことはそれだけか？」

俺は指をパチンッと鳴らして王の財宝から宝具を数本展開し投擲する。

「うわっ！」

だがそんな簡単に当たる筈もなく、折木はいとも容易く宝具を回避した。

「な、何をするんだ!?」

「謝るだけならインコでもできる。反省だけならサルでもできる。本当に悪いと思つて
るんならその罪悪感でさつきの攻撃を受けるべきだつたんじやないか? できないよ
な? 後、八神はやてをめえの免罪符に使つてんじやねえよ。つまり『はやてのせい
だから憎むんならはやてを憎め』つてことだろ?」

「ち、違う!」

「何が違うのかはつきり教えて貰いたいもんだね」

波紋の呼吸で肉体を強化して折木に殴りかかる。折木は受け止めるが、俺は波紋を
纏つて攻撃しているからまともにくらえればかなり痺れる。

「うぐっ!? 今のは一体?」

「またガードしたな? 結局お前は自分の身が可愛いから他人を犠牲にしておいて、『救
う救う』とほざくただの独善者なんだよ」

「違う! 俺は皆を助けたいだけだ! でもお前はハーレムハーレムつて皆を困らせて
ただけじゃないか! 皆は人形じやない、生きた人間なんだよ!」

折木は俺の発言に対してもうどう頭にきたのか、逆切れした。
よし、殺そう。

〔皇帝、全リミッター解除。全力でやつの心を折るぞ〕

「今の発言には正直俺もカツチーンて来たぜえ」

身体が軽い。全身につけていた重りがなくなつてさっぱりとした気分だ。力が間欠泉のように噴出してくるようだ。この一年間で俺は相当強くなつていたらしい。

「な、なんだこの桁外れの魔力は!? お前はリンクアがダメになつた筈じゃ……」

折木は動搖を隠せない。無意識の中に俺を警戒してデバイスを起動。バリアジャケットを着て戦闘態勢になる。

「お前の中じやそうなんじやねえの？ お前の中ではな」

全力で戦うのは俺も初めてかもしない。俺もバリアジャケットを着て戦闘態勢になる。あの頃の自分とは決別するという意味でデザインは変更してFFのザックスの服。背には神喰^{ゴッド}ら^{イータ}いの魔剣を帶剣し、右腰には皇帝^{エンペラー}のホルスター、手に嵌めてるグローブは石鹼水が染み込ませている特別製を使つていて。そしてザックスはつけていないがこれまた特別製のマフラーを首に巻いている。

「マスター、落ち着いてください。貴方は今まであいつと戦つて負けたことがありますか？ 魔力は高くても技術は大した事ありません。それにシグナムに師事した半年間で貴方は今まで以上に強くなつた筈。臆していては勝てる勝負も勝てませんよ……ああ、そうだな。落ち着いて戦えば負けることはないよな」

やつのデバイスが余計なことを言つて折木を落ち着かせてしまつた。だが、これはこ

れで改めてあいつの心をへし折ることができることができるから良かつたかもしねない。それにどうせ叩き潰すなら本気のあいつを叩き潰したい。

俺は開戦の合図として王の財宝ゲート・オブ・バビロンから宝具を一本上に投擲した。

「あれが落ちたら試合開始だ」

打ち上げられた宝具は回転しながら下へと落下していき、地面に突き刺さる。

最後の勝負が始まつた。

第18話

戦いが始まった瞬間に銃声が2回響く。俺は打ち上げられた剣が地面に突き刺さる直前にホルスターから銃を抜いて腰だめで撃つたのだ。

「あ、ア、ア、足……がア」

その2発は見事折木の両足を撃ち抜く。折木は剣を地面に刺して杖のようにして寄りかかったお陰でそのまま膝を付かずに済んだ。泣き叫ばない辺りにやつの精神の強さを感じられるが、これで滅多な高速移動はできない。未来視をしていれば避けられたかも知れないのに、俺を侮つたばかりにやつは足を封じられた。

『銃は剣よりも強し』ってやつか?』

〈ンツン、名言だなそりや〉

やつは額に脂汗をかき、足の激痛に顔を歪ませながらも、持ち直そうと俺を見る。その目は俺の銃に向いていた。

「ピストル……? お前の武器は王の財宝じや……」

「ああ、あれ? あれは呼び動作に時間が掛かるしお前に対してだと先手を取られるからな。その点こいつは宝具ほど威力はなくても確実にお前の脚を封じられる。そんな

風に、な

俺はもう一度引き金を引いた。次に狙うのは右肩。今度は利き腕を使えなくしてやる。いきなり脳天ぶち抜いて終わりにしてもつまらないからそれは最後だ。

銃というものは避けるのは難しいとされているが、プロは銃口を見てある程度銃弾の軌跡を予測できるらしい。折木も痛みに耐えながら横へ跳んだ。

だが甘い。コイツの弾丸は俺の思いのままに動かせるのさ。

「な、何!? 軌道が曲がって！ し、しまった!!」

コイツだつてデバイスなんだぜ〜〜ッ。俺をナメきつてそこんとこ予測できなかつたお前の命とりなのさあーー。

さて、アブドウルは来てくれないぜ。こいつをどう処理するか見せてもらおうか。
弾丸はそのまま弧を描いて折木の右肩を撃ち抜き、

「ハア！」

訂正、撃ち抜く前に割り込んできた何者かの剣撃によつて破壊されてしまった。

「……誰だお前？」

目の前にいるのは茶色の髪を腰まで伸ばしている女剣士。全く見覚えがない。そもそも今ここにいるのは俺と折木だけの筈だが、鷹丸に一杯食わされたか?

「お、お前は一体？」

驚いているのは尻餅をついて立ち上がりれない折木も同じのようだ。

「この姿を見せるのは初めてになりますね。この声で分かりませんか？」

「つ!? もしかしてお前デイアか!!」

コイツがある口の悪いデバイス?

「おい皇帝^{エンペラー}、どうなつてやがる。こんな話聞いてねえぞ」

〈……そういう仕様なんじやね?〉

成程、全く納得できん。

「お前は人間化とかできねえのかよツ」

〈マシンガンになれるぜ。コントロールできねえけどよ〉

折木は人間化したデバイスに支えられながら立ち上がった。そして、デバイス人間は俺を睨みつける。

「貴様、卑怯な!」

「卑怯だあ〜? 一対一だつてのに二人で来るてめえらにだけは言われたくねえな〜」

足を潰したとはいあいつだつてチート仕様なんだからそのうち回復しちまう。回

復したら本格的に一対一になつて俺が不利だ。

「私はマスターのデバイスだ。人間化しようともデバイスであることには変わりはない」

「そういうの屁理屈つて言うんじゃないの〜? それとも屁理屈言わなきや傲慢で全然

成長してない魔力馬鹿にも勝てないほどお前のマスターがポンコツつてことなのか
なあ～？」

「貴様、私のマスターを侮辱するな!!」

デバイス人間デイアは細身の剣、レイピアかなにかだと思うが、それで突きの構えで猛烈な速度で突進して来た。

突進からの突きの攻撃、その速度は『シルバー・チャリオツツ』（甲冑つける方）にも匹敵するだろう。だが俺は位置を少しずらして、デイアの足を引っ掛けた。

「えっ！」

俺を貫かんと全身の体重を前に乗つけていたことが仇になり転倒。勢いよく地面に顔から突っ込んでそのままガリガリと地面を擦つた。ここまで簡単に引っかかるとは思わなかつた。見てるだけで凄く痛そう。

「ううつ……」

泣きそうな目でこちらを睨んでいる。その綺麗だつた顔は血と土と涙で見ていられないレベルにまで落ちている。

しかし、この神代劉牙、容赦せんッ。

「仙道波蹴!!」

グシャグシャになつた顔に波紋を込めた膝蹴りを容赦なく見舞う。女に攻撃するの

はためらいがちだつたが、最近そうでもなくなつた。女だろうが男だろうが敵は容赦なく潰す。

「デイア————!!」

俺の一撃で人間化が保てなくなつたのか、元の剣の姿に戻つた。厄介だから使えなくしておこう。コロツセオの一番高い所へ目掛けて放り投げた。剣はコロツセオのてっぺんに突き刺さる。

「デイア!!」

デバイスを回収しようと撃たれた足を引きずりながらノロノロと歩く折木。本人は必死に走つているつもりだろうが、格好の的だ

神喰らいの魔劍を地面に突き刺し、両手を擦り合わせる。

「喰らつてくたばれ！」波紋シャボンカツター

高速回転させたシャボン玉は刃のように鋭くなり、足を集中して切り刻む。

「があああああああああああ!!」

このシャボンも特別製だ。破壊しようとすればシャボンマインと同じく爆発する。

そしてその威力は以前のシャボンマインとは比較にならないほど強化されている。今回は爆発せずに空中に浮いたまま、しかし滯空した状態で下手に刺激を与えればボンツだ。

「くそつ……」

「なあどんな気持ち？　今まで下だと見下してきたやつに地べたを這いずりまわされて
いるつてどんな気持ち？　教えてくれよ、なあ？」

足をやられて芋虫のように腹這いになる折木を今までの恨み晴らすかのごとく嘲笑
う。

「何で……」

「ん？」

折木の声には怒りが籠っている。

「そんなに力があるのにつ、それだけ強いのに、何で！　それだけ強ければもしかしたら
もつと上手くプレシアさんを、フェイトの母さんを救えたかもしれないのに！」はやて
やリインフォースも悲しまずに済んだのかもしれないのに！」

呆れてしまつた。一体コイツは何を言つてるんだろうか？

「……で？　何が言いたいんだあ？　偉そうに意見をたれるならハツキリ言え」

「実力を隠す必要なんかなかつた！　皆必死思いで戦つてたのに！　お前は今まで手を
抜いてたつてことじやないか！　お前がしつかりやつていれば「もういい黙れ！」ガツ
!?」

怒りのあまり折木を蹴り飛ばす。二転三転して仰向けになつた折木を睨みつけた。

こいつは何も知らない。しかし知らないからって俺に意見する権利なんてない。

「俺のリンクアを潰す手助けをお前がそれを言うのか？」

俺の台詞に折木は言葉を詰まらせる。やつは俺を助けて魔力を奪うことを優先した。もし原作通りフェイトが仮面の男に捕まつたら折木は魔力を奪つただろうか。

「仕方ないじゃないか！ それに俺は転生させてくれたお爺さんからこの世界の魔法少女達を守つてくれつて頼まれたんだ。悪の転生者が狙つてるからそいつらから守つてくれつて！」

……成程、そういう仕組みだったのか。俺に対して少々冷たいところがあるなとは思つていたが、これが原因か。別にコイツに嫌われようともどうとも思わないが、つくづくあのクソ神の思惑通りことが進んでたんだと思うと反吐が出る。

「俺はな！ そのお爺さんに呪いをかけられてたんだよ！ なのは達に嫌われるようにお前に全ての功績を譲るよう！」

「何を……言つている……？」

「そう、呪いだ。お前の踏み台を演じなければみんなの記憶から俺が消える呪い。分かるか？ 家族や友人から忘れ去られる恐さが。どんなに頑張つても赤の他人の功績になつちまう虚しさが。言つたら呪いが発動するから誰にも言えなかつた。だが俺はせつかくの家族を失いたくなんてない、一人ぼつちになんてなりたくない。自己流とデ

バイスに習いながら魔法を覚えた。波紋みてーな技術も覚えた。何があつても対処できるように色々策も巡らせた。無論てめえの尻拭いもだ

「そんな……嘘だ……」

折木の顔が蒼白になつていく、今まで信じていたものが覆されようとしている。

「皆を助けるとほざきながら『神の奇跡』ではやての足を治さなかつたのは何故だ?」

「お前ツ、何でそのことを「質問に質問で返すなあーっ!」お前は学校で疑問文には疑問文で答えろとでも習つているのかツ!」「

「……やろうとした。だけどその前にお爺さんから止められた。その能力をもつと必要としている人が必ず出てくるつて。はやはちちゃんと助かるから大丈夫だつて。現にはやはては助かつた」

そりやそうだ。きちんと原作通りに進んでいれば、はやはての足は治る。こいつは原作を知らないのだからそれは別にいい。

「その能力を最も必要としてたのはリインフォースだつた! なのに……使えなくなるなんて」

俺はそこに一つの毒を落とす。

「……そこにお前はいるのか?」「えつ?」

「お前を転生させた爺さんの言う通りになのはを助けて、フェイトを助けて、はやてを助けて。そこにお前の意思はあるのかつて聞いている」

折木は口を閉ざす。強制的にやらされた俺と違い、こいつは自由があつた筈。だが、クソ神の言う通り動いていた。そうさせられてると知らないで。さも自分の意思でやつたことだと思い込まされて。

「で、でも。自分自身でも助けたいと思つて」

「じゃあ何故神の言葉を鵜呑みにしてはやてを助けなかつたんだ？ それには達は助けておいて何で俺は助けてくれなかつたんだ？ 目の前で仮面の男に身体ブチ抜かれてたのによ。それともお前の正義とやらは女の子に対して限定なんじょーか？」

「あ……」

「堂々巡りだ。苦しい言い訳。矛盾の連続。こいつはクソ神の言葉を信じすぎた。これはもはや洗脳、精神操作の領域だ。

「お、俺は……」

「正直この戦いは俺がお前にするただの八つ当たりだ。お前が結局のところクソ神の操り人形だつたことには同情するが、それとこれとは話が別だ」

折木は目を伏せた。その胸中がどうなつてているのかは分からない。ただ、言い訳は止めたようだ。

「……俺は、どうしたらいい？」

「はあ？」

「どうしたらいいか分からない。あのお爺さんからのアドバイスもあれからなくなつた。もうどうしたらいいか分からんんだ！」

何かに依存した人間は依存していたものがなくなるどころなつてしまふのか、覚えておこう。

「知るか、それこそお前で決めろ。俺はもうお前の踏み台じやない。だから俺は今までの踏み台としての人生に終止符を打つ意味合いでお前を倒す」

折木はとてもゆっくりとだが、立ち上がる。俺と話をしている間に足の怪我が多少は癒えたのだろう。それくらい承知の上だ。

「それは……お前が決めたことなのか？」

「だつたらどうした？」

折木は近くにあつた剣を抜く。その剣は最初に俺が試合開始の合図として撃ち出した剣だ。剣を構えて俺に斬りかかってきたのだ。

スピードはそれ程速くない。身体をずらしてあつさりと剣を避ける。

「うぐっ！」

やつはブレーキをかけようとして顔を苦痛に歪ませる。それも一瞬のこととて、またす

ぐに剣を振りかざして斬りかかってきた。

「……無駄だ」

身体をすらして、腹に波紋を込めた拳をお見舞いする。避ける事すらできない、「つ！」

それでもなお、踏みとどまる。波紋を込めていた拳をお見舞いする。避ける事すらできないんだが。

「何がしたいんだお前は？」

「俺……は、本気……のお……前と、ハア、戦つて……今度……こそ勝つう」

負傷し、消耗した折木は一見して息も絶え絶えで軽く殴つたら一撃で倒せそうだ。

「それがお前自身が決めたことだと言いたいのか？」

折木は大きく頷く。もう声を出す体力すら惜しいのか。

俺は油断はしない。窮鼠猫を噛むという言葉がある。だから俺はやつを全力で倒す。やつはラディカル・グッド・スピードを使う様子がない。自分の身につけた力だけで俺と戦うつもりなのか。だから俺も自分が身につけた力で迎え撃つ。

波紋の呼吸、波紋エネルギーを全身に巡らせる。それに合わせてやつも剣に螺旋の炎を纏わせる。それはまるでシグナムの紫電一閃に似ている。

「業炎一閃！」

「山吹き色の波紋疾走!!」

炎の剣と光の拳が交差し、戦いに終止符を打つた。

◆
「終わった?」

いつの間にかいた鷹丸。もしかしたら何処かで見ていたのかもしれない。

戦いは俺の勝ちだ。だが、最後の一撃は相当強かつたとだけ言つておく。

「終わったよ」

俺は後ろに前のめりになつて氣絶している折木に剣を向ける。別に止めをさすわけじゃない。

『俺、神代劉牙のことについて口外すること』を禁じる

剣の先から淡い光が出て、折木の頭に吸収された。それと同時に折木はこのコロッセオから姿を消した。元の世界に帰ったのだろうか。

「ああ、僕の能力が一つ消えてるかと思えば、その魔剣か」

俺が真っ先に奪つたとても厄介だと思った能力。『転生者を制約で縛る力』は折木に對してとても有効な能力であった。最初から使つたらつまらないからこれも最後まで

とつておこうと思つていた。神喰らいの魔剣ゴッド・イーターが奪つていられる期間はランダムで定まつてない。再生能力はナハトが消滅したせいなのかどうかは知らないがすぐに消えたし、逆にさつきの神から奪つた能力は数日経つても消えてない。法則性が全然分からん、もしかしたらストックしておけるのかもしれない。

こうして俺のA, s編は幕を閉じたのだつた。

最終話

私、高町なのはです。この一年間は本当にとつても色々なことがありました。

フェイトちゃんやユーノ君と出会ったジュエルシード事件。最初はユーノ君に素質があるとか言われて驚いたけど、今思えば少し懐かしい気分になります。ちゃんとお話をできなかつたフェイトちゃんともちよつとずつだけど心を通わせることができるようにになりました。それに和人君の頑張りもあつてプレシアさんとも仲直りすることができて良かつたです。でも、虚数空間に仲良しの和人君が落ちちゃつたことはとつても辛いことでした。

そんな彼と再会したのはその半年後に起きた闇の書事件、その時和人君は敵となつて私達の前に姿を現しました。神代君が戦つてくれたお陰で和人君とは戦わずには済んだけれど、実際に戦つたら動搖して戦えなくなつていたと思います。和人君はリインフォースさんを助けたかつたけど、それは叶わぬ願いと諭されて、私もとつても悲しい気持ちになりました。リインフォースさんが消えてからはやでちゃんや守護騎士さん達は少し沈んでいましたけど、いつまでもそうしてられないって、とつても強い人達です。

それと私達の周りにも変化がありました。さつき言つた和人君と神代君です。和人君は年が明けてからしばらく部屋に引きこもつてしまい、私達はとつても心配です。休みが終わつてからもしばらく学校には来ないし、顔は青白いし、それに訳を聞いても話してくれません。

でも一番変わつたのは神代君だと思います。リンカーコアが碎かれてしまつて、とつても辛い思いをしてるんだろうつて、お見舞いに行つても曖昧に頷くだけでした。クロノ君は「放つておいてやれ」と言つて、あんまり関与しようとしません。そして学校が始まつて神代君が登校して来て私達は神代君の変わりように驚きました。長かつた髪の毛をバツサリ切つているし、いつものように馴れ馴れしく話しかけてこなくなりました。おまけに「今まで迷惑かけてごめん」って謝られてしまいました。最初はこういう日もあるだろうつてアリサちゃんが言つてましたけど、それが一ヶ月続くと反つて不気味になります。それに、気になつて声をかけて見たら、私のことを『なのは』じゃなくて『高町』つて呼んでいるんです。リンカーコアがダメになつちやつたことが神代君にどんな影響を与えたんだろうつて思いました。

和人君は学校に復帰してからはいつもと違つて、何だか男の子らしくなつていました。それで、登校した日に神代君を屋上に呼び出して、それから少しすつきりした表情で帰つてきました。一体何の話をしてたんだろう。

私は今回の事件を通して、こんな私でもできることがあるんだって夢を見つけることができました。きっと簡単な道じゃないかも知れないけど、他のみんなも自分の道を進み始めてる。私もフェイトちゃんやはやでちゃん、そして和人君達とこの魔法使いつて夢を追いかけてみたいって思います。



決戦からしばらく時間がたつて、正直あの時の俺はテンションがおかしくなつてたと数日ほど悶絶する日々が続いた。そして折木は精神的ショックでしばらく学校を休んでいる。やつちやつたぜ。なのは達にも謝罪はしたけど、まあ好感度アップとか望んでるわけじゃない、というより智葉との約束もあるしこれからほとんど話すことも無くなるだろう。

そして今、俺は復活した折木に屋上に呼び出されている。何というか目つきが違うね。

「今まで済まなかつた。俺のせいで神代が辛い思いをしてたなんて知らなかつたんだ。俺もちゃんとお前と向き合うべきだつて思つたんだ」頭を下げる。正直どう返していいか分からない。俺の中ではもう終わらせたこ

とだ。今更蒸し返されても困る。というよりよく半殺しにした相手と顔合わせようつて気になれたな。

「……目的は何だ？」

「ただ、謝りたかった。それと……」

「？」

「いつか、お前に勝つてみせる！」

突然何を言い出したかと思つて一瞬ポカンとした顔になつたんだろう。そしておかげで少しおかしくて少し笑つてしまつた。勝利宣言されたのに、不思議と嫌な気分ではない。寧ろ少し愉快な気持ちになつた。相変わらずコイツのことは好きになれないが、その挑戦意欲は買つてやる。

「また、勝負する機会があつたらな」

もしまだ勝負をすることがあるのなら、今度は純粹に自分達が身につけた技術だけで戦おう。言葉は交わさなかつたが、その気持ちは心で理解できた。まあ、勝負する機会があればの話だけど。

とまあこんなカンジに色々自分が仕出かしたことについての精算もできる限りしてきた。

おつと、もう一つ約束が残つてたな。

「フフツ、約束覚えててくれたんだね」

智葉が持っているのはバーゲンダッシュ春の新作、桜味。前回食べた時よりも気候は暖かい。俺もスパークルの抹茶味を食べる。うん、美味しい。

「美味いか?」

「うん、ちょっとしょっぱいのがきた後に甘くなる。ほら」

智葉はあの時のようにスプーンで掬つて俺に差し出した。俺はちょっと笑つてアイスを食べる。美味いけどどの辺が桜なのかよく分からん。

「ホレ、お返し」

俺も抹茶味のアイスを少し多めに掬つて差し出そうとしたら智葉が食いついてきた。
 (お兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キスお兄ちゃんと間接キス)

「……スプーン咥えたまま何してんだ?」

「はっ、ごめん!」

恍惚の表情から正気に戻った智葉はスプーンから口を離す。
 しばらくは会話も無く、二人はアイスを食べていた。

「……お兄ちゃん」

「？」

智葉はいつになく真剣な表情でこちらを向いている。

「お兄ちゃんは、私がお兄ちゃんのことが好きって知つてた？」

「……それは兄妹として……って意味でか？ それとも」

「うん、私はお兄ちゃんのことが男として好き」

智葉が俺に好意を寄せてくれていることは分かつていて。子ども同士だけれどキスもしているし、少なくとも何とも思つてない相手とキスするほど安くないだろう。

「ごめん、兄妹だしこんなの変だつてことくらい分かつてる」

「……確かに兄妹同士で結婚は法律で禁止されてるな」

「でも、ちゃんと告白したかつた。他の女にむざむざ掠め盗られるのは嫌だつた。後悔だけはしたくなかった」

気がつけば智葉の目から涙が零れ落ちていた。俺は無意識の内に彼女を抱き寄せていた。

「ひや!?」

抱き寄せればほのかなラベンダーの香りが鼻腔をくすぐる。そういえばこの前母さんの目を盗んで香水使つてたのを思い出してクスリと笑つた。

「ああ可愛いなあもう！」

「え!?　え!?

彼女の身体の柔らかい感触が全身で感じられて、その体温は俺を幸福な気持ちにさせてくれた。

(わ、私お兄ちゃんに抱きしめられるううううううううううううううううううううううううううううううううううううう!)!

この娘が心の底から愛おしい。心の支えになつてくれた彼女を今度は俺が全身全霊で守り抜く。

「あわわわわわわわわ」

「俺も好きだよ、智葉」

俺は生まれて初めて心からの告白をした。そして智葉は氣を失った。



あれから10年。智葉と正式に付き合つてからもう10年だ。俺達二人は私立聖祥大学付属高等学校を卒業後は都内の大学へと進学。そして入籍した。今は都内のマンションで二人とも暮らしている。

両親は反対するかと思つたが、大賛成だった。というか俺と智葉が血が繋がつてないことを知つて彼女はショックを受けるかと思つたが「大勝利!!」驚喜していた。その経

験談を元に『お兄ちゃんだけど血が繋がってなければ問題ないよねつ』とかいう小説を書いているとかいないとか。

あれから大して魔法は使っていない。波紋の呼吸は止めてないが、黄金長方形探しも止めてしまつた。智葉に波紋を教えるべきかちよつと悩み中だ。

魔導師組みが今何やつてているのかはもう知らない。中学からはほとんど話さなくなつたし、あいつらは中卒だし、だんだん疎遠になつていつた。だが、折木のやつは何度か俺にメールを送つてくる。

俺ももう19歳か、そういうえば19歳つて何かあつたような。……と思つたが、忘れてしまつた。忘れるくらいだから別に大した事じやないだろう。

智葉は美しく、大人っぽくなつてゐる。中学、高校と何人も告白されたらしいが、全員撃沈。俺以外愛するつもりはないと断つたそうだ。逆恨みされて闇討ちされたこともあるが、正直鉄パイプくらいじや俺はどうにもならん。機関銃でも持つてこられたら少し話は変わるけど。

〈平和だなあおい〉

「ああ、そうだな」

すっかり出番がなくなつた皇帝はもつぱら話し相手をしてくれる。あの鷹丸とかいう神も俺に連絡を寄越すことはなくなつた。

「ふわあ、兄さんおはよう

「おはよう」

隣で寝ていた彼女を起こしてしまった。中学に上がった頃から子どもっぽいからと
いう理由で『兄さん』と呼び方を変えている。結婚してもその呼び方は変わらない。
故かと聞いてみたら『どんな関係になつても兄さんは兄さんだから』らしい。

「今日つて一限目に何かあつたつけ?」

「何もなかつたと思う。もうちよつとのんびりしていられるね」

二人は向かい合つて微笑みを交わした。

——魔法少女リリカルなのは——踏み台、（強制的に）任されました——

完——